

REVIEW OF DIVISION OF URBAN AND LIFE DESIGN,
FACULTY OF ARCHITECTURE AND BUILDING ENGINEERING,
KANAGAWA UNIVERSITY

RAK
vol. 18



【特集】破壊と復興 戦後東京のヤミ市に見る市民の力



目次

・特集 破壊と復興 戦後東京のヤミ市に見る市民の力	1
プロローグ 破壊と復興 ～人々が戦争から立ち上がるために～	2
ヤミ市 市民の手による復興建築	4
吉祥寺ハーモニカ横丁	6
新宿ゴールデン街	12
ヤミ市的空間を比較する	18
考察 破壊と復興	20
学生座談会	22
編集後記	24
・建築探訪 西和夫先生と復元研究 -三溪園鶴翔閣の復元整備とその後について-	25
西和夫先生と鶴翔閣	26
編集後記	34
・2021年度学生優秀作品紹介	35
修士論文	36
修士論文 全作品リスト	56
卒業設計・論文	57
卒業研究 総評	72
卒業研究 全作品リスト	75
学部設計課題 優秀作品	77
・学外受賞	97
・今後のRAKUに関するお知らせ	102
・教員一覧	103
・沿革・クレジット	104

特集

破壊と復興

戦後東京のヤミ市に見る市民の力

2022年は歴史に残る年となるだろう。ロシア連邦がウクライナに侵攻し、近代兵器による大規模な破壊が行われ人の暮らしも国土も壊滅的な被害を受けた。その様子はメディアを通じて世界に発信され、数千キロ離れた地に生きる私たちの心に直接響き、21世紀にあっても終わらない戦争の悲惨さに加えICTなど現代の技術を駆使した戦闘行為や核兵器の存在感と恐怖、その中で復興に向け進むウクライナの人々の姿は深く記憶に刻み込まれた。

このような背景を得て本特集は組まれている。私たちの国でもっとも最近起こった大規模な戦争である第二次世界大戦下での破壊そして復興を、その一時期東京に現れた特異な都市空間であるヤミ市を切り口に調査分析・考察した。市井の人々による復興の過程とその中でつくられた都市と建築の空間、その一部は現代も生き続け、将来また起こるかもしれない破壊から立ち上がり命を継ぐ復興の糧ともなり得るだろう。過去と未来を繋ぐ“市民の建築”がそこにある。(二階さちえ)

破壊と復興

～人々が戦争から立ち上がるために～

現在も残り続ける戦争

／終わらない破壊行為

2022年の現代でも戦争は起こり続けている。2022年に戦争が始まったところ、もしくは以前から戦争中のところは、推定でも10か所以上で確認されている。私たちの中でも印象深く現在も続いている戦争が、ロシアのウクライナ侵攻である。侵攻が始まった当初、連日テレビに取り上げられ、ロシアとウクライナのことを耳にしない日はなかった。私たち自身も大学院生となり、テレビで見たときに、遠く離れたところで起きている戦争である一方、現代の世界情勢でも戦争が起きってしまうことに驚き、また遠くで起きている戦争だが知っている国名ということから身近に感じた。



ウクライナ・ボロジャンカ (朝日新聞社提供)

戦争は昔の話ではなく、現在も進行している“終わらない破壊行為”である。建物や都市のみならず暮らし、経済、文化など人間の生すべてに関わる究極の破壊行為だと考える。それにより建物、街並み、暮らし、経済、文化など形あるものから形ないものまで破壊され、人々は生きていくことが困難になった。私たちは戦争で起きた破壊行為と、そこから人々がどのようにして失ったものを取り戻し未来に向かおうと復興していったのか、建築学生ならではの視点で取り上げたいと思う。

近現代に起こった主な戦争年代表

- 1939～1945 第二次世界大戦
- 1945～1949 インドネシア独立戦争
- 1948～1973 中東戦争
- 1950～ 朝鮮戦争
- 1960～1975 ベトナム戦争
- 1964～ コロンビア紛争
- 1969～1998 北アイルランド紛争
- 1980～1988 イラン・イラク戦争
- 1991～2001 ユーゴスラビア紛争
- 2001～2021 アメリカのアフガニスタン侵攻
- 2003～2011 イラク戦争
- 2014～ ウクライナ紛争
- 2021～ バンジール紛争
- 2022～ ロシアのウクライナ侵攻



ウクライナ・プソバ 破壊された住宅を片付ける人(朝日新聞社提供)

第二次世界大戦後のドイツにおける復興政策

自国である日本も経験した戦争である第二次世界大戦に着目した。第二次世界大戦とは、1939年のドイツによるポーランド侵攻をきっかけに始まり、世界の多くの国を巻き込んだ人類史上最大の戦争である。この戦争は、日・独・伊などのファシズム枢軸国軍と、英・仏・米などにソ連を含めた連合国軍の民主主義との戦いという側面を持っていた。

日本と同様に敗戦国であるドイツでは、多くの都市が第二次世界大戦で被災し、街の大部分が瓦礫と化した。戦後、地域ごとにこれまで作りあげてきた時間の積み重ねを断絶させないという判断のもと、バロック時代の街並みや中世の街並みを取り戻すことを復興のコンセプトとした。破壊された過去を再び再生することにし、地域ごとにそれぞれ異なった復興の仕方を遂げた。それは、戦争という絶対的な暴力によって都市のアイデンティティを強奪させはしない、という強い市民の意志でもある。

南ドイツ・バイエルン州にあるニュルンベルクは、中世には帝国自由都市として栄え、手工業や商工業も盛んな伝統のある都市である。ここは、第二次世界大戦における被災面積はドイツで最も大きかった。ここでの戦後最大の課題は、歴史的に価値のあった旧市街を再建することであり、戦争破壊が起こっても残っていた中世の建物を街の中心に集め、交通規制・整備を行った。



浅草の焼け跡 (東京大空襲・戦災資料センター提供)



芝区本芝のバラックと周辺の人たち (東京大空襲・戦災資料センター提供)



上野の焼け跡 (東京大空襲・戦災資料センター提供)



東京都区部被災地図 (東京大空襲・戦災資料センター提供)

第二次世界大戦後の日本／行政による復興政策

日本では1945年4月にアメリカ軍が沖縄に上陸し、その後本土への空襲もより激化し、同年8月6日の広島への原爆投下、9日の長崎への原爆投下を経て、15日にポツダム宣言を受諾して降伏した。

終戦後、行政は東京の戦災復興計画を作り、環状道路(通称・環1から環8)を基本とした都市構造を発表した。これは関東大震災当時内務大臣だった後藤新平が震災復興計画で作成した都市構造が踏襲された。しかし、40m—100m幅の環状道路はつくられなかった。占領軍は都市計画に冷たく、占領政策に首都復興の文字はなかった。さらにドッジ・ラインによる緊縮財政方針などによって東京の戦災復興事業は大幅に縮小された。

行政による復興政策は占領軍からの圧力により実行できず、めどが立たない状態であった。そんな中で人々には自らの力で復興することが求められた。

ヤミ市 市民の手による復興建築

行政の復興計画が遅れる中、人々は生きるため自分たちの手で“復興建築”を建てた。それがヤミ市である。



浅草ヤミ市誕生当初の露店の様子 (画像提供: 昭和館)



上野駅前ヤミ市の様子 (画像提供: 毎日新聞社)

市井から始まる復興

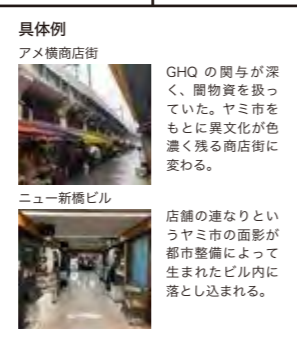
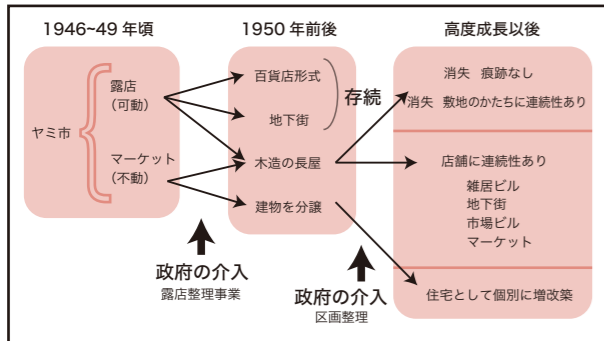
戦争により、多くを喪失した人々の生き延びを支えた都市の機能としてヤミ市があげられる。

ヤミ市は行政によって作られたものではなく、市井の人々が自ら作り上げた、立ち上がる力の象徴だといえる。政府の取り締まりにより消滅したが、現在でもその面影を残す所や派生した商業形態が見受けられる。

ヤミ市を「建築家なしの建築」として復興建築と捉え、市井と復興建築が関わっている身近な場所を見つめることで、人と復興建築と都市がどう関わっているかを考えていく。



バラック建築が建ち並ぶ横浜 (画像提供: 横浜市史料室)



ヤミ市の変遷

ヤミ市とは

ヤミ市とは闇物資を扱う市場という意味由来した用語と考えられ、政府による流通規制を守らず、公定価格以外で売買された闇物資を扱う市場と定義されている。しかし、闇市という言葉は使用する主体や場所、時代によっても含意するものが異なり、わずかな時期や場所の差でも意味するところが異なるなど多様な用いられ方がされている。したがってヤミ市をひとつに定義することは難しいといわれている。

また、ヤミ市の表記は『ヤミ市』と『闇市』の2種類がある。戦中・戦後の日本では食料不足だったことにより配給制が始まり、食料や生活の必需品を十分に得ることができなかった。人々にとってヤミ市とは生きる上で大切な市場であった。そこから親しみをもって『ヤミ市』という言葉に表すようになった。一方で、戦後復興のための都市計画においてヤミ市は邪魔な存在であり、闇物資の売り買いをしている市場として行政にとっては取り締まるべき市場であった。そのことから、戦後当時の行政関係者は『闇市』という言葉で表現していた。『ヤミ市』と『闇市』。その表現には認識の違いがある。

立地としては人通りの多かった場所、具体的には戦前の繁華街、駅や乗換場所周辺、主要道路などがあげられる。さらに、空襲焼失地と焼け残ったところの境界にヤミ市ができたともいわれている。ヤミ市は戦争による被害を受けた人々が生きる上で作り出し、主に被災者、復員兵、引揚者、テキヤ、在日外国人など市井の大半の人々が関わっていた。

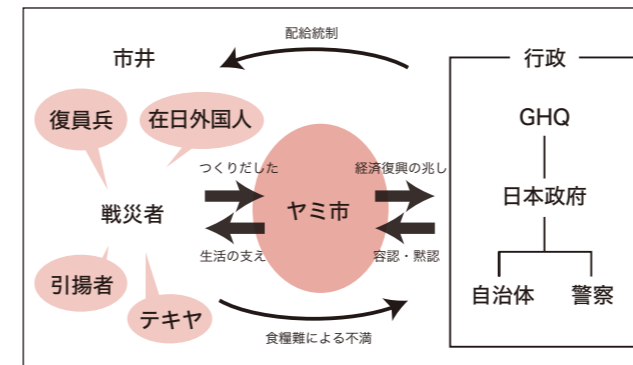
誕生当初は路上取引をする露店として、地面の上に莫産を敷き、商品を売り出していた。そこから、焼け跡などに残された材料で建設される仮設の建築物であるバラック建築へと転じ、道路に連なるように作られていった。ヤミ市がなされる商業空間の形態は、区別する移動式の『露店』と固定した長屋形式で建築の体裁を整える『マーケット』に言い分けられている。

ヤミ市の消滅と名残

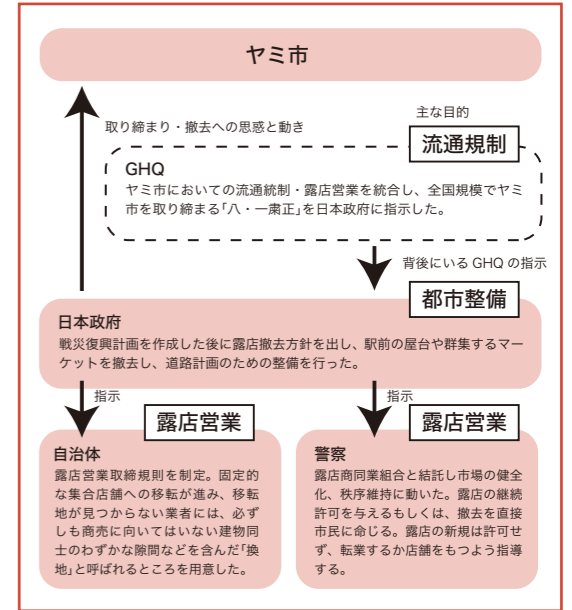
ヤミ市は 1945 年から 1950 年の間の 5 年間しか存在しなかったといわれている。闇市はいままで黙認・協力していた行政が取り締まりを強化したこと、火災により焼失したことによって消滅してしまった。取り締まっていた行政の主体として GHQ と自治体と警察があり、これらの取り締まりは大きく流通規制、露店営業、都市整備の 3 点にあった。

GHQ は物資の横流しによって正規の流通が阻害されること、安全面や衛生面、テキヤと呼ばれるヤミ市を仕切っていた露天商団体が民主化を目指す日本にふさわしくないと考え、これらを問題視した。そこで全国規模でヤミ市を取り締まる「八・一肅正」を行った。

GHQ、また日本政府の指令で動いた自治体と警察の取り締まりでヤミ市自体は消滅したが、他の形へと変容していったものもある。例えば、ヤミ市のバラック建築・長屋形式による間口の狭さから飲み屋街に発展し、そこから横丁という街並みに変わった例がある。他にも、長屋一戸の幅ではなく二戸の幅で小売店にすることで、商店街へと発展させた例もある。ヤミ市自体はなくなったが、いまでも現代に面影を残し、都市の商業機能として役割を果たしている。



ヤミ市相關図



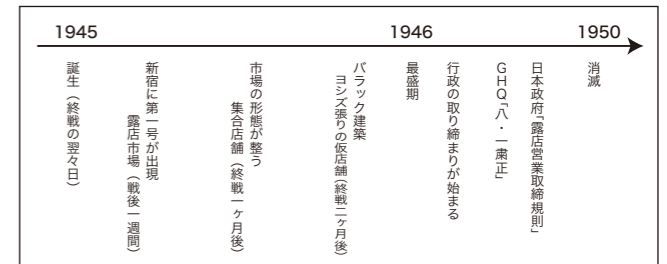
取り締まる主体の思惑と行動

日本の中枢・東京で

“商業からの復興”をみる

東京は戦前から日本の中枢機能を携えていた。第二次世界大戦の東京大空襲により都市の形がなくなりかけていたが、それでも復興により都市の中枢機能を保ったまま、現在も首都として確立している。

その東京にも多くのヤミ市の跡が見られる。戦後の日本経済復興の鍵ともなるヤミ市、その面影を首都東京で見ることにより、市井の人々が作りあげた復興をみていく。本特集では、いまでもヤミ市の面影を残しながら機能している『ハーモニカ横丁』と『新宿ゴールデン街』を取り上げた。



ヤミ市の一生

ヤミ市を経て復興した街 その1

吉祥寺ハーモニカ横丁

吉祥寺はサブカルチャーの発信地として知られ、多様な人々が集まる繁華街。駅前一角を占めるハーモニカ横丁はヤミ市の面影を今もよく残している。



位置／周辺環境／人口

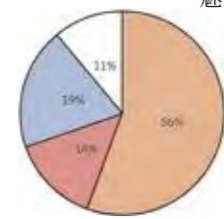
ハーモニカ横丁は東京都武蔵野市吉祥寺本町の商店街であり吉祥寺駅前エリアの中心に位置している。吉祥寺は駅の北側にサンロード商店街、ダイヤ街といった商店街がありつつヨドバシカメラ、東急百貨店、PARCO など大型の店舗も存在し駅周辺で買い物がしやすい。

駅の南側には約42万㎡の広大な敷地を誇る井の頭恩賜公園が存在する。公園の中心には池がありその周りにはたくさんの桜が植えられている。活発な商業地域と広大な自然公園、回遊性と利便性の高さが吉祥寺の魅力である。

武蔵野市の人口は戦前から増加傾向にあり1992年から1997年までは減少した。その後、再度増加傾向になり現在も人口は増えている。



種類別店舗色分けマップ (武蔵野市観光機構 ハーモニカ横丁マップをもとに作成)



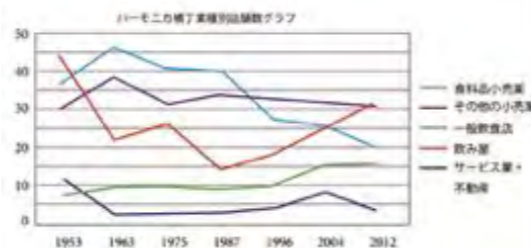
現状

間口の小さい店舗が立ち並んでいる様子がハーモニカの吹き口のように見えることからハーモニカ横丁と名付けられたことが由来である。

仲見世通り、中央通り、朝日通り、祥和会通りの4つの通りとのれん小路から成り立っており、約100軒の店舗がこの区画に存在している。昼間は食料品や日用品を求めに地域の住人が集まり、夜になるとシャッターの閉まっていた飲み屋が開き飲み客で賑わっている。吉祥寺に住む人だけではなく観光客や海外から来ている人もよく見かけた。

立ち飲み居酒屋も多くいくつかの店舗をはしごする人も多い。また通りに開けた店舗が多いことから、行く店を決めずに周りを見渡しながら通りを歩き次のお店を探している人もいて、内部も外部も多くの人で賑わっていた。

百貨店の介入によって1980年代は賑わいが薄れていたが、近年は昭和のレトロな雰囲気を残す街並みとして人々を魅了している。



出典：青弓社 編集者／橋本健二・初田香成 発行者／矢野恵二『盛り場はヤミ市から生まれた』P111

特徴：4つのメインストリート・飲食店・多様な年齢層



1 仲見世通り

「く」の字に折れ曲がった通りである。曲がり角の部分では店舗から人が溢れ出し、道にまで椅子を置き飲み客で賑わいを見せていた。通りの始まりと終わりはお寿司屋さんで、お酒を飲むというより食事をしに来ている人が多く見られ、この通りはさまざまな年代が混在している。



3 朝日通り

他の通りに比べると飲み屋が少ない。駅側は飲み屋が数店舗、ダイヤ街側は買い物を目的にくる人の通りである。東西を結ぶ通りと交差する部分には人が多く集まっていた。眼鏡市場の壁一面には自動販売機が並べられていて、閉じているように感じる。



2 中央通り

赤い提灯が印象的な通りである。全てが食に関する店舗で成り立っている。他の通りはアーケードの蛍光灯であるが、この通りは提灯のため特徴的である。夜は他の通りよりも歩いている人が多かった。また年齢層もさまざまであった。



4 祥和会通り

飲み屋と食品販売店が混在している。昼間は和菓子、漬物、花屋などの老舗の専門店に買い物客が多く集まり、夜は飲み屋が開く。午前と午後でシャッターの開いている部分が逆になり、客層も異なることが特徴的な通りとなっている。

武蔵野市の戦争被害

ハーモニカ横丁の存在する武蔵野市は第二次世界大戦により甚大な被害を受けた地域である。現在の都立武蔵野中央公園や市役所、都営武蔵野アパート、緑町パークタウンは昔、中島飛行機武蔵製作所であった。中島飛行機武蔵製作所は面積約56万㎡という広大な敷地で『零戦』や『隼』といった飛行機のエンジンを製作する工場であり国内の生産量の30%ほどを占めていたという。この工場では最盛期で約5万人が働いていた。

1944年の11月24日、B29による日本本土空襲の最初の標的となったのがこの地であった。終戦までに十数回の爆撃被害を受け、工場は廃墟と化してしまった。吉祥寺駅周辺は工場から離れていたことと建物疎開が成功したことで被害は少なかったという。

人口の面から見ると、戦前は増加傾向にあったが疎開もあり1945年(昭和20年)のみ減少している。そのため市全体としては甚大な被害であったと言える。



武蔵野町の破壊された民家 (写真提供：東京大空襲・戦災資料センター 撮影：石川光陽)



中島飛行機武蔵野製鋼第3工場の爆撃被害 (写真提供：東京大空襲・戦災資料センター)

ハーモニカ横丁の成り立ちと歴史

戦前・戦時中の吉祥寺

江戸時代に移転して以来、戦中・戦後は混乱とヤミ市の賑わい、近代では百貨店と共存する都市計画まで、ハーモニカ横丁は吉祥寺のまちを常に彩り象徴する存在だった。

1657	1659	1899	1929	1944	1945	1947	1955	1962	1971	1987
明暦の大火 『吉祥寺』の消失	武蔵野市吉祥寺の開墾開始	甲鉄道吉祥寺駅（現吉祥寺駅）開設	吉祥寺アーケード建設	建物疎開開始	マーケットの建設 駅前にはヤミ市誕生 終戦	武蔵野市発定 月窓寺が土地の使用権利を容認	吉祥寺の人口増と発展の停滞	高山研究室の都市計画案立案	伊勢丹開店 近鉄百貨店開店（現ヨドバシカメラ）	都市整備完了 駅前広場完成

吉祥寺駅前におけるヤミ市の形成

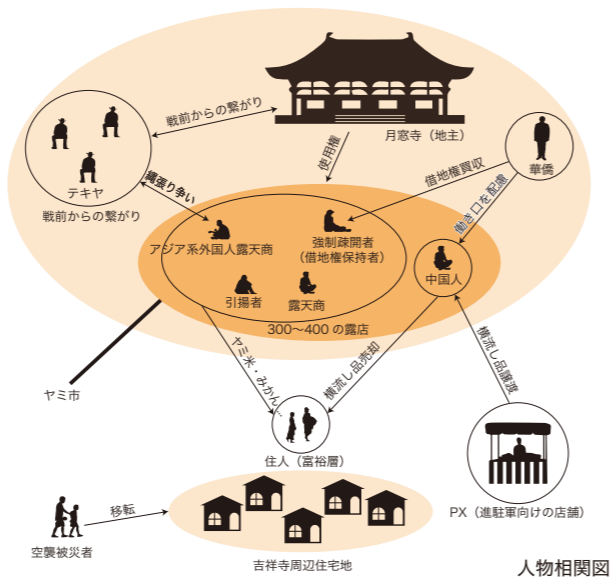
終戦後、建物疎開が行われたエリアの被害は少なく、吉祥寺には綺麗な更地が残った。被害は軍需工場の中島飛行機武蔵野製作所に集中し、周辺地域の住宅などの建物は残り、戦後空襲が激しかった地域から吉祥寺周辺に転入する人が増えた。これを機に吉祥寺は発展していく。

ヤミ市を仕切っていたテキヤ組織は吉祥寺駅前の更地を不法占拠、1坪あたりに土地を区分けし、駅前の露天商から場所代を徴収した。吉祥寺のヤミ市にはテキヤ組織だけではなくアジア系外国人の露天商もいた。終戦後にテキヤ組織が占拠した土地は月窓寺が所有者であった。月窓寺は戦前、テキヤ組織と接する機会があり、1947年夏に各関係者の代表の話し合いの末、駅前マーケットを細かく分割してそれぞれが使用する権利を認めた。

月窓寺による整理が施された吉祥寺駅周辺のヤミ市は縄張り争いの揉め事は少なく、その他の駅周辺のヤミ市とは異なっていた。

1657年、明暦の大火で文京区本郷の寺院『吉祥寺』を含む寺院群が被災、江戸幕府はこの地から門前町の住人を代換地（現武蔵野市）へ移転させた。新たに与えられた地を人々は吉祥寺と名付け、1659年から開墾を始める。中心地には被災した寺院群を建て、その中の『月窓寺』がその後ハーモニカ横丁となる土地の所有者となった。

1899年に現在の吉祥寺駅が開設されたが、当初駅前には商店は連なっていない。1920年頃から商店が並び始め、1929年、現ハーモニカ横丁の東側半分に吉祥寺アーケードと呼ばれる複合商業施設が建った。その後、戦争が始まると軍需産業都市だった吉祥寺は爆撃の対象となり、空襲が激しくなる1944年11月24日から駅周辺では建物疎開（空襲による延焼から守るため周囲の住宅など強制的に撤去し重要施設を保護する空き地を作ること）が行われた。



ヤミ市から4つの“通り”形成へ

『のみや横丁』

この通り一帯の間口の狭い店は全て飲み屋である。そのそばには豆やしじみを専門に扱っていると装いながら、メインはヤミ米を販売する店があった。ゴム靴直し、靴下直し等のサービス業も富裕層の集まる吉祥寺では成り立っていた。

『中央市場』

戦前、この通り一帯には商店街が形成されていた背景があり、戦後は建物疎開で残された基礎をそのまま使用し、間口の広い商店街が形成された。



ハーモニカ横丁 1953年当時の地図（出典：成蹊大学政治経済学会『武蔵野市（中）』（武蔵野市、1954年、P698）

『中華マーケット』

この通りでは、戦後軍事工場の機能消失に伴い無職になった中国人の店が並んだ。彼らの店では進駐軍向け売店からの横流し品などが売られており、外国製品が揃う通りとして大変賑わっていた。

『仲見世市場』

戦前から商店街が形成されていた一帯であった。ここでは玩具店やスポーツ用品店が見られる。他の商店街とは異なりインフラが整っていないことで、小売店が多く飲食店はない。

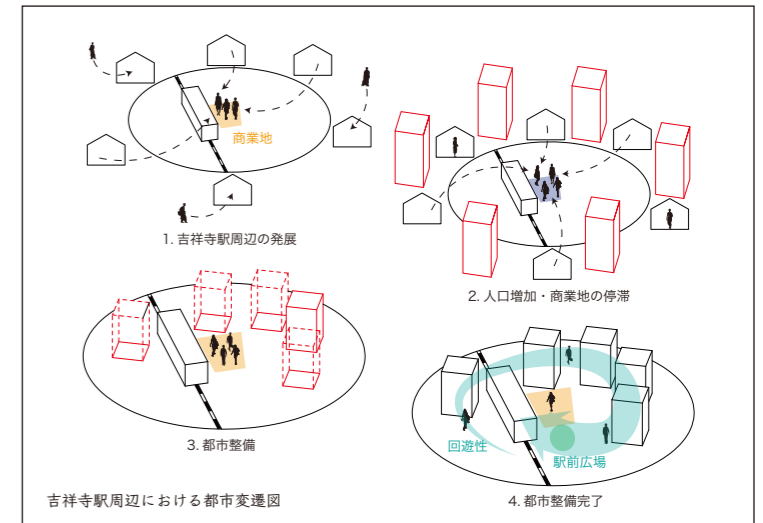
吉祥寺駅周辺の都市計画による発展

吉祥寺駅は戦後復興に伴い急速に発展し、商店街は賑わいを見せていたが、1955年になると都市整備の遅れと郊外化によって武蔵野市の人口は頭打ちになり、商業地の成長も停滞する。

吉祥寺駅周辺の都市整備が急がれる中、1962年に公表された都市計画案は商店街にとって不本意な結果になると予想され、実現されなかった。当初の計画から大幅に内容を削り、主要幹線道路と駅前広場の整備、短大跡地でのビル建設という最低限の整備内容で事業が決定した。ハーモニカ横丁は木密の防災問題から整備・ビル建設の話があったが、この土地には100前後の店舗が存在し借地的な権利関係が混み合っていて進まず、戦後から変わらない姿を残した。

一方で1970年代に入ると伊勢丹のオープンを契機に次々に大型百貨店が駅を中心に、ある程度離れた距離に弧を描きながら建設されていき、駅周辺に密集す

る商店街に人が集中することなく街全体に行き渡り、回遊性をもたらした。1987年には駅前広場が完成し、吉祥寺駅周辺の都市整備は完了した。



都市整備の移り変わり

ハーモニカ横丁の建築

細い路地と狭い間口、手作り感漂う小さな建材。ヤミ市の面影を今も残すハーモニカ横丁は、ヒューマンスケールの復興建築で構成されている。



ハーモニカ横丁 俯瞰

時代に沿った建築的変容

東京大空襲により吉祥寺駅周辺は建物疎開が行われ、戦後は駅周辺に大規模な空地が生まれた。終戦から間もない1945年、空地となった駅前で新聞紙を広げ、縄でくくった露店が出されたのがハーモニカ横丁の起源である。その後、人々は建築的な商業空間を作り出してゆく。棒状の木材を柱にし、屋根や軒を作りヨシズを掛けた掘立て小屋のような仮設的建築が北口駅前からダイヤ街(現在のハーモニカ横丁の北にある商店街)まで広がった。

1950年頃までは終戦直後のバラックのような建物が雑然と並ぶ形態であったが、現在は街区内の動線を整理し長屋式に店舗を並べた形態である。この形態は1952年に行われた横丁一帯の建て替えによるものである。もともとこの土地に建築物を建てることは行政からの許可が降りていなかったため、露店商人たちは行政の休みである日曜日を狙い1日で横丁一帯の建て替えを行ったそうだ。

戦後復興が進んでいく中、周辺に大規模な商業施設が建ち始める

ことでハーモニカ横丁に訪れる人は減り、取り残された存在となってしまう。そこで商人達はマスコミの力でテレビや新聞に広告を打ち、周知活動を行った。その結果多くの場所から広い客層の人々が訪れ始め、活気ある横丁へと変化した。現在までの復興の中で多くの改修を繰り返してきた横丁は、戦後復興の個性が残る店舗も若者でも訪れやすいレトロタウンへと変化させていった。

ハーモニカ横丁に存在する通りは、どれも建築的な特徴を持ち合わせる。一番西に位置する祥和会通りは店舗の間口が狭く、街中ではあまり見かけないスケール感で溢れている。隣接するのれん小路は、素材のつぎはぎ感や通りの後付け感など戦後を強く感じる通りである。逆に一番東に位置する仲見世通りは戦前の基礎をそのまま利用しているため、間口も広く比較的現代風の建築物が並んでいる。ハーモニカ横丁は機能だけでなく建築物でも、新+古の雰囲気を作り出している。



1957年に撮影されたハーモニカ横丁の西端の通り(現・武蔵通り)
(写真撮影・キャプション協力:らかんスタジオ 鈴木育男氏)



2022年に撮影されたハーモニカ横丁の武蔵通り

建築的特徴=ヒューマンスケール

戦後復興の中、人々は満足でない建材で復興建築を作り出した。小材(小さな木材)を使用した木造建築物は人々に暖かみと精神的安心を与え、現在まで残り続けている。ハーモニカ横丁を構成するヒューマンスケールを軸に、戦後復興の名残を感じ取れる建築的特徴を考察した。



中央通り

通り幅

約1.5mほどで、傘をさしながらはすれ違えない狭さの通りである。通り幅は戦後から変わらない強い残存感があり、この狭さが隣店や他人との昔ながらの気軽なコミュニケーションを生む距離感を作り出している。



のれん小路

狭い間口

戦後復興期に横丁の北面に位置する仲町通り(現在のダイヤ街チェリーナード)の露店が取り締まれ、のれん小路(祥和会通り)に流れ込んだことで他の通りに比べ間口の狭い店舗が雑然と並んでいる。現在でも通りへの溢れ出しやヒューマンスケールなどを感じる通りが残存している。



朝日通り

地面のテクスチャ

戦前、ハーモニカ横丁の西側は吉祥寺駅建設の為大きな穴が存在しゴミ捨て場として利用されていた。埋め戻されたが土の締固めが甘かったこともあり復興の際、地盤沈下をおこしてしまった。その為浸水性の高いタイルを敷き、共にバリアフリー環境も整えた。戦前・戦後の問題から生まれた機能性も備えた素材も、特徴の1つである。



祥和会通り

カウンター配置構成

狭い街区の中に約100店舗が雑多するハーモニカ横丁は狭い店舗空間を如何に上手く使うかが重要であった。特に室内空間の狭い飲食店では店舗前面にカウンターを配置し、通りを接客スペースとも利用していた。その名残が、現在の横丁にも存在し店舗の内外の境界を薄め横丁全体に活気を持たせる特徴となっている。



仲見世通り

基礎の名残

東側は戦前から存在した商店街の名残がある。以前の商店街は建物疎開により撤去されたが基礎は残され、戦後復興から現在までその基礎をそのまま利用し店舗を再形成していることから間口が広い店舗が多い。戦前から存在する基礎の名残が現在の建築物の1つの特徴となっているのである。



のれん小路

素材のつぎはぎ

戦後まもない頃は満足した建材を手に入れることもできず小材(小さな建材)でつぎはぎ建築を形成し、このスケール感が、人々に居心地よく安心した空間を提供していた。多くのヒューマンスケールで形成される商業空間は現代の都市では頻繁に見かけることのできない横丁ならではのものです。

ヤミ市を経て復興した街 その2

新宿ゴールデン街

世界有数の乗降客数を誇る新宿駅の東側に広がる繁華街。小規模の飲食店群が長屋形式で路地を埋め、独特の雰囲気を持つ。

位置／周辺環境

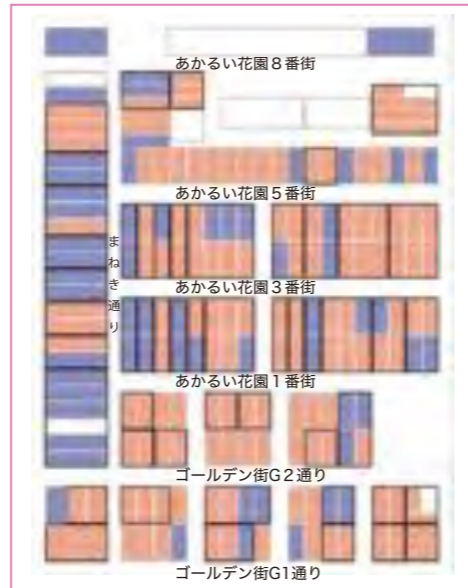
東京都屈指の商業地域である新宿区の中で古い雰囲気を醸し出している新宿ゴールデン街は、新宿区歌舞伎町1丁目に位置する飲食店街である。

新宿駅の東口エリアの新宿通りや新宿3丁目は百貨店や老舗飲食店が多く存在する新宿の“表の顔”のような場所である。一方、302号線を超えたゴールデン街側は飲み屋や遊興施設が多くあり、夜の街といったイメージが大きい。

周辺には東側の道を挟んで向かいには花園神社、吉本興業東京本部が位置している。また、西側を囲むように新宿遊歩道公園の四季の路があり、さらに新宿区役所も位置している。周辺は規模の大きい宿泊・遊興施設に囲まれていて、建物高さからみても周囲とは違う雰囲気が漂う区画である。



現在の新宿ゴールデン街の店舗色分けマップ



上下階で違う店舗 1つの店舗のみ 囲われた部分が1つの建物 (新宿ゴールデン街安心情報マップを参考に制作)

現状

新宿ゴールデン街の名前の由来は、ゴールデンが金貨・硬貨を表している。街は東西を結ぶゴールデン街G1、G2通り、明るい花園1、3、5、8番街の6本の通りと南北を結ぶ招き通りの合計7本の通りから成り立っている。区画が基盤の目のように綺麗に整理されていることが特徴的である。

通りを歩いても、大きく開口をとっているお店が少ないため店舗内様子はほとんど見ることができない。そのためか夜になると扉を開けたままの店舗が多い。また、光を出す各店舗の看板が通りを明るくしている。

約6600m²の区画の中に300ほどの店舗が連なっていて、1店舗の広さは3.5坪また4.5坪ととても狭い。ほとんどがカウンターからなる店舗で、客は数人しか入ることができない。また建物のほとんどは2~3層でできている。飲み屋の店主によると、現在は3階が店舗として使われることはないという。

図は上下階で異なる店舗が入っている建物と1つの店舗から成り立っている建物を色分けしたものである。また黒い縁で覆われた部分が1つの建物である。狭い中に上下階で違う店が入っているが、2階への入口である階段が通りに直接繋がっているため、上下階の関わりはとくにない。もちろん仲が良い店舗もあるが、割り切っているところが多いという。



特徴的な看板群



上下で店舗の異なる建物の入口



店主こだわりの入口

特徴：高さのそろった建物・夜間中心・個人的で閉じた印象

1つ1つの店舗には店主の趣味やこだわりが見られるが、通りごとに大きな違いは見られず、建物の高さ関係や綺麗にそろった通りから全体での統一感を感じた。

昼に訪れた時はほとんどの店が開店前で、開いている店は6店舗ほどであったため人通りは少なかったが、夜になると一変した。店の特徴は一言で表すことが困難でそれぞれが変わったコンセプトをもっている。将棋に野球、本や猫、宝塚など店主の趣味から同じ趣味を持った人たちが集まり、会話を楽しみながらお酒を飲んだり食事をしている。店の名前も風変わり目で目を惹かれるものが多い。

通りを歩きながら店舗を覗くと、どこも賑わっていた。しかし、通りそのものに人が少ないことが印象的であった。店を探しながら歩くのではなく知人の紹介で入ったり、常連客が多いことが理由の1つではないかと思う。飲み屋の店主によると昔の新宿ゴールデン街は暗くて犯罪も多く、一見さんお断りの店が多く存在していたといい、その名残でもあろう。しかし吉本興業東京本部がこの地に来てからは若い客が増え、それにつれて若い店主も増えていき、一見さんお断りの店舗は減っていったという。

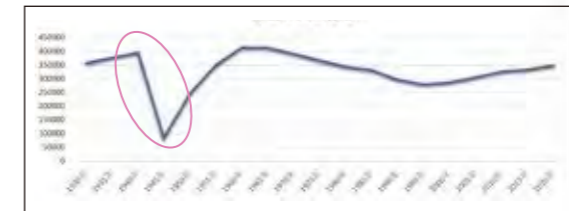
新宿区の戦争被害

現在の新宿区は戦後の昭和22年に四谷区、牛込区、淀橋区が統合して成立した。第二次世界大戦による初めての被害は昭和17年の4月18日の牛込区である。その後、新宿区は重要工場や施設を狙った精密爆撃ではなく都市そのものを目標とする無差別爆撃の対象となり、被害を受けた。終戦前日の昭和20年8月14日時点で全焼した家屋は56,595軒にも及ぶ。

人口は1940年は3区合わせて394,480人だったが、疎開が行われ、1945年では83,106人と大幅に減少している。これらのことと当時の写真からも、現在の新宿区は甚大な被害を受けたことがわかる。



淀橋区戸塚町の被害を受けた家屋 (東京大空襲・戦災資料センター提供 撮影：石川光陽)



新宿の人口推移



1947年以前の新宿区の位置と地名

(出典：東京都公文書館所蔵資料『都史紀要40 続レファレンスの杜』P171)

新宿ゴールデン街の成り立ちと歴史

かつて遊郭だった歴史を継いで栄えた街は、戦後テキヤによるヤミ市隆盛を経て、再度風俗・飲食産業が基軸に。1960年代以降は文化人が集い、その存在を広く知らしめた。

1945	1946	1947	1948	1949	1950	1958	1980	1985	2000
尾津組新宿マーケット建設 終戦	安田組マーケット建設	和田組マーケット建設	野原組マーケット建設開始 安田朝信逮捕 尾津喜之助逮捕	野原組マーケット建設終了	露店整理事業によりGHQが公道上の露店撤廃	ゴールデン街に文化人が訪れ活気を取り戻す 売春防止法施行	和田組マーケットの172軒の営業者が三光町へ移転	和田組マーケットの184軒の営業者が隣接地へ移転	借地借家法の一部改正

戦前の新宿

新宿では江戸時代の売春宿が明治以降に遊郭になり一大風俗産業の地に。1885年に今の山手線や中央線の開通によってさらなる発展を遂げた。関東大震災後、武蔵野台地に位置した新宿は相対的に被害が少なく東京の中心地へと成長、ターミナル駅としての重要性も増していき、デパートや百貨店が集中する繁華街・遊郭の歓楽街の中心となった。周辺は露店を出店するテキヤの力が顕著であった。

戦後、テキヤ組織によるヤミ市形成

終戦直後、東京では焼け跡や疎開空地が広がり、そうした場所を地割して商業空間＝ヤミ市を形成、露天商を招き入れて場所代を徴

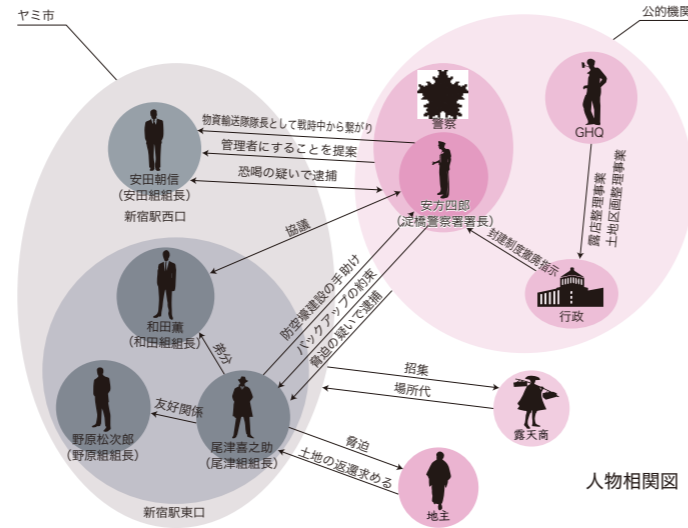
取し仕切っていたのがテキヤである。新宿駅近傍の急速な復興の要となった4つのテキヤ組織を紹介する。

尾津組

尾津組組長・尾津喜之助は終戦翌日からマーケットを建設するため、戦時中から協力関係にある警察署長・安方四郎からのバックアップを得て、資材調達へと向かった。資材が届くと新宿駅東口に柱とヨシズで簡易的な仮設建築を建てて売り場を設置し、戦後5日後に東京のヤミ市の嚆矢として『新宿マーケット』を開店させた。

和田組

新宿駅東口・南側の和田組（組長・和田薫）が組織したヤミ市は、戦後直後三越裏の焼け跡にゴザを敷いて開いていたが、所有権の問題から安方らとの話し合いの結果、1945年12月に新宿駅東口の南側に移転した。100の露天商はそこに屋台を持ち込み営業を行うようになり、1946年10月には約400店が入居できる平家のマーケットを建設。徐々に増築されていった。



安田組

安方は安田組組長・安田朝信と戦時中から面識があり、安田を市民の物資窮乏を助ける管理者に指名することを提案した。安田は引き受け、新宿駅西口の土地所有者の元へ行き土地利用の承諾を得て、露店によるヤミ市が形成された。1946年夏、西口改札付近で一部が木造マーケットになり、同年10月その約40軒が火事で消失。これを契機に西口一帯でマーケットの建設が始まり、最終的に約300軒が建設された。

野原組

野原組（組長・野原松次郎）のマーケットは1947年9月から1948年4月の間に東口駅前に建設された。建設された場所は戦前の疎開空地で、1944年から47～48年頃までは全て所有地であったが、戦前の所有者に返還され民有地になっており、それを不法占拠していた。

新宿ゴールデン街の誕生

1950年前後になると、経済復興が進み価格統制が徐々に撤廃され、GHQによる露店整理事業と戦災復興土地区画整理事業によってヤミ市は力を弱め、実態も消えていく。

戦災復興土地区画整理事業の対象として、和田組のマーケットが最初に手掛けられた。東口駅前を広場にすため、356軒の和田組マーケットは2か所への移転を余儀なくされる。1か所目は1月5日和田組マーケットの隣接地に184軒が移転。残りの172軒が新宿二丁目付近で営業していた露天商と共に代替地である三光町に集団移転し、それが現在のゴールデン街である。

新宿二丁目から移転してきた露天商たちは、警察署が売春行為を容認・黙認する赤線地帯周辺の立地を生かした商売を基本とし、売春宿の経営者で作る『花園街』と、新宿駅東口から移転した、飲食店が集まる『三光町』の2つの組合からなる。その後、三光町も花園街同様に売春宿へと姿を変え、この一帯は非合法の風俗営業を行う青線地帯となった。



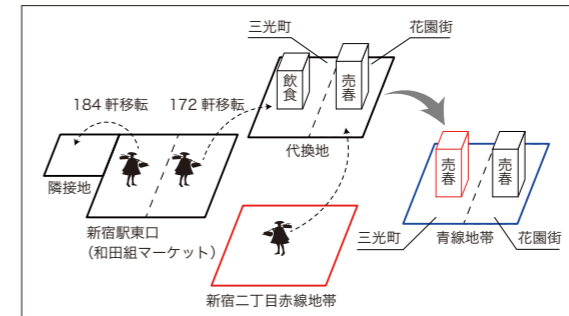
1949年の新宿駅近郊のマーケットと露店 (出典: 石橋晋和『戦後東京と開市 新宿・池袋・渋谷の形成過程と都市組織』鹿島出版会、2016年、P172)



1951年の三光商店街周辺の火災保険特殊地図 (出典: 石橋晋和『戦後復興期新宿前における和田組マーケットの形成と変容 新宿駅近傍における都市組織の動態をめぐって その2』(第82巻) 第733号、2017年3月、P799)



昭和の風情を残す飲み屋街



ヤミ市の移転ダイアグラム

1958年売春防止法が施行、多くの青線店舗が消え、深夜営業の店は飲食店に変わった。街には文化人が訪れるようになり、直木賞・芥川賞受賞作家によって全国的に脚光を浴びる。

その後1980年代のバブルによる地価高騰で地上げが進行、85年以降は全盛期200軒あった店舗が140軒にまで減少した。

2000年以降は借地借家法が一部改正され、賃貸契約の期間設定が可能になったことで若い経営者による新たな店舗が増加。昭和の風情を残す飲み屋街として国内外から注目され、賑わい続けている。

売春防止法やバブル経済を経て風情ある飲食街に

新宿ゴールデン街の建築

風俗産業をベースとする特殊な飲食街がゴールデン街のルーツ。ヤミ市由来の長屋形式と3層の建物構造に合わせた狭小店舗空間が連続する。



俯瞰写真

“赤線・青線”を背景とする建築

ゴールデン街は新宿二丁目から移転してきた露天商たちによる『花園街』と、新宿駅東口から移転してきた『三光町』の2つの組合からなる。

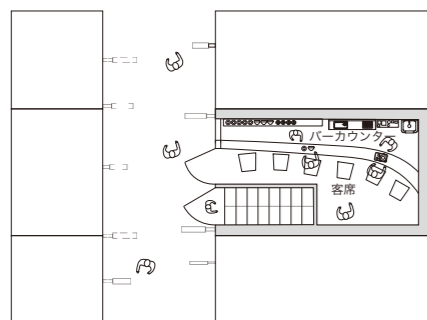
新宿二丁目から移転してきた露天商たちは、もとより警察署が売春行為を容認・黙認する特殊飲食店である赤線地帯周辺の立地を生かして商売を行っていた。『花園街』は売春を目的とした木造3階建ての建物群からなり、一軒あたり平均4.5坪で設計された。『三

光町』の場合は飲食店が主な目的で、木造2階建ての建物からなり、一軒あたり平均3.5坪で設計された。しかし時間が経過するにつれ『花園街』は売春日当ての客で連日賑わっているのに対し、おでん屋や一杯飲み屋の多い『三光町』の客入りは極めて少なく、借金を抱える営業者の生活は困難であった。そこで『三光町』の営業者が木造2階建てに1階の建増を行って売春宿の体裁を整え、この一帯は非合法の風俗営業を行う青線地帯となった。

間口の狭い長屋型平面

3.5~4.5坪と限られた長屋型と青線地帯の名残である2階へのアクセスの良さを活かし、1階2階共に飲食店やスナックとして賑わいを見せている。

狭い間口と長屋の細長い平面を活用しカウンタータイプのバーが数多く点在する。2階への階段動線が間口方向にあるため、店舗自体の間口は1m程度である。そのため通りに対して店舗が開くような造りではなく、壁がちで閉ざされた造りになっている。

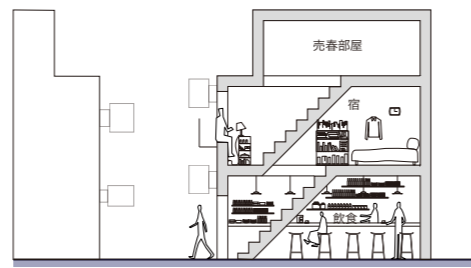


平面図

店・宿・売春部屋の3層構造

木造3階建て長屋造りになっており、大きく分けて1階：店舗／2階：宿／3階：売春部屋としての活用がなされていた。また、当時木造3階建ては違法建築であったため最上部は屋根裏部屋として使われていた。このような背景から現在は1、2階部を主に店舗（バーや居酒屋など）としている。3階部に関しては十分な高さが確保されておらず、また道路斜線制限の問題により新たに3階を増築したり、改修するといったことは不可能であるため、主だった活用はされていない。

建物密集地で通りに面した側以外は基本的に開口がなく閉ざされた造りになっている。通りに対しても開くという意識はなく、一つ一つが洞穴のような繋がりを通りに対して形成している。



断面図

独自性の高い意匠や佇まい

セットバックした3階

三光町側はもともと2階建てであったが、売春宿とするために3階を増築しセットバックしている。加えてテクスチャも1、2階部分とは異なるものとなっている。



個性的な2階の窓柵

2階部はもともと宿として利用されていたこともあり、落下防止及び小さなベランダとして窓柵が設置されている。店舗ごとに設置したことでそれぞれが個性的なデザインになっている。



2枚扉のファサード

もともと1戸あたり1階の飲食と2、3階の売春宿としての用途があった。そのため2枚の扉がありそれぞれ1階と2、3階への動線となっている。



テクスチャの違い

木造躯体の仕上げとなる不燃加工を各店舗ごとに行ったため、テクスチャに統一感がなく個性的な建物が並んでいる。



電線の配置

店舗が密集し電柱等の配線設備を配置する隙間がないため、室外機や電線等の配線が通りにむき出しになっている。



通りの看板

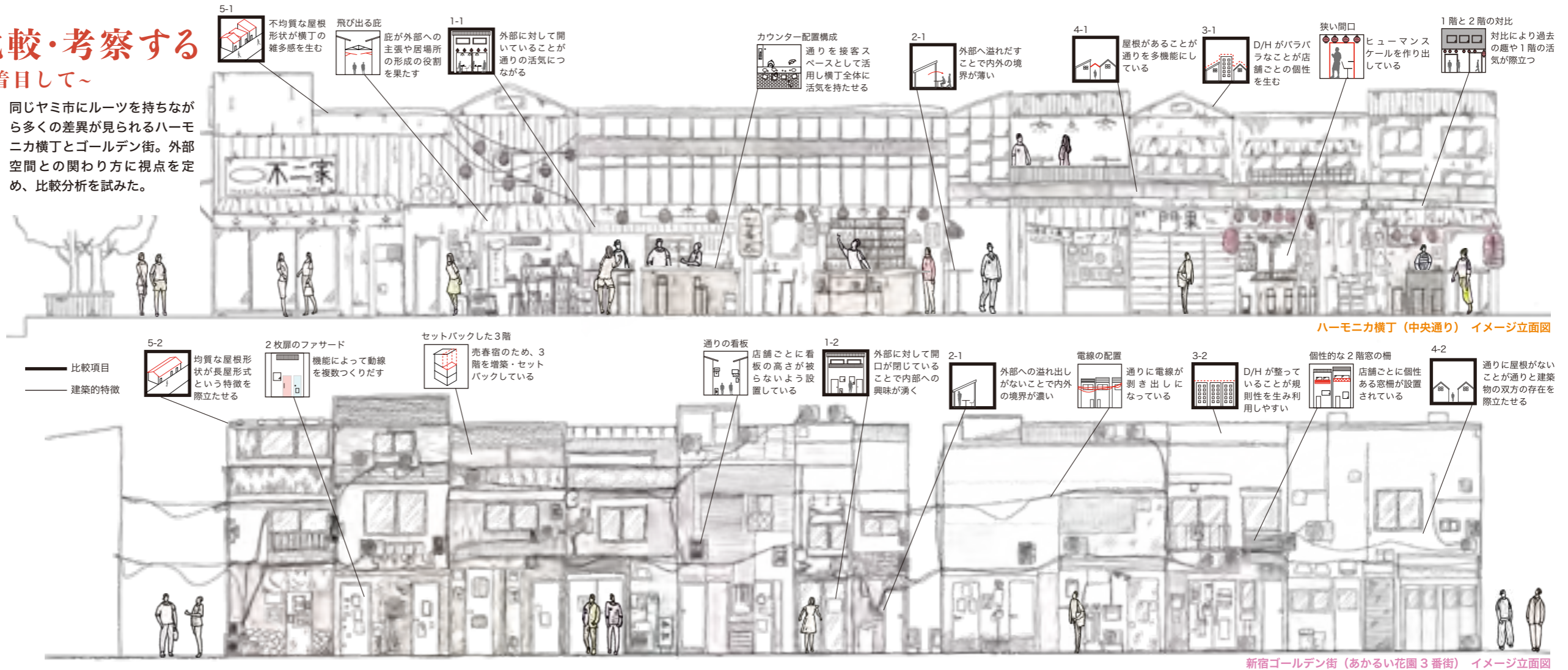
遠くからでも歩く人の目につくように、各店舗が建物壁面から垂直に突き出た看板を設置。設置高さも被らないようずらして配置されている。

ヤミ市的空間を比較・考察する

～外部空間への意識の差に着目して～

ハーモニカ横丁	ゴールデン街
行政の関わり方 ハーモニカ横丁内の土地所有権が数多くあったため、行政が取り締まることできなかった。	土地区画整理事業により代替地へと大規模な移転が行われた。
立地条件 戦前から変わらず駅前の一等地に位置する。立地条件が良いことから多様な人々を迎え入れることで存続してきた。	移転された場所が駅から離れていた為、時代に流されず現在でも戦後の趣を強く持っている。
1. 通りへの開き方 1-1 通りへ対して開いた開口部	1-2 通りに対して閉じた開口部
2. 通りへの溢れ出し 2-1 外部との境界が薄い	2-2 外部との境界が濃い
3. 建物の統一感 3-1 建築物の統一感がない	3-2 建築物の統一感がある
4. 通りの屋根掛かり 4-1 通りが半外部空間	4-2 通りが外部空間
5. 屋根形状 5-1 不均質な屋根形状	5-2 均質な屋根形状

同じヤミ市にルーツを持ちながら多くの差異が見られるハーモニカ横丁とゴールデン街。外部空間との関わり方に視点を定め、比較分析を試みた。



ハーモニカ横丁（中央通り）イメージ立面図

新宿ゴールデン街（あかるい花園3番街）イメージ立面図

考察・ヤミ市的空間はなぜ残ってきたか

ヤミ市は各地域によって形を変え、今でも残り続けるところが多くある。政府から取り締まりを受けたにもかかわらず、ヤミ市的空間が残る背景とはなんだろうか。

当時の面影が現在も残り得た理由は、例えばハーモニカ横丁のように昔のままの立地が好条件であり、集客性に優れた場所であることが考えられる。ハーモニカ横丁もゴールデン街も道幅は狭く、大規模な建替えを行うことができなくなっている。同じものを建てることはできない、もう建て直すことができないというかけがえのないものだからこそその大切さがある。

また、ハーモニカ横丁とゴールデン街ともに、銀座や表参道のような空間とは対照的なD/Hがあり、人の身体性に訴えるこのスケール感・空間性はヤミ市から発展したと考える。隣との距離が近いからこそ生まれる昔からの隣人・地域コミュニティが、実際に行き体感できる魅力であり、人を惹きつけ、残って行く要素になり得るのではないだろうか。

現代は衰退したものは壊せばいいという思想により建築物が建て替えられている。それによりヤミ市的空間では過去との対比が生まれ、新たな魅力の創出により存在価値が上がっていると考えられる。

ヤミ市的空間の今後

「レトロ」という言葉がある。懐古的であることや古いものを好むことである。

時代が進むにつれて、昔のものを建替えや新築で意匠をし直して残すという「建築的レトロ」が生まれた。現代からみる昔を象徴した「わざとつくるレトロな街並み」と「昔から残るレトロな街並み」、現代の人にとってはどちらが好みの空間なのだろうか。

ヤミ市は昔の人々の支えになり、地域のコミュニティを作り出すものと進化していった。その影響は現在も続いており、私たちの生活を影なが

ら支えるものへと時代ごとに変化しているのではないだろうか。時代が進み建物は壊されていく中、残っていくヤミ市の面影と時代に合った変化とは、破壊から復興、当時の人々の想いを私たちに知らせ、さらには守っていくことに繋がるだろう。ヤミ市的空間を今後も残していくべきである。

考察 破壊と復興、そして市民の手による復興建築

本特集として、第二次世界大戦から生まれたヤミ市を通して、市井の人々による復興の在り方を取り上げた。破壊と復興というテーマから市民による復興とはどういうものだったのか、今後の可能性とともに考察していく。

市民による復興を考察するうえで、行政による復興との相互関係を述べることは欠かせないと思う。市民による復興と行政による復興を比較すると、復興の違いは大きく分けて3点あると考えた。それは「誰のためか」「スピード感」「復興を進める人」である。

1つ目は「誰のためか」。第二次世界大戦後においては、行政は日本存続のため、市民は自分たちもしくは自分のための復興だったといえる。行政の掲げた復興案は、日本が生き残っていく上でなにをまずしなければいけないのかという長期的なことを見ており、また国に対する復興案としてスケールも都市開発規模のように大きなものとなっている。一方で市民による復興とは、被災した自分たちがまず生きていく上で何が必要かという“目の前の問題”に対しての復興を掲げている。戦中戦後を通して配給制がうまくいかなかった点から、必然的に市民は食糧不足を補うためにヤミ市を形成し、人々の生活基盤を支えた。

結果的には、日本国民のためということには変わらないが、一番に対象として考えるものに違いが表れていると思う。行政の出した復興案は、主に都市計画であり、道路の道幅や人々がよく集まる大規模な公共施設などをつくったことにより、時代とともに更新されていき面影が残らなかった。一方で、市民の作りあげた復興は目先の自分たちの生活しか考えられておらず、“何十年後の自分たち”のような将来への視線がないものとなっている。例えば区画内の建築物同士の隙間を道として後付けし機能性を持たせず計画したことが、のちに路地が狭い現在の飲み屋街や木密地域となり、行政の手が出しにくいかたちで面影を残している。

2つ目は「スピード感」についてである。行政は、国を動かす事業になるため、慎重に動かなければならない。かつ、第二次世界大戦においては占領軍であるGHQとの兼ね合いもあり、かなり復興を進めていくのに時間を要していた。市民は、自分が主体となって動けるため、素早い行動を実行することができた。終戦の翌々日という早くからヤミ市を成立させていることに関しても、被災した直後の瓦礫や廃材、残った物資だけを使うのが市民ならではの復興の手段だったと考えられる。

3つ目の「復興をする人」は、行政は国の一部の人、市民は被災したその土地で生きる人という区分で分けられると思う。行政の出す復興案は、機能を有する都市を中心に復興を始めていくが、市井ではその場で生活している人、生きている人が復興を進めるため、その土地ならではの固有性のある復興ができる。破壊前の土地性を、被災し復興するとき改めて考え、復興に加えるという行動をとっていると思う。現に、ハーモニカ横丁も新宿ゴールデン街も土地ならではの記憶を継承していると思う。

では、市民による復興はどの時代をとっても同じようなかたち、技術をもって変わらずに進んでいくのだろうか。私たちは、市民の復興は進化し続けると考えた。第二次世界大戦後（1945年）時の技術と現代（2022年）の技術では、明らかに現代技術のほうが発展している。ならば、現代版の市民による復興をしたとき、復興の仕方や材料、またヤミ市から発展し将来性を考えた復興もあるのではないかと考える。

同時に市民による復興において絶対的に変わらないこともあると思う。それは、市井の人々自らが“セルフビルド”をすることである。ここでいうセルフビルドとは、一般的な「自分の住まいを自分の手でつくる」ということと変わりなく、被災したその時に自分の手の届く範囲のみ、技術なしの復興をさせるということだと私たちは考えた。市井の人々がセルフビルドすることが、人間の身体的尺度をもった独自の空間を生み出しているのではないだろうか。この空間で人々は生活をし、市民同士のヒューマンスケールならではの近さから新たな文化やコミュニティを創出させていると考えられる。

現代の世界は数多くの問題に直面している。水・燃料不足から起きる均衡の崩れにより、終わらない破壊行為は続いていくと考えられる。破壊行為が起きた後、市民による復興は、人々の手が届く範囲に限られるものの、生きていく上での生活基盤を支える役割を果たすと思う。

時代によって変わっても、ヒューマンスケールのような特徴を残しつつ、市民の手による復興建築は現代そして未来まで残っていくのではないだろうか。

道に対しての復興のスケール差



行政による復興

名古屋の久屋大通、若宮大通。ここは行政が戦後復興として計画した幅員100m以上の道路である。行政の当初の計画では、7都市で行う予定だったが、100m道路を実現できたのは名古屋の2本の道路と、広島の前大通りのみだった。



市井の人々による復興

2つの写真はハーモニカ横丁の通りである。戦後直後はヤミ市が建ち並び、その面影からヤミ市はヒューマンスケールの規模が小さいものだったことが分かる。道の幅員は、1.5mほどのところが多い。

市井の人々による復興・現在まで面影が残る理由



セルフビルドで手が届く範囲、技術のない建築がつくれる



セルフビルド建築が建ち並び路地を形成する



セルフビルド建築の周辺は都市開発が進むが道幅が狭く、改修工事がしにくい

↓
木密地域となる

特集班座談会

ロシアによるウクライナ侵攻が継続する中、破壊と復興というタイムリーなテーマに挑んだ特集班メンバー。論文調査からフィールドワーク、インタビュー取材まで敢行した各自が、その思考過程や新たな発見を語り合った。

(司会・文責 二階さちえ)

出席者(五十音順)：

安達萌子/石井瞭亮/稲川大悟/上條響/西村和将/鈴木成也(助手)

ヤミ市を通して見えてきた、まちづくりと市民・行政の関係

——戦争という大きな破壊と都市の復興を第二次大戦後の東京のヤミ市を題材に考え、どんなことが見えてきたでしょうか。

西村 戦争による破壊はその国がもっている機能を意図的につぶします。技術も当然失われますから、市民が自力で復興していくしかなかった。敗戦時の日本はGHQの力が強くて行政が動けず、市民に頼らざるを得ない状態でした。

上條 壊滅するほど大きく壊されると土地の権利関係もわからなくなるから、テキヤのような人たちも出てくる。人手不足で混乱している状況だからあたりまえだと思います。現状に対処して変える力こそが当時は重要だった。

稲川 彼らがリーダーとなってつくったヤミ市が市民の暮らしを支えたんだから、必要な存在だったんじゃないかな。

安達 戦争に負けたことで、国に対する市民の期待そのものが薄かったのでは。もし自分がそこにいたら不満ばかりだったと思います。その一方で市民と政府や行政が近く、連帯感のようなものもあったかも。

石井 当時の行政は市民に頼るしかなかったけど、それがよかったのかもしれないと思いました。現代においても、市民からの働きかけに行政はもっと応えてくれていい。



西村 市民に指示・命令するだけでなく、相互関係があるといいよね。

市民の手によるヒューマンスケールが街のコミュニティを蘇らせる？

—特集ではヤミ市由来の都市空間を持つ“ヒューマンスケール”についても多く語られています。

安達 今回の特集に取り組んで、破壊された後の復興には“進化する復興”と“引き継がれる復興”の2種類があるのでは、という気づきがありました。進化する復興は技術力ありきのもの。そして引き継がれる復興は技術なしの復興、手の届く範囲＝ヒューマンスケールだよ、と。

上條 台風被害のように一部が破壊された場合には、その時に残っている技術を利用した復興ができます。例えばプレハブを建てるとか。でも戦争で全体がやられてしまったら、自分たちでやるしかない。

安達 ヤミ市は建築的な技術も材料もない市井の人々がつくりました。自らつくるしかなかったからこそ、そこにヒューマンスケール

ルの街が生まれ、壊されずに引き継がれて発展していったと思います。

稲川 ハーモニカ横丁は道がお店の接客スペースに使われ、普通ではあり得ない溢れ出しがあつてすごく面白いです。

西村 距離感が近いことで「醤油貸して」的な“昔ながらの地縁コミュニティ”が再現できるかもしれない。

稲川 ヒューマンスケールの街ではコミュニティも小さくなるのでは。僕は小さな島の出身ですが、そこでは島民全員が知り合いです。こういったものは都市化によって失われていくけれど、もしも大きな破壊を受けて市民によるヒューマンスケールの復興建築が建てられたら、小さなコミュニティがまた見直されていくかもしれない。それが繰り返されたらいいな、と思います。

歴史やソフトを映し出した都市・建築デザインに気づく

—デザイン面で何か感じたことは。

石井 利便性だけではない建築に興味を持っているのですが、ハーモニカ横丁もゴールデン街も周囲の都市整備がどんなに進んでも“レトロ的空間”としての価値が残っているんです。その空気感や集まる人々の動きを、特集に取り組む中で肌で感じられました。木密エリアでいろんな問題があっても残り続けられるその価値を、建築的な観点から見ることでよかったです。

西村 ハーモニカ横丁とゴールデン街では、“あかり”に一番大きな違いを感じます。ハーモニカ横丁のあかりは暖色系でゴールデン街はネオン調。商店街と歓楽街という、もともとの街の成り立ちがひもつけて面白かった。

上條 ハーモニカ横丁はアーケードに蛍光灯もついているけれど、ゴールデン街は看板のあかりだけで道に照明がなく暗い。

お店が外に開いているか内に閉じているかといったことも、そこから感じられたよね。

稲川 意匠系の研究室にいて、今まではまち歩きをしても「このデザインがカッコいい」といったことだけ思っていました。でもヤミ市の空間はまずソフトありきで、それがデザインやハードになっている。視野が広がりました。

鈴木 戦後の復興を考えるために選んだ2つのヤミ市的空間は、混沌とした現代の都市風景を見る上で重要な対象だと思いました。

“進化する復興”と“引き継がれる復興”という、技術面を軸とする復興の類型が見えかけてきたこともよかった。復興の仕方にもいろいろある、行政の関わり方や現代の建物とも比較した都市のありよう、「こういう都市だったらいいな」を考えるきっかけにも、なったのではないのでしょうか。

2022年7月5日 神奈川大学六角研究室にて



編集後記



今年の特集班は「破壊と復興」という大きなテーマを掲げ、進めていった。「破壊」という言葉の対象はすぐ決まったものの、「復興」という目に見えるものもあれば、目に見えないものもあり範囲がとてども広く絞るのが大変だった。「破壊と復興」は、終わってほしいものでもあり、終われないものでもあると思う。私たちが取り上げた闇市は復興のひとつの手段に過ぎず、復興を通して私たちの生活があることを認識し、見つめなおす機会だった。今後もこのテーマとは向き合っていく必要があると感じた。(安達萌子 P2-P5, P20-P21 担当/六角研究室)



「破壊と復興」をテーマに進めていった中で、戦争による破壊への理解が大きく変化した。地震や津波などの自然災害による破壊とは異なり、東京や地方都市といった国の主要都市に狙いを定めた破壊行為はより深刻かつ根強い被害を与えた。戦争が終わった後も接収という形で被害が残る行政の復興は市民ではなく町に向けられた。そんな中で形成されたヤミ市は市井を中心に始まり、現在下町らしさが残る貴重な空間となっている。特集を読んでいたのなら、是非足を運びそこに残る「破壊と復興」の痕跡と、今もなお残っている人々の振る舞いを体験していただきたい。(石井瞭亮 P16-19 担当/曾我部研究室)



「破壊と復興」というテーマを通して幅広い知識を得ることができた。テーマ決めから考察まで絶えず困難であったがとてどもやりがいがあり、成長できた特集になったと思う。実際にsiteに訪れて調査していく中で過去の人々の様子や成り立ち、現代においてのヤミ市的空間の立ち位置など知れば知るほど復興建築は素晴らしいものだと気づけた。この気づきを忘れずに今後、建築学を学んでいく上での糧にしたいと思う。また、限られた時間の中で一生懸命制作したこの特集をぜひ多くの人に読んでほしい共に復興建築の素晴らしさに気づいてほしい。(稲川大悟 P10-11、P18-19 担当/六角研究室)

参考文献
藤本TDC 『東京戦後地図 ヤミ市跡を歩く』実業之日本社 2016
橋本健二・初田香成 『盛り場はヤミ市から生まれた』青弓社 2013
渡辺英綱 『新編・新宿ゴールデン街』ふゅーじょんぷろだくと 2003
井上健一郎 『吉祥寺「ハモニカ横丁」物語』国書刊行会 2015
早乙女勝元 『決定版 東京空襲写真集 アメリカ軍の無差別爆撃による被害記録』勉誠出版 2015

参考論文
初田香成・荻野駿・堀越脩仁：闇市の架橋と増改築過程 新宿・和田組マーケットの写真分析と思い出横丁の実測調査 2021
下山萌子・後藤春彦・馬場健誠：新宿ゴールデン街における新旧店舗の混在とその更新の実態に関する研究—店舗更新時の旧店主からのアドバイスに着目して— 2017
石樽督和：戦後復興期新宿駅前における和田組マーケットの形成と変容 2017

インタビューでお世話になった方々
2022年6月21日/ハモニカ横丁内店舗店主A.T.さん
2022年6月26日/新宿ゴールデン街・飲食店店主のみなさん



「破壊と復興」というテーマが決まり話し合いや想像の中では順調に進んでいたが実際にその敷地に向かうとパソコン上で考えていたことは大きく異なっていたり目当ての戦後の痕跡が存在しなかったりと困難を強いられる場面があった。実際に調査に行く前の下調べ、足を運んだ上で気づいたことや感じたことの裏づけを本や論文、街の人に聞いて探します。足を動かすことの重要性を再確認できた。ページごとに分担作業でやっていたが常に話し合いながら繋がりを考え、足りない知識を補い魅力ある紙面になるように構成したので何回も読んでもらいたい。(上條響 P6-7,P12-13 担当/六角研究室)



今回の特集では「破壊と復興」のテーマ設定の過程から困難を極めた。またテーマに対して何処のSiteに着目し誌面を構成していくのかを考える中で何度も特集班で議論を重ねた。特集を通して、現在戦後復興の痕跡はわずかしが残っておらず、それらの痕跡を見ても戦争が関係していると実感できないのではないかと感じた。そのわずかな痕跡から創出された独自の文化や空間の魅力が誌面として伝えられていれば幸いである。限られた時間の中、互いにリサーチを繰り返し切磋琢磨した学生メンバー、共に誌面を構成して下さった二階さん、図版掲載にご配慮いただいた多くの方々へ感謝申し上げます。(西村和将 P8.9.14.15 担当/六角研究室)



2022年度のRAKU編集サポートとして参加した。戦後70年を超えた今でも、東京には、復興期に建てられた建築が数多く残されている。今回はそのひとつ、「ヤミ市」に注目することになった。戦後、市民が生きるために建てていった「ヤミ市」は、今もなお盛り場としてにぎわいを見せている。この特集を通して、「市民の手による復興」が現代でも豊かな都市空間を作り出していることを再認識することが出来た。ロシアによるウクライナ侵攻をきっかけとしてテーマ設定を行ったが、この機会に自国がどう復興していったのか、改めて考えてもいいかもしれない。(鈴木成也/助手)

監修・編集協力

二階さちえ(青空編集事務所)

建築探訪

西和夫先生と復原研究

—三溪園鶴翔閣の復原整備とその後について—

神奈川県横浜市に現存する鶴翔閣(旧原富太郎邸)は、

2000年に復原整備された建築である。

今回の建築探訪の企画では、本学の名誉教授である

西和夫先生の研究の一つである復原研究に着目した。

そして、その代表事例として鶴翔閣を取り上げ、その特徴や文化的価値を探る。



鶴翔閣 外観写真(撮影:池田)

西和夫

Kazuo NISHI

(1938~2015)



- 1938年 7月1日 東京に生まれる
- 1962年 早稲田大学理工学部建築学科卒業
- 1964年 東京工業大学大学院修士課程終了
- 1967年 東京工業大学大学院博士課程終了
日本工業大学工学部助教授
- 1977年 神奈川大学工学部助教授
- 1978年 神奈川大学工学部教授
- 1983年 日本建築学会賞(論文)
『日本近世建築技術史に関する一連の研究』
- 1993年 第四回小泉八雲賞
『フィクションとしての絵画』
- 1999年 建築史学会会長(2000年度まで)
- 2003年 文部科学省文化審議委員(2008年度まで)
- 2009年 神奈川大学工学部教授退任
神奈川大学名誉教授
神奈川大学工学研究所客員教授
- 2015年 1月3日 東京にて逝去(76歳)

01 西和夫先生の業績

●西和夫先生の略歴

西先生は、1938年7月1日東京都に生まれた。1962年に早稲田大学を卒業後、東京工業大学大学院に進学し、藤岡通夫の下で、近世建築技術史に関する研究で博士論文をまとめた。大学院終了後、日本工業大学工学部助教授を経て、1977年より神奈川大学工学部建築学科に着任した。2009年に退任後も客員教授として教鞭をとり、35年間で328名の卒業生を輩出した。

1981年に神奈川大学に日本常民文化研究所が招致・設立されると、その中心的メンバーであった宮田登や網野善彦と協力し、芸能に関係する建築や絵図にみられる建築などにも研究対象を拡げた。1983年には、「日本近世建築技術史に関する一連の研究」で日本建築学会賞(論文)を受賞した。

また、西先生は建築史学会(会長)や横浜市文化財保護審議会(会長)をはじめとし、数多くの委員会委員を歴任され、歴史的建造物の継承・保存・復元活動に尽力された。

●西和夫先生の研究

西先生は、大学院時代から続けてきた「生産史や技術史」の研究に加え、「城郭」、「数寄屋や書院」、「障壁画」、「民俗学」、「町並みとまちづくり」と一つの研究から派生的に研究範囲を広げ、幅広く研究を進めてきた。

また、西先生は単に研究を進めるだけでなく様々な形で功績を挙げていった。

一つは、著書として記録を残すことである。

50冊以上もの著書を残しており、特に知られている『日本建築のかたち』(彰国社、1983年)は、日本建築の構造をビジュアルに説いたもので、『What is JAPANESE ARCHITECTURE』として英訳され、海外の日本建築への理解の増進に貢献している。

もう一つは、失われた歴史的建造物の復元とまちづくりである。西先生は、徹底した現場主義者であり、在学生のみならず卒業生をも巻き込んで調査を行った。

今回はその復元研究の事例の1つである三溪園の鶴翔閣について取り上げる。

(参考文献: RAKU vol.11)

02 鶴翔閣の概要



鶴翔閣(古写真)



鶴翔閣(2000年)



鶴翔閣(2022年)

●鶴翔閣の概要

鶴翔閣は原三溪(富太郎)の自邸として三溪園内に建設された和館である。建築年代は1909年とされている。楽室棟・茶の間棟・書斎棟・仏間棟・客間棟・倉・離れの全7棟からなる大規模な住宅であった。

●鶴翔閣の変遷

鶴翔閣は三溪が養祖父の原善三郎から家業と三溪園の土地を引き継いでから建設が始められている。1902年時点で建物はある程度完成していたが、電気などは使用できない状態で、実際に移住したのは1909年であることが明らかにされている。

その後、第二次世界大戦時(1940年頃)に大きな屋根は空襲の標的になる恐れがあったため、楽室棟が半分程度の規模に縮小され、屋根も防火上危険との理由で茅葺きから瓦葺きへと変更された。

1953年に三溪園の大部分が横浜市に寄贈された後も鶴翔閣は1965年頃まで原家が使用した。

1998年に横浜市が整備を行うために調査を実施し、同年4-5月に神奈川大学建築史研究所(西研究室)によって調査報告書が提出された。

1998年11月に解体、1999年に復元工事が開始、2000年10月に復元工事が完了し、現在に至る。

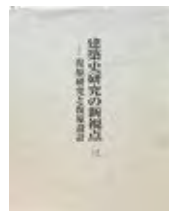


鶴翔閣航空写真

復元研究と復元設計

「復元」とは建造物の歴史的背景を考察し、かつての姿を取り戻すことであり、復元設計・工事を行うには復元研究が必須である。西先生は工事の有無にかかわらず、「建築史研究においては、建築の歴史的な様相一意匠・構造・材料などへの復元考察が必要なのは当然のこと」であると指摘している。

(西和夫『建築史研究の新視点三—復元研究と復元設計—』中央公論美術出版, 2001年)



建築史研究の新視点三—復元研究と復元設計—

復元研究と復元設計の事例

- ・二条城橋廊下部材調査と復元(1984~1988年)
- ・足利学校復元調査基本設計(1986~1990年)
- ・旧染井能舞台部材調査及び建物復元(1989~1996年)
- ・肥前名護屋城復元調査、復元模型(1991~1993年)
- ・三溪園旧原邸(1998~2000年)
- ・佐賀城本丸御殿(1998~2004年)
- ・平戸オランダ商館(1996~2009年)
- ・出島オランダ商館(1996~2015年)

復元事例

(写真引用: 建築史研究の新視点三)



足利学校



旧染井能舞台



旧佐賀城本丸御殿



長崎出島オランダ商館

三溪園と原三溪

●原三溪・三溪園について

原富太郎(号三溪)は1868年に美濃国(現在の岐阜県南部に相当)厚見郡佐波村に生まれた。1888年に跡見女学校の助教師になると同時に、早稲田大学の前身である東京専門学校に入学し、1891年には教え子であり原善三郎の孫娘である原屋寿と結婚し、原家に入籍した。

1899年に善三郎が死去してからは原家の家業を継ぎ財界人・美術品蒐集家・茶人として活躍し、1902年頃からは、善三郎が所持していた土地に全国各地から買い取った歴史的建造物の移築を開始、現在の三溪園が造園された。



三溪園 園内マップ 提供: 三溪園

三溪園の建造物一覧

・旧天瑞寺寿塔覆堂(1902年)重要文化財	移築
・旧東慶寺仏殿(1907年)重要文化財	移築
・横笛庵(1908年)	新築(移築説もあり)
・鶴翔閣(1909年)横浜市指定有形文化財	新築
・旧燈明寺三重塔(1914年)重要文化財	移築
・天授院(1916年)重要文化財	移築
・臨春閣(1917年)重要文化財	移築
・蓮華院(1917年)	新築(古材再利用)
・月華殿(1918年)重要文化財	移築
・金毛窟(1918年)	新築(古材再利用)
・白雲部(1920年)横浜市指定有形文化財	新築
・聴秋閣(1922年)重要文化財	移築
・春草廬(不明)重要文化財	移築
・旧矢野原家住宅(1960年)重要文化財	移築
・林洞庵(1970年)	新築
・旧燈明寺本堂(1987年)重要文化財	移築

03 復原前後の比較と鶴翔閣の棟構成

写真引用：財団法人三溪園保勝会『横浜市指定有形文化財 旧原家住宅（鶴翔閣）復原修理工事報告書』



① 玄関（復原前）：瓦葺きの屋根で、規模が縮小されている



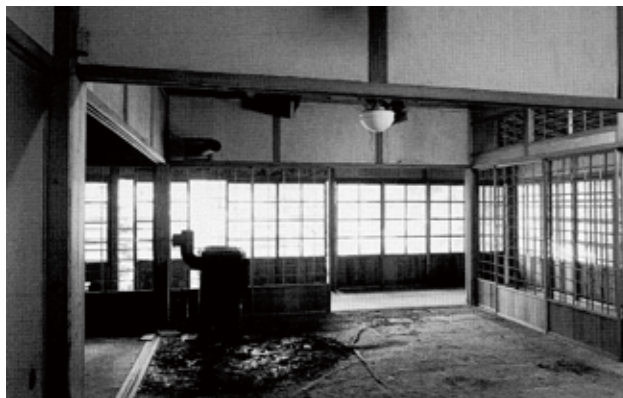
① 玄関（復原後）：元々の茅葺に戻され、規模も元に戻された



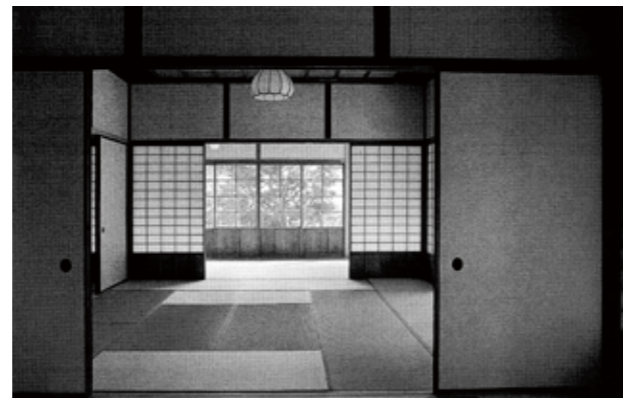
② 書斎棟（復原前）：富太郎の書斎、長年放置され植栽が荒れている



② 書斎棟（復原後）：日本造園設計によって植栽が整備された

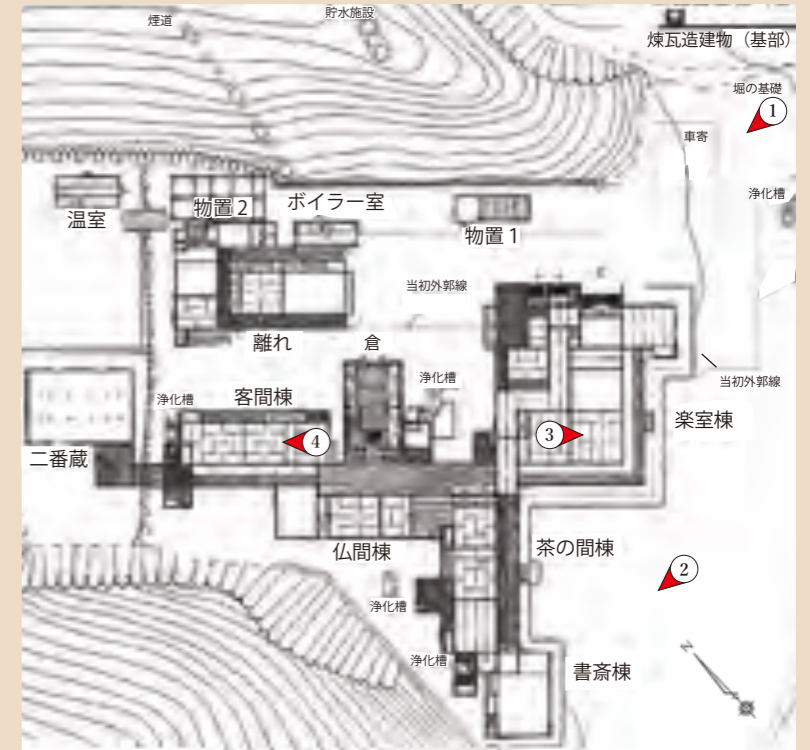


③ 楽室棟室内（復原前）：腐食の影響で畳は剥がされ、床も劣化している



③ 楽室棟室内（復原後）：畳、障子は復原されたが、照明は変更された

- 楽室棟
来客の接待や音楽鑑賞などを目的とした棟で、現在は会食・展示会場として使用されている。襖を抜くことで開放的な空間へと変化する。
- 茶の間棟
三溪の家族の生活空間として使用された棟である。蚊帳の釘も残されている。
- 書斎棟
三溪の寝室及び書斎として使用された棟で、他の棟より床が高くなっている。和室から洋室に改造したとされており、板敷の床や暖炉が特徴的。
- 客間棟
来客の居室あるいは画家の画室として使用された棟で、現在は茶会会場や結納部屋として活用されている。要素の違う左右の庭が特徴的。
- 仏間棟
原家の位牌が祀られていた棟で、現在は倉と共に収納空間として使用されている。
- 倉
原三溪が蒐集した美術品などが収容されていた。倉前には天窓が設けられている。
- 離れ
女中室として使用されていた建物で、医務室なども存在したとされている。現在はケータリングの準備室として使用されており、北面には煉瓦造りのボイラー室が遺構として現存している。
- 二番蔵
倉庫として使用されていた棟だが、調査時に既に倒壊していた。屋根がキングポストラスだったことから、建設当時のものではないと判断され、復原の対象とはならなかった。



鶴翔閣復原前平面図 S=1/600

引用：財団法人三溪園保勝会『横浜市指定有形文化財旧原家住宅（鶴翔閣）復原修理工事報告書』



④ 客間棟（復原前）：楽室と比較すると損傷が少ないことがわかる



④ 客間棟（復原後）：畳、障子、奥に見える床の間など完全に復原された

マヌ都市建築研究所：板谷龍二郎さん



撮影：穂屋下

鶴翔閣復元の計画から工事までの段取りを行なったマヌ都市建築研究所の板谷さんに当時の様子をお伺いしました。

西先生に関するエピソード

- 鶴翔閣を市の観光拠点・文化財保存活用施設として再利用したいという話が出たときに、西先生から復元にあたり価値付けをしたほうがよいとの話があり、調査が行われました。
- 西先生には、調査初期から参加していただき、神奈川大学の西研究室に所属する学生も参加していました。西先生は、測り方などについて指導していました。
- 造園に関しては、日本造園設計の枡野さんが協力してくれました。枡野さんは、芸術的な庭園を造りがたがっていて、なるべく昔の状態に戻したがつっていた西先生とはよく議論をしていました。



三溪園日本館（仮称）整備事業基本計画策定調査報告書（1998）

復原前の調査報告書
建物の復原や構造に関する基礎的な調査、それにより想定される価値付けを行っている。



旧原家住宅（鶴翔閣）復原修理工事報告書（2001）

2000年の復原修理工事報告書
写真を交えて当時のことが詳細に綴られている。

インタビュー

一鶴翔閣の復原工事に携わったきっかけはどのようなものでしたか？

第26回サミット（2000年）が横浜になるかもしれないという話があり、ゲストを招く施設として日本館を建てようとの計画が持ち上がりました。私たちのところには三溪園保勝会と横浜市の方から迎賓館として鶴翔閣が使用できないかとお話があり、復原計画が始まりました。

西先生には調査委員になっていただいて、委員会内でアフターコンベンション施設として活用できないかとの話が上がり、市の観光拠点・文化財保存活用施設として利用する計画が進められました。

一解体時に出た材料はどうされましたか？

基本的には再利用とし、使用出来ないものはその保存を図りました。腐朽したりして、他の材に影響を与えるものは廃棄し、代表的な部材は保存しました。部材は床下や小屋裏に置いてあります。創建時のものを残して置くのは、将来的な補修や調査の時に役に立つことがあるからです。

柱や梁の構造材はその強度を確かめる必要があります。応力波伝播時間の測定などでヤング率を調べました。自分たちでやる事もあるのですが、この時は、専門家が現地測定しました。数値を満たさないものは再利用しませんでした。

基礎はマットスラブとし、RCで立ち上がりを作り、既存の礎石あるいは新規の石を設置し、その上に土台を引いて上屋の軸組を組み上げました。



番付調査の様子 写真提供：マヌ都市建築研究所

一全体工事にはどのように取り掛かりましたか？

番付調査を行いながら解体をしました。そのため、解体から復原まで同じ業者をお願いすることにしました。その業者というのが京都の安井空（やすいもく）工務店さんです。

なぜ京都の業者にしたかという点、原三溪はもともと岐阜出身で、岐阜から大工を連れてきていました。そこで岐阜に調査に行き、資料館なども訪れましたが、残念ながら大工の情報については判明しませんでした。そこで、間取りの寸法から京間に近いことから、関西の大工さんが良いという話になり、以前から面識のあった安井空工務店の久佐さんにお願いしました。鎌倉の大工さんも参加していた覚えがあります。



全解体後の基礎工事の様子 写真提供：マヌ都市建築研究所

解体時特に面白かったのは、屋根を解体して梁だけの状態にしたとき、扱首（さす）跡が発見されて、楽室棟に関しては瓦葺きではなく、元々は茅葺の屋根だったことが判明した事です。小屋は別の組み方になっていましたが、梁の跡がきっかけでこの構法で行うことになりました。



茅葺き屋根復原工事の様子 写真提供：マヌ都市建築研究所

一当時と現在では耐震基準が異なると思いますが、どのように対応されましたか？

楽室棟の腐食・雨漏りについては、屋根の瓦が落ちていて、とてもひどい状態でした。雨で畳なんかもボロボロになっていて、入るのも怖いような部屋もありました。離れのあたりは特に損傷が酷く、撤去することになりました。そこは調査の時も怖かったです。

ボイラー室についても損傷が激しく、残すかどうかの議論をしました。何とか倒れないように上からドリルで穴をあけて、そこに鉄筋を刺してエポキシ樹脂を注入して補強することで倒壊を防ぎました。復原時に天井部分の補強も同時に行いました。

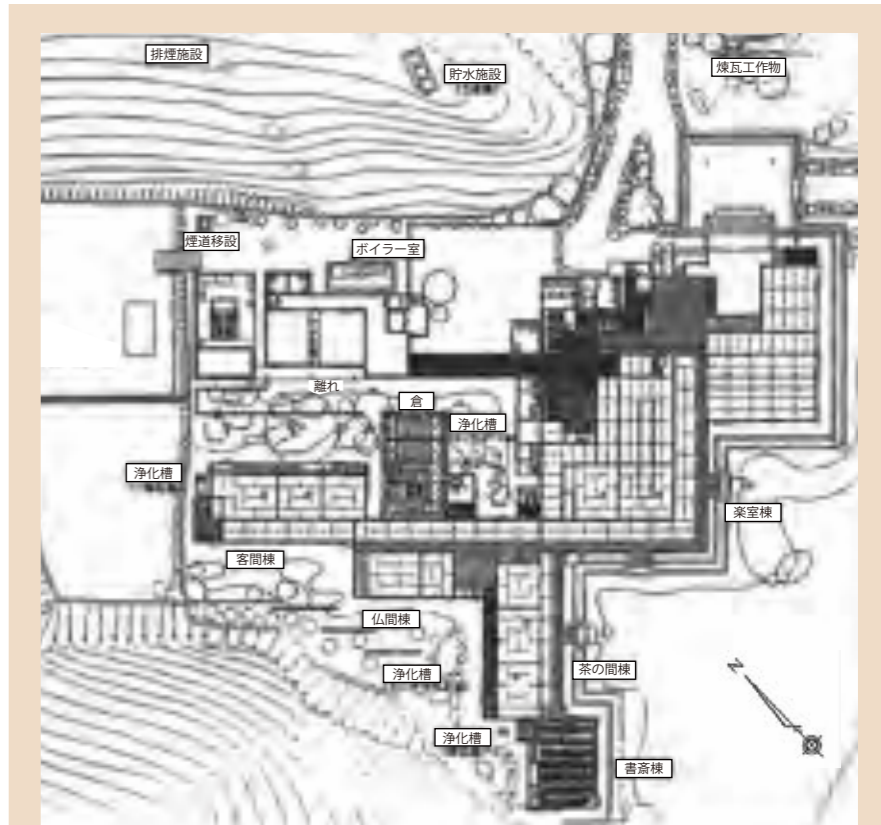
本棟の屋根は構造家に協力してもらい、表面に補強部材が現れないように補強を行いました。検討の際には安井空さんと「補強のやりすぎで材料をいじめているのではないか」というような議論もしていましたね。

屋根裏には鉄骨のブレースを入れて、できるだけ当時の材料を使用するようにしました。施工図は安井空工務店の武部さんが収まりなどを図面化してくれました。基本的に目に見える位置には補強材はないようにしています。

一鶴翔閣を復原するにあたって、どのような方針で行いましたか？

鶴翔閣はいくつかの棟に分かれていますが、各棟でそれぞれ特色が異なりましたので、その違いに着目して活用計画を立てました。

楽室棟に関しては、室内の損傷が激しく、規模も縮小されていたことから、当時の状態に復元しつつ、竣工後に現在の用途に合わせて利用することも予想して計画を行いました。茶の間棟などの比較的当時の痕跡が残されていた棟では、より詳細な復原が可能であったため、できる限り当時の状態に戻しました。二番蔵に関しては状態が悪かったことや、建設当時のものではなく、増築されたものだと考えられたので撤去しました。その他の増築部分も撤去しています。



鶴翔閣復原修理工事後平面図 1/600 図面提供：マヌ都市建築研究所

一最後に、復原する際に特に大変だった箇所などはありましたか？

楽室は規模が変更されていたので、元の規模に戻すのが大変でした。復原するには、古写真でどれくらいの規模だったのかを推測したり、ヒアリングを行ったりしました。ある程度建物の規模が推定できた部分は発掘調査を行うことにし、その結果、地業の痕跡をいくつか見つけることが出来ました。

これらの調査結果をもとにして、復原図面を制作しました。

一本日は貴重なお時間をいただきありがとうございました。

（2022/6/8 取材担当：池田・穂屋下・トウハ）



竣工時の関係者集合写真 写真提供：マヌ都市建築研究所

西先生（写真中央）、板谷さん（二段目右から4番目）が写っている

04 利用形態の変化

楽室棟入ってすぐの場所においては広い部屋が2つある。椅子座に対応できるよう天井が高くなっていた。現在は会食、会社や学校の講演会場、茶会の立礼式などの会場としても利用されている。また、お正月には庖丁式や箏曲演奏を行うこともある。



楽室棟 内観写真

茶の間棟については楽室棟、前庭と併用することにより、広がりのある空間として利用でき、庭園にも面している。

貸出できるスペースで、結婚式などの様々な撮影会や、会社の会議、お茶会のスペースとしても利用されている。また、お正月には庖丁式や箏曲演奏を行うこともある。



楽室・茶の間棟に隣接する庭

書斎棟は茶の間棟の奥に位置しており、他の棟より床の高さが高くなっている。元は床の間のある和室であったが、床の間をマントルピース（飾り暖炉）と板敷に改築し、椅子や机などを置いて洋室として使われていた。

ボイラー室については、既に内部のボイラーは撤去されているものの、安全対策として煉瓦壁に鉄筋を通すなどの補強を施された上で、現在も遺構として残されている。



書斎棟 内観写真



書斎棟 マントルピース



ボイラー室 外観写真

鶴翔閣の周囲は植栽が施されており、現在は外側からはその姿はあまり窺えず、玄関からもファサードが隠れている。

植栽によって空間が囲まれることで、プライバシーが保たれるように計画されており、中庭での結婚式などで他の利用者の目をあまり気にしなくて良いといった声もある。またこの植栽は、復原にあたり迎賓施設として使用する際に、ゲストの安全を守る為に計画されたものでもあり、昔との利用方法の違いが植栽にも現れている。



植栽に囲まれた庭部分

05 建材の遍歴と設備の工夫

●古材と新材の比較

楽室棟は、縮小されていた大広間や廊下を建設当初の状態に復原したことに加え、損傷が激しかったこともあり、多くの新材が用いられている。中には復原時の埋木処理によって修復された部材もあり、材料の新旧の違いが比較的わかりやすく確認できる。



復原された大広間



新材と修復された古材の対比

しかし、いくつかの柱には復原時の処理とは異なる痕跡が見受けられる。これは、貫穴や枿穴をもつ部材を他所から持ち込み際に、埋木処理を施し転用されたものであるとされている。他の棟と比べ柱の角が大きいことや鴨居の位置が高くなっていることも転用材に関係するのだろうか。



復原前から残る埋木処理の痕跡

楽室棟に比べて損傷の少なかった茶の間棟や倉などでは、昔から使われていた材料を再利用している部分や、保存状態が良かったため、あまり手を加えていない部分も存在した。



創建当初から使われている丸桁



創建当初から使われている倉

●照明設備について

楽室棟は復原にあたって照明・空調設備が完備された。照明設備は、現代の様式で天井裏に配線が巡らされているが、形状は当時のものに寄せている。電線に関しては、建設当初からすでに地中に埋められている。それ故に鶴翔閣の周辺には電信柱がなく、美しい景観が維持できている。また、楽室棟は復原整備時に掘り炬燵に変更されている。



新設された大広間の照明設備

空調設備やコンセントは、内観を損なわぬよう床下や天井裏に隠され、表面には現れないような工夫がなされている。また通気口に関しては、意匠的な違和感がないようにすると共に、復原時の改造であることがわかるように表現されている。「保存」と「活用」の両立を実現した。

しかし、元来この建物は冷暖房などの空調設備を使用することは想定していない時代のものであるため、空調設備が設けられたことにより復原後に劣化した部材がいくつか見受けられる。客間棟の天井には天井裏の内部結露が原因で一部に白カビが発生している。楽室棟の柱には、冷風を長時間受けたことによる影響で室内が乾燥し部材に亀裂が発生している。



カビが発生した天井



乾燥により亀裂の入った柱

復原研究は、後世に歴史的建造物を残すという意味で重要な役割を持つ。また、活用し続けていくためには、意匠的・構造的・利便性のそれぞれに配慮して計画する必要がある、非常に難しい行為であると感じた。

編集後記



今回の探訪は、西先生と復原研究をテーマとし、代表的な事例として鶴翔閣を取り上げた。取材や調査を通して、建設当初の姿を再現しつつ現在の技術を導入することが復原建築の魅力だと感じた。また「活用」することが建築を保存する上で重要であると考えた。(穂屋下直輝／内田・姜研究室)



西和夫先生の復原研究事例である三溪園の鶴翔閣と呼ばれる建築物を調査対象とした。以前から何度もこの建築は目にしていたが、昔の資料収集、内部見学、取材を行うことで初めてこの建築の価値を知ることができ、建築の歴史を知ることの重要性を再認識した。(池田直也／内田・姜研究室)



今年の探訪は三溪園の鶴翔閣が対象になり、日本の伝統的建築の魅力を更に感じられ、重要文化財建築の復原手法も身につけた。そして、鶴翔閣に限らず、三溪園の敷地内他の建築も見学でき、さながら原三溪の当時の暮らし方が見えるような体験ができた。(オイン シャン ゲン／中井研究室)



探訪とは読んで字の如く探りに訪ねることだが、それが物事の知見にとってどれだけ重要なことか改めてわかる。横浜にある三溪園は建築史、保存技術だけでなく造園や運用まで多くの事柄が折り重なってできていた。皆さんにも気になった場所には足を運んで欲しい。(猪狩勇斗／曾我部研究室)



今回の調査を通して、復原時の苦難を知ることができたとともに、建築を見る視点が増えた。建築は使われ続けなければ、廃れていくという考えから、過去の姿を再現し、現在ではどのように運用していくかを同時に考えなければいけない。その難しさを学ぶことができた。(篠原光汰／山家研究室)



日本の古い建築の復原工事を初めて体系的に学べた。板谷さんのお話を聞き、全解体工事から再度復原することは、非常に大変であると感じた。今回の調査を通して、復原工事の注意点と過去の姿を再現する上で、現実に即して難しさを学ぶことができた。(トウハ／山家研究室)

付記

今回、三溪園鶴翔閣を取材するにあたりご協力いただいた、公営財団法人三溪園保勝会、原末織様、岩本美津子様、ほかご協力いただいた多くの皆様に御礼申し上げます。また、取材ページを執筆するにあたりご協力いただいた板谷龍二郎様をはじめ、株式会社マヌ都市建築研究所の皆様に御礼申し上げます。

修士論文

竹本 真
三浦 悠介
長谷川 舞
加藤 佑規
鈴木 杏奈
三浦 亜也奈

●ディプロマ賞



竹本 真
Makoto TAKEMOTO
内田研究室
UCHIDA lab.

ドイツ人建築家ポール・シュルツェ＝ナウムブルクの建築思想について
A study of the architectural ideas of the German architect Paul Schulze-Naumburg

-ヴァイマル期 (1919-1933) の「屋根論争」におけるモダニズム建築批判を中心に-
-Focusing on the criticism of modernist architecture centered on the "roof controversy" of the Weimar period (1919-1933)-

1. 研究背景と目的

本研究は、近代ドイツで当時最も影響力を持っていた「ナショナリスト」とされる、ドイツ人建築家ポール・シュルツェ＝ナウムブルク (Paul Schulze=Naumburg; 1869-1949) に注目し、これまで着目されてこなかったナショナリズムの観点よりモダニズム建築を考察する。国内外問わず、彼についての建築史的研究はごくわずかであり、彼の活動の全体像や主張の詳細な分析はなされておらず、未だ不明瞭な点が多い。

本研究ではナウムブルクの建築思想の分析と、陸屋根使用の是非が問われた「屋根論争」への関与を通じてモダニズム建築の形成過程への影響関係を明らかにすることを目的とする。近代ドイツのモダニズム建築の再考より、近代ドイツ建築及びナウムブルクについて新たな視座をもたらすことを目指す。

2. ポール・シュルツェ＝ナウムブルクの建築思想

ミュンヘン分離派、ベルリン分離派での活動を経て、著書『文化研究』シリーズ全9巻 (1901-1917) を出版した。1904年には、ドイツ郷土保護連盟 (Deutsche Bund Heimat) の初代会長に就任したことでより保守的建築思想を主張していったとされる。1928年頃からは、著書『Kunst und Rasse』(1928) に代表される人種差別的な主張、そして1930年のナチス入党より、伝統回帰を求めた過激な「ナショナリスト」となった。

ナウムブルクは一貫して19世紀初頭への回帰的建築思想を唱え、彼の根幹原理であったことがうかがえた。彼の建築思想の分析より以下の点を重要視していたと考えられた (表1)。

中井 ハインリヒ・テッセナウは「屋根論争」ではどのように関わってくるのですか。

竹本 1901年にナウムブルクとの関係性が窺えます。また1927年の『Das Neue Frankfurt』「Das Flach Dach:陸屋根」の中で近代建築家がエッセイを寄せていますが、彼だけ屋根全体を扱っています。

山家 モダニズムの再考でいくと、ドイツ工作連盟やピーダーマイヤー様式、生活全体とも繋がると思います。今後どう展開しますか。

竹本 ドイツ工作連盟、ピーダーマイヤー様式、イギリスといった繋がりは派生できると思います。モダニズム全体を横に広げつつもナウムブルクへも広げる必要があります。

- 形態**：ドイツの気候風土を理解した上での、伝統的な形態、特に切妻屋根を重要視した
- 技術**：伝統的建材の使用と職人の技術を重要視した
- マスメディア**：雑誌に多く寄稿し、写真を対比させ、一般読者に理解させる為のプロパガンダを行った
- 社会情勢**：WW I 敗戦という社会情勢に反応していた
- 組織**：「ドイツ郷土保護連盟」といった建築の組織化を進める上記の建築思想は、1920年代の「屋根論争」のなかでも論じられ、彼は「勾配屋根」を支持していく。

3. 近代ドイツでの「屋根論争」

「屋根論争」は建築雑誌上での W. グロピウスとナウムブルクの論考を中心に、ドイツ建築市場で大きな論争となった (表2)。「屋根論争」での論点を以下に整理する。

- 形態**：新時代の新たな統一としての陸屋根と伝統的なドイツの景観としての勾配屋根の対立がみられた
- 技術**：「モダニスト」の精緻な技術論が展開された
- マスメディア**：建築雑誌を中心に議論され、「ナショナリスト」においてはプロパガンダとして扱われた
- 社会情勢**：WW I 敗戦後の「屋根論争」の高まりと、世界恐慌による建設の停滞と共に収束に向かった
- 組織**：WW I 前の「ドイツ工作連盟」と「ドイツ郷土保護連盟」の対立、WW I 敗戦後の「Der Ring」と「Der Block」といった組織としての対立がみられた
- 建築作品**：シュトゥットガルトを中心にドイツ国内で建設された

4. 結論

ナウムブルクの建築思想の分析より「屋根論争」での主張を通じて、モダニズム建築の形成過程への影響関係の考察を行った。以上、本研究では一般的に「モダニスト」、「ナショナリスト」と称される建築家らは、いずれも建築の改革を目指していたと

考えられ、「モダニスト」は“革新的改革派”、「ナショナリスト」は“保守的改革派”の建築家として位置づけられた。そして、ナウムブルクはさまざまな論考を通し、“保守的改革派”を率い、改革を推し進めた人物であったと位置づけられた。

表1：ポール・シュルツェ＝ナウムブルクの経歴と主な著書での主張

近代ドイツ史	帝政ドイツ 1871-1918		ワイマール共和国 1918-1933		ナチス・ドイツ 1933-1945				
	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1945
	・普仏戦争 (1871) ・独・墺同盟 (1879) ・独・仏・墺同盟 (1881)		第一次世界大戦 (1914-1918)			・世界恐慌 (1929)		第二次世界大戦 (1939-1945)	
	・ドイツ景観重要地域における景観悪化防止法 (1907)		・ロシア革命 (1917)						
建築思想	① 形態	書籍：36 雑誌記事：142 合計：178		・1901『文化研究 (1) 家の建設』…切妻屋根は形態的にドイツに相応しい ・1927『建築のABC』…陸屋根は降水の多いドイツでは相応しくない ・1904『文化研究 (4) 町の建設』…陸屋根はイタリアのもの ・1925『ブルジョワの家』…「陸屋根」は地中海 (ギリシャ) の形態である ・1928『芸術と人種』…建築は人種によって決定される ・1929『ドイツ人の家の顔』…ヴァイセンホーフは東洋のもの					
	② 技術	・1901『文化研究 (1) 家の建設』…切妻屋根は排水性よりドイツに相応しい ・1924『住宅の建設』…建築は文化的価値観に基づいて建設される ・1904『文化研究 (4) 町の建設』…ビルダーの技術を優先 ・1925『Uhu』「勾配屋根」…RC造は高価、寒冷のドイツでは相応しくない ・1927『陸屋根または傾斜した家?』…勾配屋根は排水が容易、低コスト						・1901『文化研究 (1) 家の建設』…蒸気機関はエネルギーの機能的な表現として『美しい』 ・1924『Das neue Zeiss-Spiegel Licht』…近代的なカメラレンズを好む	
主な出版物でのその主張	③ マスメディア	①『Kulturarbeiten (1)』1901 pp.12-13 より引用 ②『UHU』1925.4『Wer hat Recht? Traditionelle Bauen oder Bauen in neuen Formen』Walter Gropius, Paul Schulze-Naumburg, Ullstein Verlag pp.31-32 より引用 ③ Paul Schulze-Naumburg『Das Gesicht des deutschen Hauses』1929 p.24 より引用		① ② ③		良い例 / 悪い例の写真を対比させ一般読者に理解させる為のプロパガンダを行う 意図的に勾配屋根 / 陸屋根を対比 意図的に地中海の陸屋根 / ヴァイセンホーフを対比			
	④ 建築組織	①『Dekorative Kunst』1908『Paul Schulze-Naumburgs Bauten』p.233 ② Julius Posener『Paul Schulze-Naumburg - Maler, Publizist, Architekt 1869-1949』1989 p.93 ③『INNEN-DEKORATION』1919.10『DER-CECILIENHOF IN POTSDAM』p.329 ④『Die Kunst im Deutschen Reich』1939『Beilage Baukunst』p.215		① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦		・1901『ザレッカー・ワーゲーショップ』創設 → 1927 解散 ・1904 ドイツ郷土保護連盟 → 1913 会長辞職 ・1907『ドイツ工作連盟』設立人の一人 → 1927 連盟脱退 → 1928『Der Block』会長就任 → 1929 ドイツ文化のための戦闘リーグ参加 → 1930 ナチス入党			
⑤ 建築作品	① 1904 グルリ博士の家 ② 1911 メルゼブルクの住宅 ③ 1912-1927 ポツダムのツェリエンホーフ宮殿 ④ 1926 ダムスヘーエのゲストハウス		① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦						

表2：1920年代～1930年代の「屋根論争」での主張と流れ



●ディプロマ賞



三浦 悠介

Yusuke MIURA

山家研究室
YAMAGA lab.

アナザーパスを有する建築

*An architecture has the space appears
if the conditions are met*

-神奈川県足柄下郡真鶴町を対象として-
-Proposal for Manaduru district in Kanagawa-

中井 アナザーパスという考え方は面白いと思った。アナザーパスについては、全て建物の内部を通り抜けるものなのでしょうか。

三浦 真鶴駅前で計画をした3つの建物については建築内部を通り抜けるものになっています。その他の建物は、建築の半外部や外部空間の通り抜けをメインで計画をしました。

中井 内部でも外部でも、扉などにより管理できるパスになってしまっていると感じました。あえて管理しやすいパスにした理由はありますか。

三浦 誰も管理していないような場所も地域の風景になるというこの地域の特徴を活かした建築計画を行ないました。さらには、人だけでなく外部環境の要素によって発現するものもアナザーパスとして計画を行いました。

計画概要

世の中には、常時通れるわけではないが特定の条件により発現し、街を地続きにしている空間がある。本計画は、そのような空間を「アナザーパス」と呼び、それらを建築が有した際の空間可能性や地域構造の在り方について模索した提案である。



千畳敷



商店街(書店)

計画1:人の営みを応用し、時限的辻を発生させる場所性(真鶴駅前通りエリア)



siteA



siteB



siteC



計画2:植栽や他生物などの多様な時間軸を応用した背戸道とのシーケンス(旧真鶴銀座エリア)



● 優秀賞



長谷川 舞
Mai HASEGAWA

中井研究室
NAKAI lab.

渋谷駅前の市街地における建物の高低差と空地がつくる
街区内部の構成と利用に関する研究

Spatial composition and use of voids in blocks in
the central area of Shibuya

1. 研究背景と目的

現代日本の都市空間は高密度化が進んでおり、高さ制限や、開発の過程で街区には様々な高さの建物が集合し、それらの高さの違いによる凹みや隙間が生まれている。一方、近年の建築設備の発達により、建物の屋上や壁面には室外機や変電設備、ダクトなどの設備機器が設置されることが多い。これまでの都市空間に関する研究は、主として建築群のファサードがつくる街路沿いの街並みなどを中心に行われていたが、上述したような街区内部のヴォイドも、人々に意識されない空間ではあるが、現代都市の人々の活動を支える上で不可欠といえる様々な設備が集積された、いわばインフラスペースとして重要な役割を担う都市空間の一部であり、そこには表側の街並みとは異なった都市の現実が現れる独特な空間性が見出せる。特に渋谷駅前の繁華街は、すり鉢状の地形をもつこと、不整形な街区や細街路が多いこと、各時代の開発による大小、高低様々な建築群が混在していることなどの特徴から、多種多様なヴォイドが形成されている。そこで本研究では、渋谷駅前の繁華街の街区内部のヴォイドに着目し、それらの構成と要素の特徴を調べることで、都市の街区内部に潜むインフラスペースともいえる、未だ認知されていない都市空間の空間構成の一端を明らかにする。本編ではまず街区内部のヴォイドの構成について述べる。

2. 街区内部のヴォイドの構成・要素

街区では、建築面積や高さが異なる様々な建物が密集した結果、低層建物の上空に、より高層の建物壁面で一部囲まれたようなヴォイドが形成されている。そのヴォイドは、街区を貫くような形状を有し、4つの街路に面する。また、ヴォイドには、開口のほか、避難階段、室外機などの設備機器がみられる。そこで各ヴォイドにおける地上および屋上、または壁面それぞれにみられるこうした各要素について、採光や人の利用などの計画系要素と、機器ダクトなどの設備系機器に分けて調べた。

山家 こちらの写真は、資料としては何かで持ってきたのか、普段歩いて見える視点ではないので、写真はどこから使いましたか。

長谷川 ヴォイドとしては、空撮しか見えないものなので、Google Earth を使い、路地から見える空間などは、実際に行って、撮ってきたのが多いです。

山家 都市計画的に言うと、こうしたヴォイドが魅力的だと思うけれども、未利用容積という風に見えて、今後の都市開発や、街並みの影響という重要な知見をもうちょっとと説明してください。

長谷川 現代日本の都市では再開発が進み高層ビルが立ち並んでいます。しかし、それ以前に建てられた建物の生み出す偶然的なヴォイドや露出した設備機器による景観が街を特徴づけているのではないかと、という仮説で研究を進めました。

3. 空地の有無と建物の組合せ

ヴォイドは地上の路地や駐車場など(以下、空地)と、当該街区内部で相対的に低い建物の屋上面から成る。そこでまず、対象とした各ヴォイドにおける空地の有無について調べた。その結果、高層と低層の高低差のみから成るものは全体の約6割と最も多かった。一方、駐車場や路地などの空地を含むものうち低層建物とともに周囲を高い建物に囲まれるものが約3割みられた。また、高層建物間の隙間のみによるヴォイドもいくつかみられた。また、低層建物を含むヴォイドにおける建物の規模と数についても調べたところ、その約半数が小規模建物が複数集合したものであった。

4. ヴォイドの接道と平面形状

街路に面するヴォイドは、街並みにも影響を与え、かつ街区内部の視覚的な抜けや拡がりをつくり出すことがある。そこでヴォイドの接道数を平面形状について調べた。その結果、1辺だけで接道する単純なものが全体の4割みられた一方、2辺以上で接道するものの方がより多いことから、街区内部のヴォイドには多様な形状がみられることが分かった。

各事例の構成における共通性や相違点を考察するために、上述した空地と建物の組合せ、接道と平面形状について集計し、主に空地の有無と接道および形状ごとに整理した結果、いくつかの構成パターンを導いた。

5. 構成と要素の組合せによるヴォイドタイプ

まず、低層建物の屋上のみヴォイドからなるものうち、①、②はそれぞれ1辺のみまたは2辺で接道するヴォイドで、かつ要素をほとんど持たない単純なタイプといえる。これらのなかには、角地に建つ低層建物群が開発されず残され、高層のビルに囲まれてしまったような

例もみられる。一方、③は②と同様の構成を持つが、側面の窓や平場の屋上をもち、人が利用し得るヴォイドとなっているタイプである。これらに対して、④～⑥は設備が集積されたインフラのためのヴォイドとなっているタイプである。とくに⑥は接道面も多いため、そうしたインフラが、街路側にも表出していることが特徴といえる。次に、低層建物屋上と地上の空地の組合せによるヴォイドをもつ⑦は、街区内部に路地を有し、そこに小規模建物が隣接する場合が多い。また、地上の空地のみからなる⑧は、駐車場や、建物のセットバックで生じた空地を囲む壁面に窓が設けられ、周囲の建物の採光、通風のためのヴォイドとしても機能しているといえる。⑨は建物間の隙間で、地面が露出しているもので、階段の設置などに利用されている。

以上述べてきた典型的なタイプに対して、少数派ではあるが、特徴的なヴォイドもいくつかみられた。たとえば宇田川 13(表3右下)は地上に袋路状の路地を持ち、その路地からは街区のヴォイド内に集積した室外機やダクトなどの設備が見えるもので、人が入り込むことができるインフラスペースとしてのヴォイドとして特徴的な例といえる。

また宇田川 28(同中央)は、街区の中央に駐車場として利用される空地が、手前側の低層建物と周囲三方の高層建物群に囲まれることにより、2段階の高さで囲まれた中心性の強い、人が立ち入れる特徴的なヴォイドとなっている。また、地区別には、道玄坂は建物のみのヴォイド(①～③、⑤)が比較的多いものに対して、空地を含む比較複雑な構成のヴォイド(⑦、⑧など)は宇田川町のものが多かった。以上、渋谷駅前における密集市街地の街区内部ヴォイドを構成と要素という視点から分析し、タイプを導き比較検討することで各特徴を明らかにした。

6. 結

本研究では、密集市街地における街区内部に発生する高さギャップに着目し、ヴォイドと捉え、それらの構成と要素を分析することで、これまで意識されていなかった空間から、密集市街地を観察した。表面の意匠だけでなく、裏面や屋上の空間や利用について考えることは今後の都市開発や街並みの検討の上で重要な知見となると考える。



表1 街区内部ヴォイドの構成のパターン

要素 構成	要素 無・少	計画系	設備系	両要素
建物のみ	1面接道 D2-6A D2-9C U21B U12B J1-21A	D2-8A D2-8B ③ D2-29A	U25A U27A U28B ④ U27A	
	2面接道 D2-7A D2-9B U21A	D2-8D D2-29A U32A D2-9A U3A U28A	D2-27A D2-5A U22A D2-6C U29A D2-6D ⑤ D2-5A	U23A U30A
	3面接道 ②		D2-5B D2-6B U22B U24A ⑥ U24A	
建物+空地	1面 D2-7A	U28A U11A ⑦ U10A U16A U31A U34A	D2-8C U10A ⑧ U10A	D2-8C U13A J1-20A U33A U12C U26A
	2面 U4A			
	3面接道 D2-29B	U3B U3C U12A ⑧ U3B	U3B	
空地のみ			D2-29B U13B D2-28A	

表2 街区内部ヴォイドの構成と要素の組合せタイプ

● 優秀賞



加藤 佑規

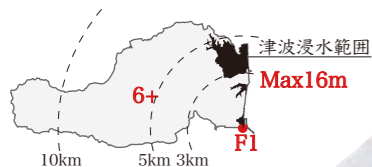
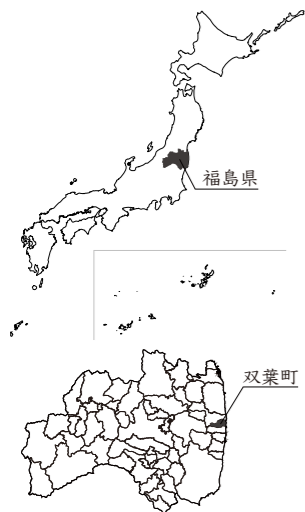
Yuki KATO

曾我部研究室
SOGABE lab.

標葉の語部

Storyteller of the "SHINEHA"

-福島県双葉町における震災復興と町民の帰還促進の提案-
-Proposal for the reconstruction plan and the accelerating repatriation of townspeople in Futabamachi, Fukushima-



内田 梁が7280スパンといった数値をとっていますが、これは解体した家屋の梁などをひとつのパターンとして利用したりしているのですか。

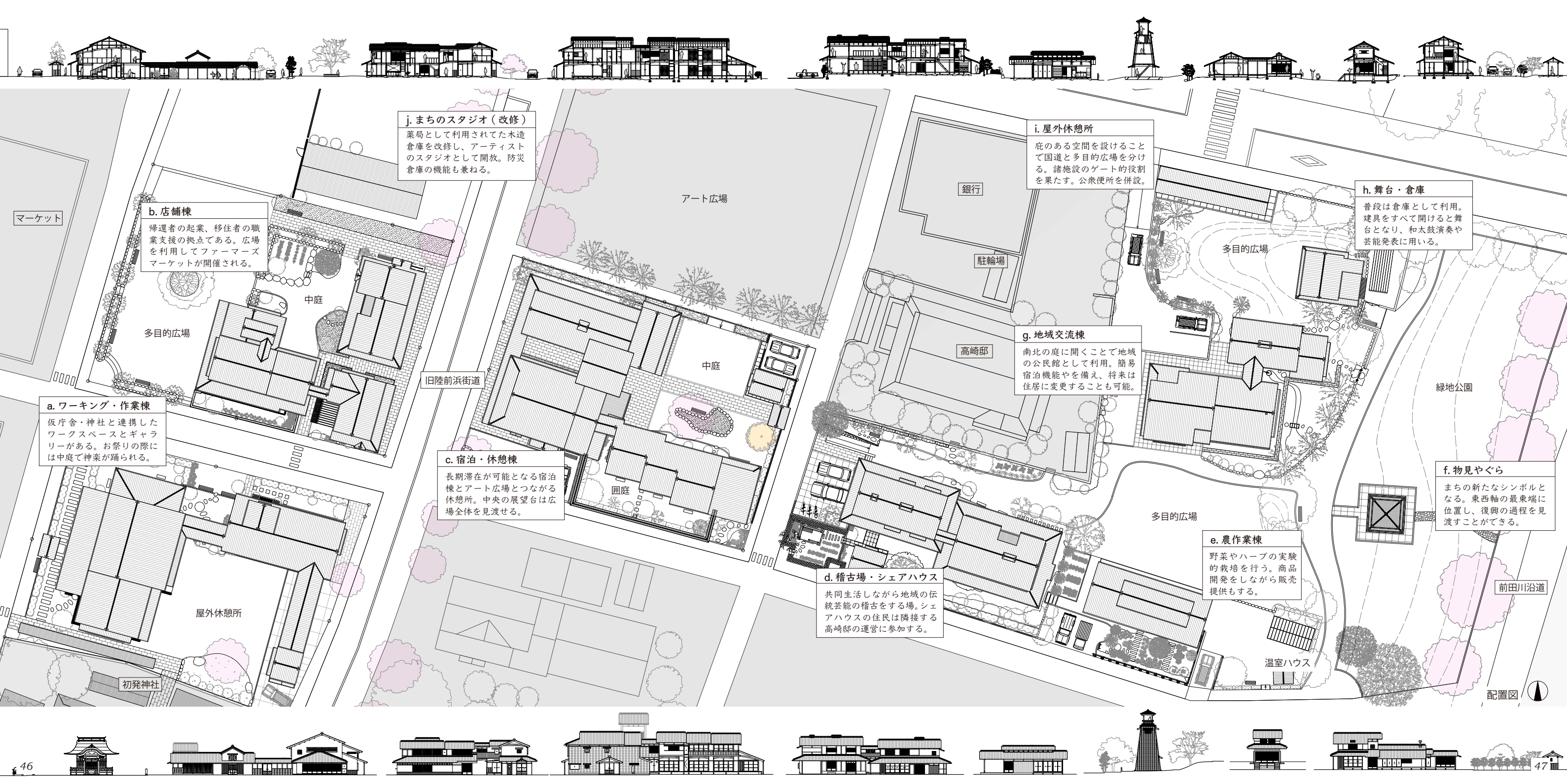
加藤 築120年の由緒ある建物を残したいという住民の声から、それらの解体の際に出た構造部材を転用材として利用しています。この梁組は四間の長さを飛ばすことができ、住居の土間空間として改修しています。

山家 街の記憶とは具体的にどこの建物が対象になっていますか。それと全体計画の中で短期滞在者、長期滞在者など違うスパンでの滞在者が混じっているのはなぜですか。

加藤 全体として5つのエリアに分かれていますが、それぞれの自分が小さい時の記憶を頼りに残すという計画になっています。当時は600人いた住民は現在では800人しかいないのに対して、計画では2000人として計画されていたため、その足りない分を移住者で埋めるような提案をしました。

2011年3月11日に発生した東日本大震災及び福島第一原子力発電所の事故により、福島県双葉町の全域が震災被害および放射線拡散により避難指示区域となった。あの日からまちの営みは失われ、震災から10年が経過した今尚、全町避難が強いられている。





j. まちのスタジオ (改修)
薬局として利用されていた木造倉庫を改修し、アーティストのスタジオとして開放。防災倉庫の機能も兼ねる。

b. 店舗棟
帰還者の起業、移住者の職業支援の拠点である。広場を利用してファーマーズマーケットが開催される。

a. ワーキング・作業棟
仮庁舎・神社と連携したワークスペースとギャラリーがある。お祭りの際には中庭で神楽が踊られる。

c. 宿泊・休憩棟
長期滞在が可能となる宿泊棟とアート広場とつながる休憩所。中央の展望台は広場全体を見渡せる。

d. 稽古場・シェアハウス
共同生活しながら地域の伝統芸能の稽古をする場。シェアハウスの住民は隣接する高崎邸の運営に参加する。

i. 屋外休憩所
庇のある空間を設けることで国道と多目的広場を分ける。諸施設のゲートの役割を果たす。公衆便所を併設。

g. 地域交流棟
南北の庭に開くことで地域の公民館として利用。簡易宿泊機能やを備え、将来は住居に変更することも可能。

h. 舞台・倉庫
普段は倉庫として利用。建具をすべて開けると舞台となり、和太鼓演奏や芸能発表に用いる。

f. 物見やぐら
まちの新たなシンボルとなる。東西軸の最東端に位置し、復興の過程を見渡することができる。

e. 農作業棟
野菜やハーブの実験的栽培を行う。商品開発をしながら販売提供もする。

● 優秀賞



鈴木 杏奈
Anna SUZUKI
山家研究室
YAMAGA lab.

地形による多様な活動を誘発する
建築に関する研究

Research on architecture that induces diverse activities due to topography

-横須賀市追浜駅周辺の谷戸地域を事例として-
-A case study of the Yato area of Oppama, Yokosuka-

■研究概要

横須賀市追浜駅周辺の世と地域を対象として谷戸の空間構成について調査分析を行い、調査に基づいて谷戸の風景を作り出す要素を抽出した。それらを組み合わせながら追浜の谷戸地域で3つの敷地を対象に設計を行い、谷戸の空間的魅力を活かした建築を計画した。

■谷戸の風景の観察・調査

谷戸地域独特の風景から生み出される要素を探ることで、この町独自の建築の手がかりになるのではないかと。まち歩きを行い、擁壁などの主に地形が原因で個性的な風景を生み出している場所をピックアップして、写真を撮り溜めた。



■生活風景の観察 (多様性の創出)

本地域の住宅の外構に着目した時、地形の特徴に「天候(日射)、構造物の凹凸、構造物との視線の高さ関係」の要因が合わさることで住まい手による空間・物質への多様な機能付けが見られた。それらを観察して、読み解くことでこの地域らしい行為を受け止める手がかりとする。

場所	観察した風景	特徴
谷戸の斜面	階段、擁壁	地形を活かした移動手段
住宅の外構	バルコニー、土間	生活空間の拡張
公共施設	コミュニティセンター	地域交流の場
商業施設	野菜店、カフェ	生活機能の充実
公園	緑地、遊歩道	憩いの場
学校	小学校	地域の未来
その他	古民家、空き家	歴史の残存

中井 これはひな壇造成をしないことが重要な点だと思います。3つバラバラな敷地でなく、ある程度まとまった範囲で連続してどういう街並みができるかという提案を行ってもよかったですのではないかと思いますか、どうでしょうか。

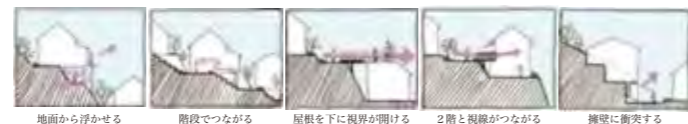
鈴木 まとまった場所で考えることもしましたが、街の全体の住宅や道の配置を見たときに、街を歩く行為を作らなかったら、今回は敷地を3つに分け、街を歩きながら風景を繋げていく方法を選びました。

曾我部 複雑な擁壁が存在していることで、クリエイティブな活動を引き寄せているとありますが、具体的にどのような場所で現れているのでしょうか。

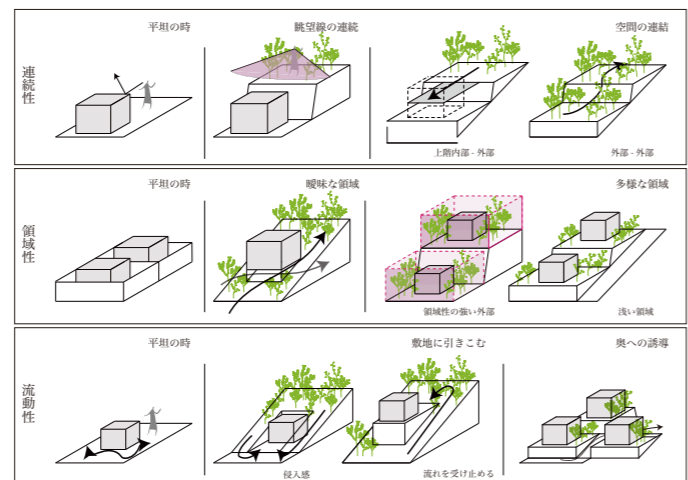
鈴木 例えば、SITE A では元々の擁壁をセットバックさせ、擁壁を建築に内包させました。そうすることで、擁壁と木造部分の間に余白ができ、子供が遊ぶ風景が作り出されるなど、内部ではありますが外部のような空間を作っています。

■住宅と擁壁 / 斜面の関係 (空間への効果)

擁壁によって視界が遮られる場所、屋根より高く視界が開ける場所、奥行き感のある場所、擁壁から住宅を浮かせてできた空間などが交互に連続して出現することで、この地域独特の道の風景を生み出している。

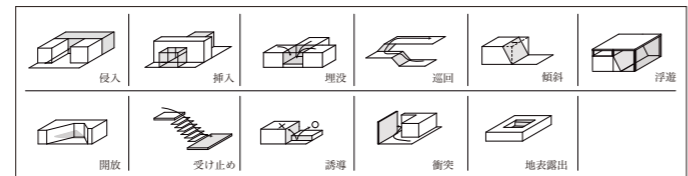


これらの擁壁や住宅の高さ関係が空間に与える効果を「連続性・領域性・流動性」の3属性に分類する。これらの属性は崖の下・上・中間に立つことで、効果が切り替わる。



■構成要素の抽出

上記で得た空間属性から以下の11つの手法を抽出した。これらを組み合わせることで、谷戸を歩いて感じた地形体験と建築内部での体験が連続した複雑な空間を作り出す。



a1) 建築に内包した擁壁の様子
建築内部に擁壁が挿入されることで、内外の生活風景が混在する。擁壁から浮かせた木造部分との隙間は高くて狭い子どもの遊び場にもなる。



a2) 2階住宅部分から土間・畑をみる
スキップフロアで分けられた、解放的な内部となっている。



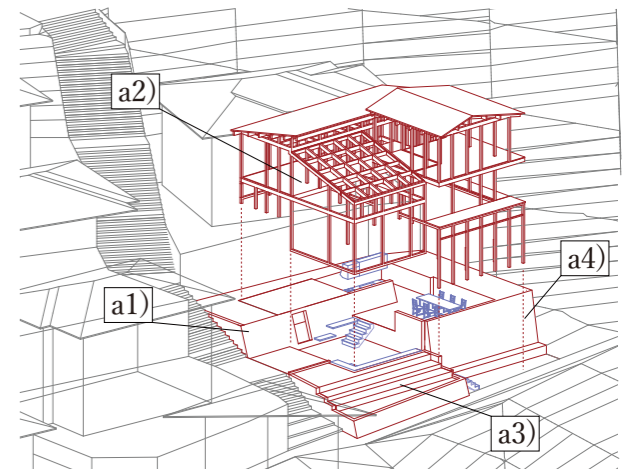
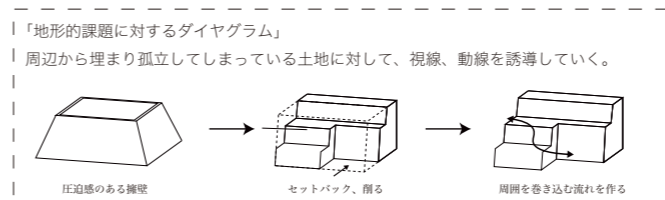
a3) 段々畑の様子
隣接する大階段と並行して段々に削った擁壁に展開する畑では、住人の人だけでなく、周辺の人々も巻き込み、交流を広げていく。



a4) セットバックした擁壁
道が広がったことでできた擁壁との余白部分で野菜市場が行われている。上から降りた柱で行為の多様性をうむ。

SITE A 地域の畑食堂

1階を食堂として開放し、2階部分を住宅とする。周辺の畑と連携して採れたての野菜を使った、直売所、小さな食堂の機能を持たせ、周辺の小学校と食がらつながるコミュニティを形成する。圧迫感と閉鎖感を与えていた3メートル近くあった擁壁をセットバックや徐々に上がっていく高さに調節し、内部に擁壁の要素を組み込むことで、境界線が曖昧になり、内外が緩やかに繋がっていくよう計画した。





b1) 屋根上広場の様子
路地空間を抜けた先に広がる広場。追浜の街並みやお寺を見る。



b2) 階段下から見た様子
屋根上広場へつながる縁側でくつろぐ様子や、集会所でのワークショップの様子が伺える。



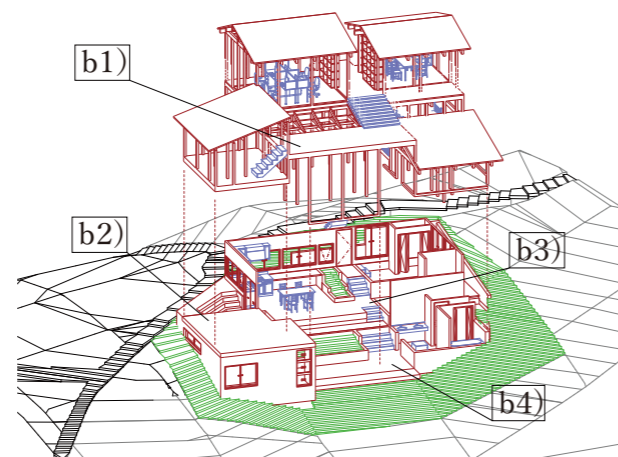
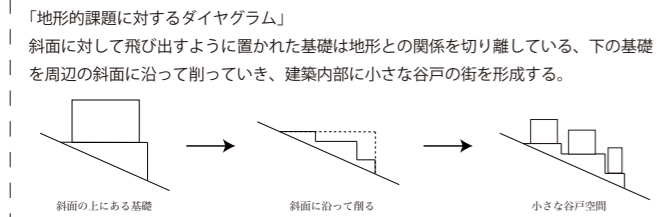
b3) ひな壇状の居室の様子
地形に沿ってコンクリートの擁壁が建築内部に展開されている。地表を復元した場所を設け、街の中を歩いているような空間を作り出す。



b4) 居室から広間を見た様子
広間に向かって階段が連続し、住人が自然と広間に集まるような行為を誘導している。

SITE B 創造の場

1階部分を居住空間、2階部分を地域に解放した共有空間とし、道を歩く人と住人が適度な距離距離を保つ。1階はひな壇のように居室が連なり、地形を感じる生活を送る。共有部分では近くのお寺と連携し、ワークショップを行うなど静かで木々に囲まれた土地で、創作作業に没頭する。



c1) 隣の家と道を挟んで井戸端会議
前家の縁石と繋がり、道で集まる行為が生まれる。



c2) 屋根上広場の様子
路地空間を抜けた先に広がる広場。追浜の街並みやお寺を見る。



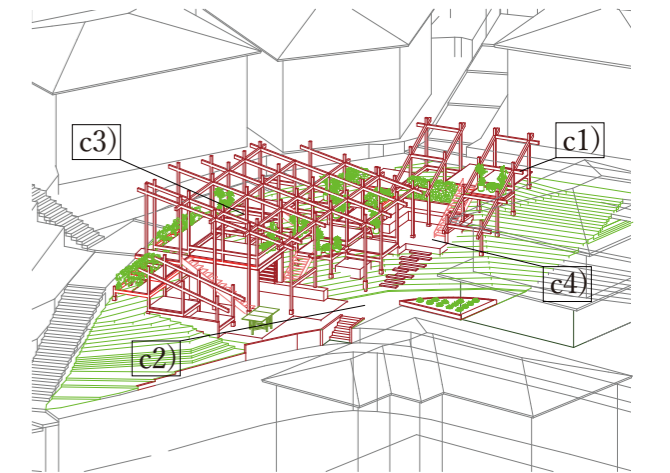
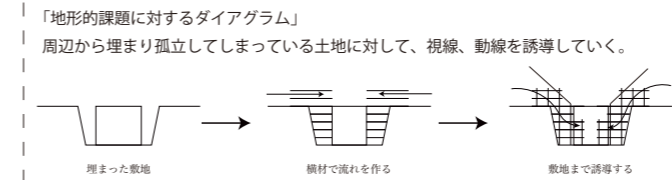
c3) 棚板の植物に水をやる様子
植木鉢を置くこともできる棚板は動線にはみ出し、歩行空間に凹凸を生んでいる。



c4) 休憩スペースの様子
休憩スペースではさまざまな高さの軸組によって、敷地内にある柿の木から採れた柿をかけ、干し柿にするなどの行為が発生する。

SITE C 周辺の延長の場

もうすぐ100歳のおじいちゃんの庭。かつて、桜の咲く季節にはみんなで庭に集まって、お菓子を食べながら桜を楽しんだ。しかし、現在は人が減り、この土地を訪れるのはヘルパーさんのみとなってしまった。おじいちゃん一人、手の届く範囲で庭いじりを続けている。この土地を周辺住居の庭の延長として地域に開放し、みんなで庭を守り、庭で集う風景を築いていく。



● 優秀賞



三浦 亜也奈

Ayana MIURA

曾我部研究室
Sogabe lab.

個性の保存

Saving characters

-歌舞伎町1丁目に置ける都市の更新方法の提案-

-Proposal for urban development in Kabuki-cho
1-chome, Shinjuku-ku Ward-

中井 模型を見ると全体的に白い印象を感じましたが、建物外観は最終的にどのようなイメージを想定していますか。街並みを見ると、そもそも建築的操作は問題にはなっていないと感じました。

三浦 傷ついた外壁や看板がたくさん貼ってあり、それを剥がした跡など、さまざまな痕跡を残した外観になっています。歌舞伎町は個々の欲によって作られた街であるため、それぞれの空間を作るにあたって、ベースとして建築的な操作が必要だと思いました。

山家 読み解き方が難しいのですが、この個性を作るにあたってどういった方針の提案から始めましたか。

三浦 新宿駅直近の敷地ということもあり、大規模都市開発からは免れない立ち位置にあります。そのため歌舞伎町としての要素を残す操作が必要だと感じ、現在は利用が少ない脇道やそのスリット空間などを人が集まる空間にするなどを提案しました。

東京を歩いていると、しばしば周辺から隔離されたような空間に遭遇する

新宿・歌舞伎町はその一つだ

歌舞伎町一丁目と外との境界にはところどころゲートが設けられ
それより先に足を踏み入れると目の前に他とは一変した世界が広がる
暗闇に一晚中浮かび上がるおびただしい量の看板の数々や
建築の前面に剥き出しで配置された設備機器
異様に視界の抜けない街区構成などがこの場所の独自性の担い
他と分離した異世界感を生み出している
このような一般的にネガティブに捉えられる

調停を逃れた要素の蓄積 (= 無秩序な景観) が歌舞伎町一丁目独特の景観を生んでいる

本計画ではそれらを一定の**価値**のあるものとみなしていきたい

現在歌舞伎町を含む新宿では都市スケールの視点から再整備が計画されており
さらなる人の流入の加速に加え
個性を創出する無秩序な景観が失われていくことが懸念される
このような状況を背景に
フィールドワークによって得られた街の個性を
一つに**凝縮した建築**を提案する

今後都市の宿命としてある程度の機能的視点の開発は免れない中
提案する建築が**街の個性を繋ぎとめる存在**になることを期待する

↓作品のリンクに飛べるよ





通りから路地を介して敷地に入ると突如現れる大穴
街の奥行きを感じさせる



ビルの合間を縫うような動線
いつもは近づけない場所にアプローチする



普通なら発生しないような謎の行き止まりを持つ階段



動線の途中に窪みや出っ張りを設け、居場所の選択肢を増やし、
自分なりの心地よさを街に見出すきっかけに

この建築の空間体験



裏界通路に面した壁面の凹凸に小さな人の居場所が発生し
視線の立体交差が生まれる

大きく開いた開口の先には街の一角のような景色が見える
しかしここはビルの4階

ビルのボリュームから突き出したエレベーターシャフトと
天空デッキ

上階に行くにつれオープンな場所が多くなりつつ
歌舞伎町らしい不穏な路地の雰囲気は立体的に積層する



修士論文

◎都市の密集市街地における建物の高低差と空地がつくる街区内ヴォイドの構成と利用に関する研究 渋谷駅前市街地を事例として	長谷川 舞
コロナ禍を契機とした地域交流イベントに関する調査研究 横浜市郊外住宅地を対象として	遠藤 啓吾
人が集う場所 神奈川県横浜市地域活性化に関する提案	王 欣漢
原生と介入 松陽県六村における複合商業施設計画	解 添禹
◎標葉の語り部 福島県双葉町における震災復興と町民の帰還促進の提案	加藤 佑規
TOKYO HOUSES まちの中のパツファとしての新たな公共性を持った住宅の提案	古城 偉央理
高密度の都市における蟻族の職住一体施設 旧工場リノベーションによる複合施設の計画	蔡 恪非
浦賀団地活性化計画 安全・快適な居住環境の再計画と地域活動拠点の提案	坂本 理久
第三風景の顕在化による緑のネットワークの形成 世田谷区東玉川奥沢地区におけるグリーンハブの提案	佐藤 季也
◎地形による多様な活動を誘発する建築に関する研究 横須賀市追浜駅周辺の谷戸地域を事例として	鈴木 杏奈

建築と自然の繋がり 自然要素との関係に基づく旅館の構成を踏まえて	簾内 俊希
★ドイツ人建築家ポール・シュルツェ=ナウムブルクの建築思想について ヴァイマル期(1919-1933)の「屋根論争」におけるモダニズム建築批判を中心に	竹本 真
地域内の住民の連携を増やす 中国における日本の地域センターの提案	唐 泓
歴史的痕跡から都市を再編集する 品川区旧品川宿を対象として	徳山 碩峰
◎個性の保存 歌舞伎町1丁目における都市の更新方法の提案	三浦 亜也奈
★アナザーパスを有する建築 神奈川県足柄下郡真鶴町を対象として	三浦 悠介
地形と向き合う建築 新宿区荒木町における斜面住宅地の再考	矢野 新
Playing spots 地域全体で行う子供成長支援空間の提案	山本 麻貴
古韻今風 蘇州古城保護区外老朽化団地と周辺商業複合施設の増改築計画	李 嘉文

★ディプロマ賞 ◎優秀賞

2021年度学生優秀作品紹介

卒業研究

- 毛利 菜稜
- 鎌田 芽萌
- 野中 美奈
- 福與 栄多
- 宮島 里帆
- 三富 莉穂
- 池田 直也



卒業設計 ゲスト審査員



鈴木 信弘
Nobuhiro SUZUKI

鈴木アトリエ一級建築士事務所
神奈川大学建築学科非常勤講師



野村 和宣
Kazunori NOMURA

三菱地所設計



中村 謙太郎
Kentaro NAKAMURA

編集者
神楽坂建築塾

撮影 利久



高橋 寿太郎
Jutaro TAKAHASHI

創造系不動産株式会社

●ディプロマ賞



毛利 菜穂

Nazumi MORI
曾我部・吉岡研究室
SOGABE・YOSHIOKA lab.

興復のとりで

Revitalization of the Fortress

観音崎公園における歴史的財産と暮らしの融合

Integrating historical properties and living place in Kannonzaki park.



中村 地中に埋める形を取ったのには理由がありますか。

毛利 観音崎公園には砲台跡や地下壕が今も残っています。遺構の持つ地下的な要素を多くの人に知ってもらいたいと思い、それらに近いかたちを表現しました。地中に埋めることで観音崎らしさを表現し、地域住民が遺構の新たな使い方を探すべきかけとなることを目指しています。

鈴木 ボランティアセンターを海側や人の多く来る場所ではなく山の上に設置したのは理由がありますか。

毛利 観音崎公園の入り口となる通路と、遺構が多くある通路をつなぐ結節点として敷地を選定しています。北側斜面地の良さを表現するため、北側らしい採光を取り入れたり、生態系に触れられる場所などの機能を持った観音崎を学ぶための円錐台状の塔を五つ配置しています。

照葉樹林の要素

観音崎公園は多くの常緑広葉樹で構成されており、樹木になる実を食べに、たくさんの種類の野鳥が集まってくる。



根が深く水源涵養林として役立つ常緑広葉樹
樹冠が高く歩きやすい常緑広葉樹
たくさんの種類のシダ植物



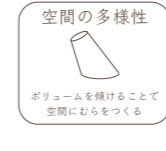
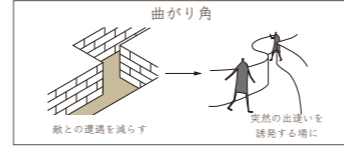
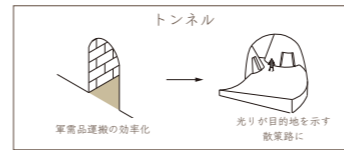
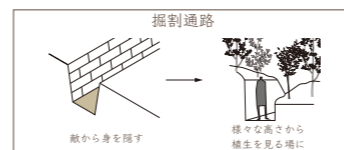
季節によって様々な実がなる
たくさんの種類の小鳥
間伐されたように間隔の空いた木々

遺構的要素

観音崎公園には、砲座をはじめ掘割通路や地下室、トンネルや道などが多く残される。地中に埋まった要素が多く、見えない地中部分では建築物と自然が一体化することで観音崎公園を作り上げている。



うねる道 掘割通路 トンネル



にぎわいの塔

隣を流れる沢や切通しの谷を眺める角度に配置

光の塔

隣を流れる沢や切通しの谷を眺める角度に配置

研究の塔

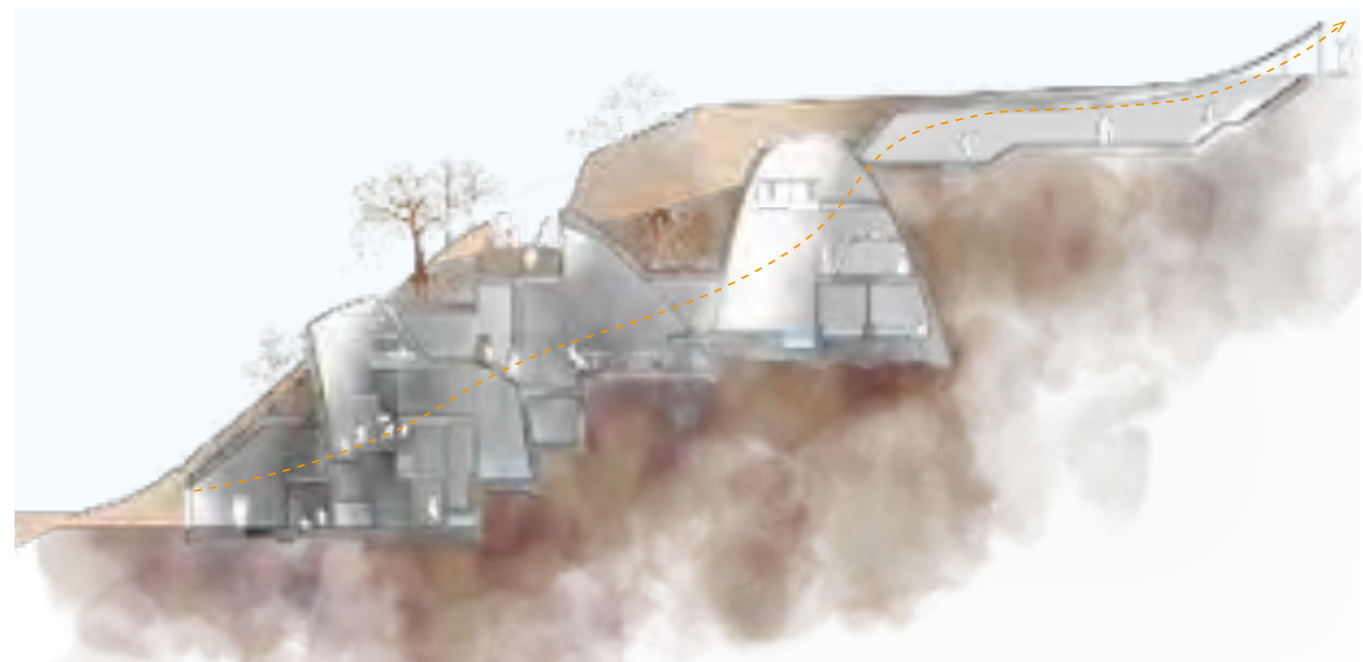
中央方向に傾けている

展望の塔

西の方向の山を眺める方向に傾ける

食の塔

夢・Dream 食堂や海岸の方向に傾け山並みの間から水平線を眺めることができる



研究の塔

光の塔

にぎわいの塔

食の塔

展望の塔



● 優秀賞



鎌田 芽萌
Kayame KAMATA

山家・上野研究室
YAMAGA・UENO lab.

蘇る水辺の風景

Revived waterside scenery

商いと暮らしが混在する親水空間の提案

Proposal of a hydrophilic space where business and living coexist

鈴木 シェアキッチンなど活動する場所での道具や素材を持つてくるルートはデッキを通じてですか。

鎌田 水を引き込んでいる所に船が付き、そこから運ばれ、水の引き込み方で通れたり通れなかったりする場所があります。

中村 かなり水と接近していますが、台風や豪雨などの水の処理の対策はイメージしていますか。

鎌田 現状の護岸形状を保存し、安全面は引き継いでいます。ため池などで緑化計画をすることで雨水をゆっくり川に流す工夫をしています。

中村 各住戸は賃貸ですか。また共有空間は誰が管理していますか。

鎌田 ディベロッパーが開発した分譲です。そこに住んでいる人たちで管理を行うことで、そこならではのコミュニティと緩やかな関係づくりにつながると思います。



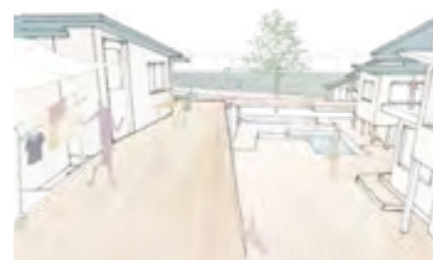
現代的な親水空間の再編

○ふるまいが風景をつくり出す

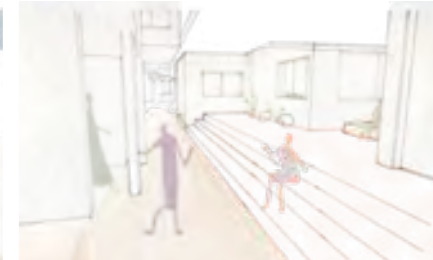
様々な行為の記憶は場所への記憶でもあり、私たちと私たちを取り巻く環境の間では多くのふるまいで満ちている。座る、眺める、食べるなどの様々な行為のグラデーションの豊かさが場所の特性になり風景に滑らかに溶けていく。いかにその場所に人々を寄り付け、受け入れ、誘っているか。単純なふるまいがその場所できれいな固有の体験へと変貌する。



人々が思い思いに過ごすだんだんテラス広場。住民と地域の人々も利用できるライブラリーがあり情報と会話のきっかけをつくる場になる。



住宅内から対岸まで視線が抜ける。アイストップの形成と上と下で様々なアクティビティが見渡せる。



商店と住宅の間の道。+600の段差で緩やかに分けられ路地的な空間となり生活が屋外・他者へ、路地まで展開していく。



水辺→半屋外→地上→テラスの段階的な空間構成がつくれ、魚屋と手前の半屋外をつなげて一体化して使われている。



水辺から上がったところに広がる風景。商いの賑わいと広場があり、観る・観られるの関係が構築されている。



住宅の通りにある半屋外空間。ビールを飲みながら涼んでいたりと、半屋外空間ではその場所ならではの行為を見ることができる。

● 優秀賞



野中 美奈
Mina NONAKA
六角研究室
ROKKAKU lab.

自分だけの体験を
Experience your own

歩いて想像する詩のようなミュージアム
A poetry-like museum that you can imagine on foot



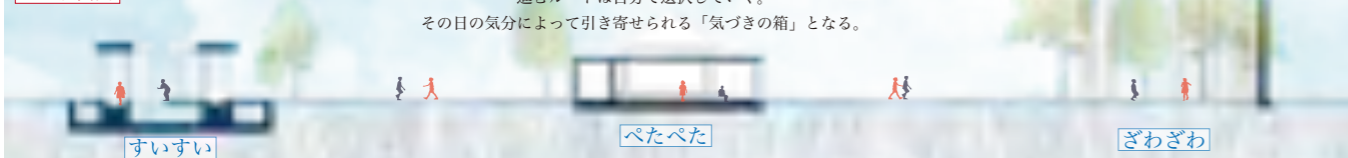
01 概念 / 「歩く」ということ

私にとっての「歩く」- 散歩から見つけたものの記録



私は歩くことが好きでよく散歩や旅に出かける。そこで見つけた**素敵な風景**は頭にずっと残っている。それがアイデアに役立ったり、自分を前向きな気持ちにさせてくれる。そして**私の原風景**となる。

a-a' 展開図



鈴木 博覧会のように一定期間展示する仮設建築なのですか。

野中 常設建築を想定しています。みなとみらいには人が集まる場所が数多くあります。しかしどこも活発に人が行き交い、人のよりどころとなる空間が不足しているように感じました。そこで、日常に必要とする都市の余白空間として提案しました。

中村 デッキという大屋根はなぜあるのですか。

野中 南東側に遊歩道があり、そこから連続して周辺を見渡し、みなとみらいの風景を見てほしいという思いからこの流れを作りました。そして、ボックスの間の空間の場所ごとに表情をもたせ、光、影、空の切り取りを造るためにこのデッキを取り付けました。

02 提案 / 歩くことで気づくことの楽しさを体験する

歩いて空間を体験することで自分だけの気づきを得られる

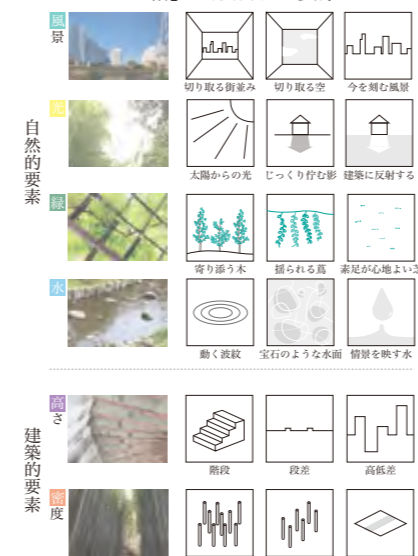


「歩く」という行為から想定されるオノマトペは28個存在する。これらをもとに**気づきの空間**を構築していく。

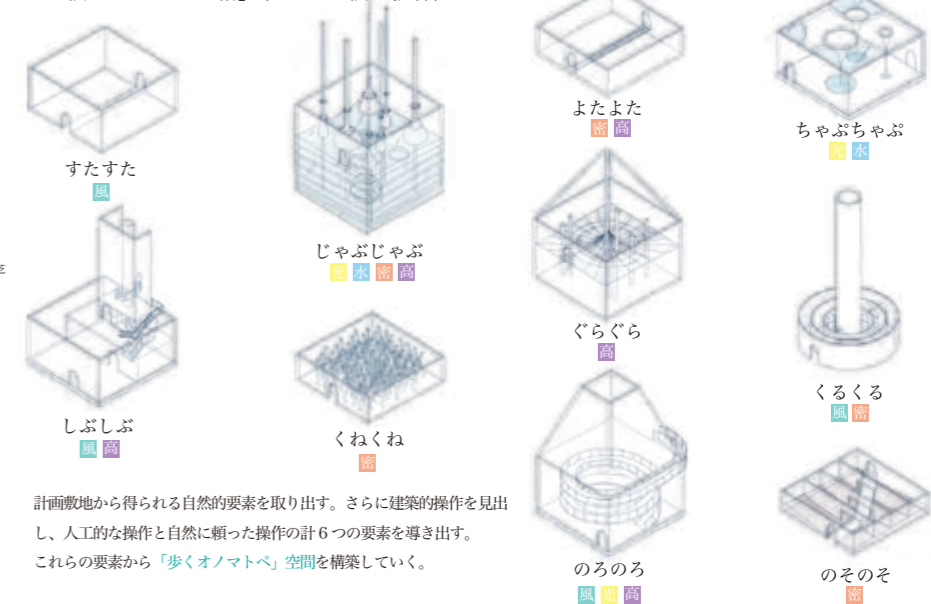


03 「気づきの箱」の形成

a. 「気づきの箱」を形成する要素



b. 28個の「気づきの箱」(のち10個を抜粋)



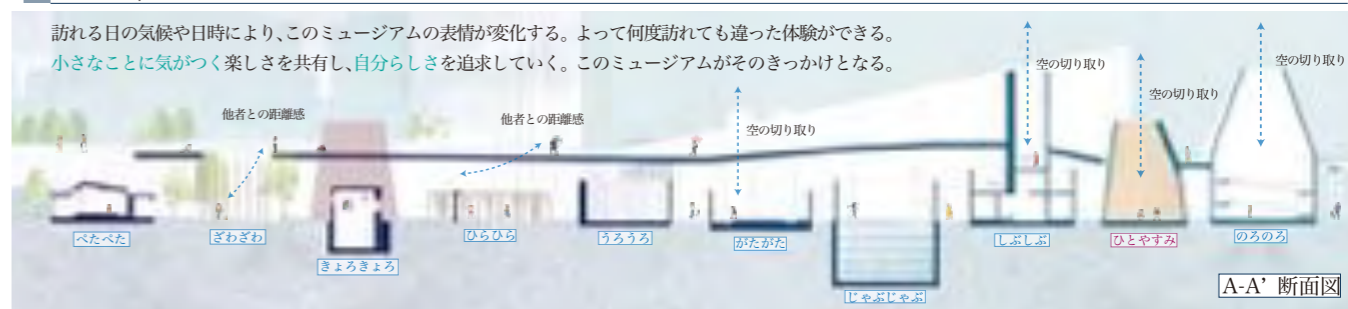
04 空間構成

3つの空間



気づきの箱を散りばめ、ランダムに配置することで自分で探すことの楽しさを感じさせる。ひとやすみする箱もあり、自分のペースで空間体験をすることができる。

05 断面図 / 環境の変化と人の出会い



● 優秀賞



福與 栄多
Eita FUKUYO
曾我部・吉岡研究室
SOGABE・YOSHIOKA lab.

生き生きとした一齣を繕う
Readjust a lively atmosphere

人間と自然のぶつかり合いに分析に基づいた建築の提案

Proposal based on analysis of collisions between nature and humans

鈴木 アレグザンダーを出して我々を説得しようとするのが、逆によくないのかもしれない。難解な上にポストモダンの言語を多用していることで、ひっきりやすくなっているように感じます。

福與 自分でもスタディを重ねるうちに楽しくなっていて、途中からはそういった建築学的な探求が原動力になっていたかもしれません。

鈴木 もっとその純粋に感じたことを全面に押し出したほうが良いと思います。

内田 最終的にたどり着いた田んぼの魅力とは、ズバリなんなのでしょうか。

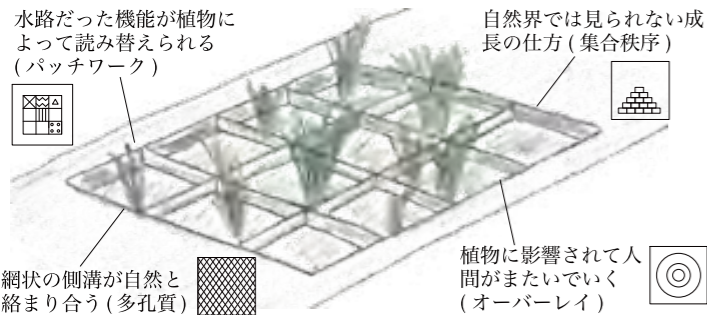
福與 月並みかもしれませんが、このような自然と人間の関係や見方は、他者や対立するものなど様々な場面で適用すると、また違った知見が得られるということです。

内田 そこはシンプルに、「田んぼは楽しい」でいいのではないのでしょうか。理屈があまり先行しすぎないほうが良いと思います。

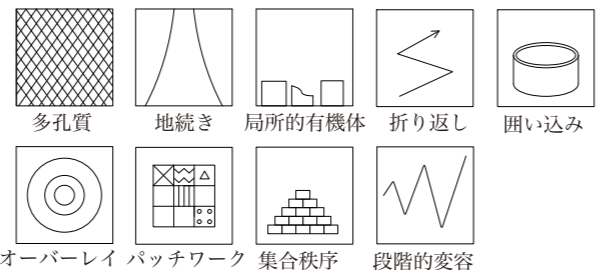
STEP1 異なる要素が混ざり合いつつもどこか一体感を感じる瞬間をスケッチする



STEP2 抽象的に分析する



44のシーンに共通する9つの抽象要素



STEP3 建築の空間に应用可能かを概念模型でスタディする。



STEP4 様々な土地で考えられるようにダイアグラムとして抜き出す。



STEP5 土地が持つ独特の環境特性と15のダイアグラムを段階的に組み合わせる



● 優秀賞



宮島 里帆
Riho MIYAJIMA
六角研究室
ROKKAKU lab.

ならいならわれ

Learn, Learnt

マナビのあり方の再思を軸とした地域ネットワークの提案
Regional network centered on rethinking the way of learning.

中村 規模が大きくなると狙っている壁が周りの建築に埋もれるものと、規模が小さいために埋もれずわかりやすいものがありますが、大きい建築の中に組み込んだときに、この壁ダイヤグラムの配置は埋没していないでしょうか。

宮島 仕掛けに比べ、建築になると存在感は薄れますが、最初に人が入るのはまち中の小さな仕掛けからになると考えたため、仕掛けははっきりとした壁を存在させ、建築規模ではなんとなくそこに存在する程度に抑えました。

鈴木 そんなに壁がはっきり意識されなくてもいいということですか。

宮島 はい。学んでいる間に壁の存在に気づき、初めてそれが学びであったことを認識するような形です。

中村 実験的な手立てとして、実際に公園などに作ってしまっってその様子を写真に撮ったものと説得力が増したのではないのでしょうか。

Method 提案手法

人が集まる場所
外の人の流れ

壁に囲まれた場所には人が集まるが周辺から遮断され第三者と接点を持つ機会は少ない

3つの異なる流れと集まりの交わり方を発生させる

【人の集まりと交差する流れ】 【集まりを垣間見る人の流れ】 【集まりに誘い込まれる流れ】

これらのダイヤグラムをまちの既存施設に関連させ、2つのアプローチ方法でまちに落とし込んでいく。

I 閉じた空間に壁を作る

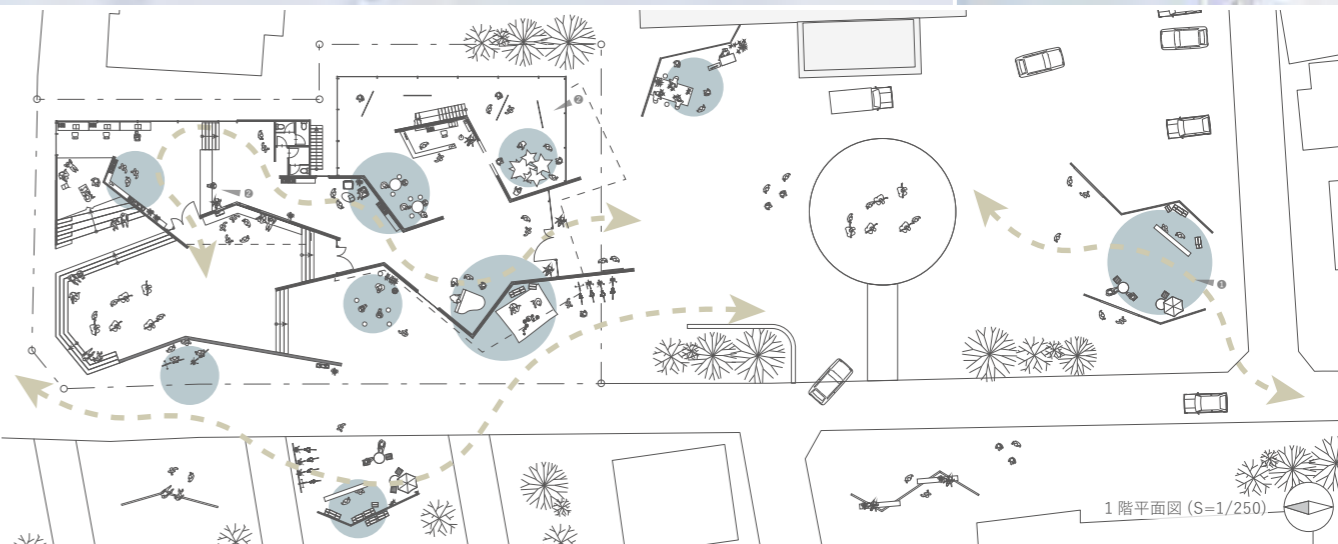
II 開いた空間に壁を作る

<p>ならいわれVII 高架下</p>	<p>ならいわれIV バス停</p>	<p>ならいわれI 東急ストア</p>
<p>ならいわれVIII 自転車置場</p>	<p>ならいわれV 公園</p>	<p>ならいわれII ところの支援センター</p>
<p>ならいわれIX アトリエ</p>	<p>ならいわれVI コンビニ</p>	<p>ならいわれIII レイモンド保育園</p>

Prank 仕掛け



Building 建築



● 優秀賞



三富 莉穂

Riho MITOMI

曾我部・吉岡研究室
SOGABE・YOSHIOKA lab.

地形に根づく建築

Architecture rooted in topography

谷戸地区におけるセルフビルド型複合施設の提案

Proposal of self-build complex facility in Yato area

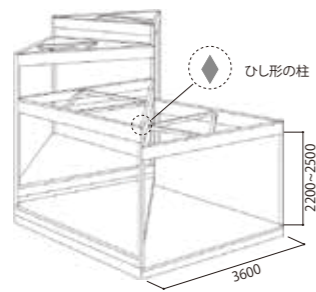
鈴木 建築のシステムと場所の提案のみでは、人を呼びこむことが難しい地域ですが、セルフビルドという設定は必要なんですか。

三富 谷戸地区は元々、人が生活の為に山を切り崩して出来た土地であって、不便だからという理由で何もせず放置されているのは違うと思い、自分達で整備していくセルフビルドが必要だと思っています。

中村 確かに個々はセルフビルドに似つかわしい建築の形態であるが、これほどの規模全体を作るとなると難しいのではないのでしょうか。

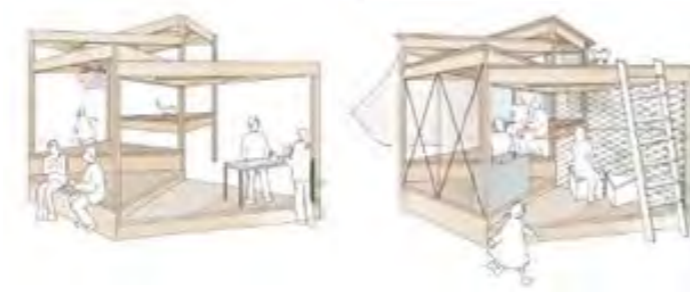
三富 テラスまで全て三角形で構成することを想定し、簡易的に組めるように計画しています。

中村 機械の手も借りる前提で躯体は人や機械に頼り、造作を自分たちで行うくらいのセルフビルドでも良かったのではないのでしょうか。



正三角形のグリッドが連なり、空間を構成し、地形に根付いていく。

【構造計画】

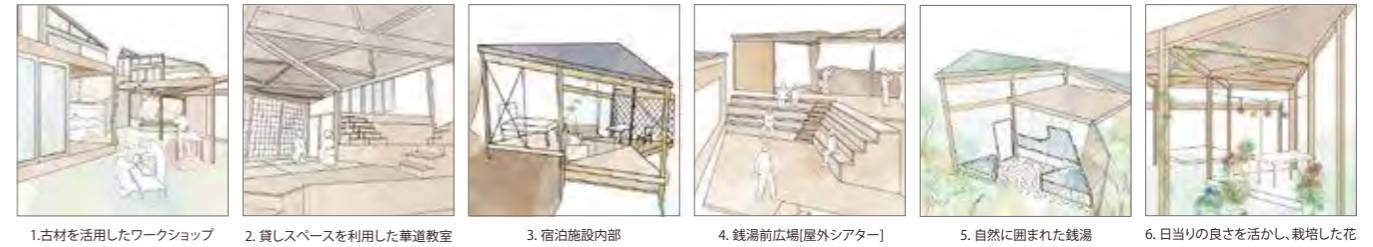


休憩スペース・貸しスペース

店舗

利用する人々によって変化していく

【空間の変化のイメージ】



1.古材を活用したワークショップ

2.貸しスペースを利用した筆道教室

3.宿泊施設内部

4.銭湯前広場(屋外シアター)

5.自然に囲まれた銭湯

6.日当りの良さを活かし、栽培した花



【長手断面図】



【西側立面図】



うらが道と建築の交わり



うらが道から活動を見る



うらが道と空間を繋げる



【素材で空間を柔らかく区切る】



【様々な活動が行われる】



うらが道と空間を繋げる

●ディプロマ賞



池田 直也
Naoya IKEDA
内田・須崎研究室
UCHIDA SUZAKI lab.

明治期における洋館建設と天皇 行幸の関係性について

A study on the relationship of Western-style housing and the Emperor visit in the Meiji era

— 『明治天皇紀』に記録のある行幸事例を中心に—
- Focus on the royal visit example recorded in Meiji Tennouki -

1. 研究背景・目的

幕末から明治時代以降、わが国には西洋から様々な文化が流入され、こうした動きの中でわが国の文化には変化が生じ、建築分野においては積極的な洋風建築の導入が行われた。このような変化は、官舎や学校のような公的な建築物に始まり、次第に日常生活の場である住宅建築にも影響を与えることとなり、洋館建設が行われるようになる。

わが国の私邸における洋館建設の最初期の事例についてみていくと、内田青蔵の研究¹⁾によれば、日本人で私邸に洋館を建設した最古の人物は旧福岡藩主の黒田長知とされ、その洋館は明治4年に起工、同7年に竣工している(図1)。同時期の明治5年には旧長州藩主の毛利元徳も洋館建設を開始し、同6年に竣工したとされている。また、図1を見ると和館の隣に並んで洋館が建設されていることが確認できる。内田はこの住宅形式を「和洋館並列型住宅」と呼び、明治時代の上流階級の間で流行した形式であることを論じている。

ところで、黒田・毛利邸について更にみていくと、両邸には明治天皇が訪れていたことが確認された。このように、天皇がどこかへ赴くことを「行幸」といい、行幸が行われた邸宅では、拝謁・物品献上・余興・食事などが行われ、様々な方法で天皇をもてなしていた。

内田はこうした最初期の洋館建設の開始にあたっては、その最初の事例である黒田や毛利邸に行幸が行われていることから、洋館建設と行幸の間に深い関係があったことを指摘している。しかしながら、内田の論稿や、行幸について論じた他の論稿でも明治天皇の行幸があった洋館について、全てを対象として詳細には論じていない、くわえて行幸時にどのような建物が用意され、どのように使用したのかといった具体的な行為については論じられていない。そこで、本研究では、私邸で行幸を迎えた事例について、『明治天皇行幸年表』²⁾『明治天皇紀』³⁾から抽出した全46事例を対象に、行幸時に使用された邸宅の詳細や、その使用方法について調査することで、天皇行幸と洋館建設の関係性について明らかにすることを目的とする。

山家 和室に椅子や机を持ち込む形式は、いつ頃から確認されるようになったのですか。

池田 明治5年に初めて行われた天皇が各地を回る「巡幸」と呼ばれる行為の時点で、既に靴を履いた状態で和室を使用し、明治9年の巡幸でも椅子や机を和室に持ち込んでいます。

鈴木 明治初期の行幸で使用された洋館と、明治後期の行幸で使用された洋館ではどのような違いが見られますか。

池田 明治初期、例えば明治9年に行幸が行われた大久保邸は木造の洋館でしたが、明治23年の大山邸、明治25年の鍋島邸行幸時に使用されたのは煉瓦造の洋館でした。



図1 黒田邸 洋館・和館外観写真⁴⁾

2. 洋館で行幸を迎えた事例からみる行幸と邸宅の関係

明治時代に行われた46例の行幸事例(表1)のうち、天皇を洋館で迎えた事が明らかになった事例は16例確認できた。明治20年までは行幸を洋館で迎えた事例は点々としかみられないが、20年以降はほとんどの事例で洋館で迎えていたことが明らかになった。また16例中9例は洋館竣工後間もなく行幸を迎えていることから、洋館建設は行幸時に使用することを目的として行われていたことが考えられた。

洋館で迎えた事例でも大山(M23)・前田(M43)についてはそれぞれ「明治二十二年の冬、大山家は永田町の陸軍大臣官邸から青山の穂田に完成した新居に移った。この屋敷は、明治天皇の行幸を予定して建てられた」⁵⁾、「邸を新築し園圃を修め、あらためて行幸啓を仰ぐことこそ皇恩の万分の一に酬い奉ることと深く心に決するに至った」⁶⁾との記述から、行幸のために洋館建設したことが伺え、鍋島(M25)の「めずらしい三階建ての新築祝いのための、特別の行幸であった。」⁷⁾との記述からは、行幸を行う天皇側も洋館で行うことを意識していたことが伺える。

表1 明治時代の行幸46事例とその調査結果

事例番号	行幸の場所	行幸の日	行幸の場所	行幸の場所	行幸の場所
1					
2					
3					
4					
5					
6					
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
16					
17					
18					
19					
20					
21					
22					
23					
24					
25					
26					
27					
28					
29					
30					
31					
32					
33					
34					
35					
36					
37					
38					
39					
40					
41					
42					
43					
44					
45					
46					

※毛利邸洋館は行幸後に竣工とされており⁸⁾、当日に洋館が使用出来たかは不明。山縣邸は竣工年が14年と18年の2つの論⁹⁾があり詳細は現状不明。

3. 和館で行幸を迎えた事例からみる行幸と邸宅の関係

洋館ではなく和館で行幸を迎えた事例についても、邸宅の使用法に特徴が見られた。池田輝知(M8)・徳川慶勝(M8)の事例では床の間のある和室に2畳の台を置き、敷物を敷いた上に椅子を置くことで天皇が使用する玉座としていたことが確認でき、また天皇が滞在する部屋には机や椅子などが持ち込まれており、和室ながらも西洋の椅子座式が使用されていたことが明らかになった。

松方邸(M20)の行幸事例では、使用された邸宅は旧館と新館で両方も和館ではあるが、新館は松方が行幸の内命を受けてから建設を開始

したものである。このことから、和館で行幸を迎えた事例においても、邸宅を新築して迎える事例が存在したことが明らかになった。

この松方邸でも先に例として挙げた池田・徳川邸の時と同じく和室に玉座を設置していたが、さらに新館と旧館の間を繋ぐ渡り廊下や、車寄せの部分にも敷物を敷いていることから、天皇が使用する空間を全て西洋の起居様式に対応させた上で迎えていたことが明らかになった。



図2 池田輝知邸平面図¹⁰⁾

図3 松方正義邸 新館外観写真¹¹⁾

4. 結びに代えて

明治時代に行われた私邸に対する行幸46例について調査を行った結果、以下のことが明らかになった。

- ①46例中16例は洋館で行幸を迎えていたことが明らかになり、その内9例については洋館竣工後間もない頃に迎えており、特に大山(M23)・前田(M43)の事例については、行幸のために洋館建設を行なったという記述が確認できた。また、鍋島(M25)の事例では珍しい3階建て洋館の竣工祝いとして特別に行幸が行われており、これらのことから行幸を迎える側も行う側も洋館で行うことを意識していたと考えられる。
- ②池田輝知・徳川慶勝(M8)の事例では、洋館ではなく和館で行幸を迎えていたが、その使用方法に注目すると、和室に椅子や机を持ち込み、敷物を敷いた2畳台の上に椅子を置くことで玉座としており、和室でありながら西洋の椅子座式に対応させた上で天皇の行幸を迎えていた。
- ③松方(M20)の事例でも、池田・徳川と同じく和館で行幸を迎えていたが、その和館は行幸のために新たに建設した新館であった。行幸当日は廊下や車寄せなど、天皇が使用する空間には敷物を敷いており、1つの室だけでなく、和館全体を椅子座式に対応させた上で行幸を迎えていた。

このように、行幸に合わせて洋館建設が行われた事例や、洋館を建設していなくても、和館は新築し、その使用方法を西洋の起居様式に対応させている事例が確認されたことから、行幸の際には洋館もしくは洋館と同じように使用できる和館を用意した上で天皇を迎える、という通例が存在していたことが考えられた。

5. 注釈

1) 内田青蔵「日本の近代住宅」鹿島出版会、1992年 2) 明治天皇聖蹟保存会編『明治天皇行幸年表』大行堂、1933年 3) 宮内庁編『明治天皇紀』吉川弘文館、1969年 4) 造家学会『建築雑誌150号』、1899年 5) 久野明子『鹿鳴館の貴婦人大山捨松 日本初的女子留学生』中公文庫、pp.233-236、1993年 6) 前田利為伝編纂委員会『前田利為』pp.92-111、1986年 7) 小田部雄次『榎本宮伊那子妃の日記—皇族妃の見た明治・大正・昭和』小学館文庫、pp.24-29、2008年 8) 山本昌宏・北野隆「毛利邸における和館と洋館の配置 明治初期における和洋館並列型住宅に関する研究」日本建築学会大会学術講演梗概集、2005年 9) 明治14年・国立国会図書館デジタルコレクション、伊東忠太「日本建築の研究」上、竜吟社、1942年 明治18年・『明治工業史建築編』p174、1927年 10) 鳥取県立博物館「贈従一位池田慶徳公御伝記五巻」p687、1990年 11) 国立国会図書館デジタルコレクション、徳富新二郎「公卿松方正義伝記発行所」p1158、1935年

◎ 自分だけの体験を －歩いて想像する詩のようなミュージアム－	野中 美奈
生活の共存と貢献 －神奈川県平塚市横内の横内団地におけるコミュニティ施設の提案－	林 勇武
◎ 生き生きとした一駒を繕う －人間と自然のぶつかり合いの分析に基づいた建築の提案－	福與 栄多
たむろし・みせる －ピーナスラインと連携した新しい拠り所の提案－	藤本 僚太
道から広がるまち －地域活性化の礎となる複合施設の提案－	古谷 世永
○ 風景と記憶のダイアログ －岐阜県八百津町における地域資源を生かした観光地域交流施設の提案－	町山 李桜
重なる産業と人々 －漁業の観光への応用と地域活性化－	丸島 拓馬
縁側のような居場所づくり －街中に点在するサードプレイスと児童放課後問題の解消について－	南 佑夏
◎ ならいならわれ －マナビのあり方の再思を軸とした地域ネットワークの提案－	宮島 里帆
自然と共に育まれるこどもの居場所 －余白からアクティビティを生み出す子ども園の提案－	森田 京楓
石の遺構と地の痕跡 －失われた地形と尊厳のある死の再生－	猪狩 勇斗
○ 利便性だけではない建築 －新たな発見や学びに出会える駅の提案－	石井 瞭亮
○ 拡散する居場所 －沖縄県与那国島における移住促進住宅の提案－	稲川 大悟
扇の松パブリックスペース －商店街を地域交流の核に再編する提案－	白井 蓮侍
混ざり生まれる －スロープに広がる新たな空間－	大塚 吏矩
家族と地域 －住む人によって変化する住宅の提案－	上條 響
○ 循環のなかの建築	木下 昌紀
○ 210mの余白 －中央分離帯の活用と集散的都市体験－	桐ヶ谷 淳
シャッターが開いた未来 －シャッター通りとなった岸が谷銀座商店街の再生－	刑部 陽香
働く場の新しい選択肢となり、暮らしのチャンネルを広げる集合住宅の提案	鈴木 舞海
公園からスタンドに続く緑地 －根岸森林公園と一等馬見所が連動する空間の提案－	薛 邦和
多世代の交流の場 －大口商店街における集合住宅と宿泊施設の提案－	永田 恵弥
生み出される空間 －動物を介した集合住宅の提案－	並木 友香
風土との呼応 －富山県砺波平野散居村地域における実家の改築法の提案－	西村 和将
居場所 －廃校舎活用による地域交流施設の提案－	羽鳥 楓師

日常を支える第二の鎌倉 －谷戸を通じて繋がる新たな生活環境の提案－	藤木 優太
人と自然が織りなす公園 －自然資源と共に作り出す立体公園の提案－	堀内 葉菜
◎ 地形に根付く建築 －谷戸地区におけるセルフビルド型複合施設の提案－	三富 莉穂
水辺の散策湯路 －健康寿命を延すための短期滞在型健康促進施設の提案－	宮島 佳乃子
★ 興復のとりで －観音崎公園における歴史的財産と暮らしの融合－	毛利 菜穂
寄り添う境界線 －人と環境を繋ぐ堤防建築の提案－	山内 悠斗
小さな鎮守 －鎮守の森を創出する地域コミュニティ施設の提案－	山下 晃平
まちへ広がる大きな公園 －駅前における新たな複合施設の提案－	牧野 和也

卒業設計【設計B】

Cultural Experience Center through Renovating Historical Shophouses in Georgetown, Penang ○－マレーシア、ペナン島のジョージタウンにおけるショップハウスのリノベーション手法－ オイン シャンゲン	
三島市中心市街地における河川空間構成 －河川を活かしたコミュニティ施設の提案－	久保田 唯
○ 明治神宮外苑計画 2026 －成立過程と変容過程からみた明治神宮外苑の特性－	穂屋下 直輝
藤沢市鶴沼松が岡における別荘地の変遷 －鶴沼の特性を活かした住宅のプロトタイプの提案－	安藤 文留
沖縄の戦後復興建築を生かした新しい商店街の提案 －那覇市水上店舗に関する調査を踏まえて－	稲福 菜々子

★ディプロマ賞 ○優秀賞 ○卒業設計優秀作品発表会発表者

学部設計課題 優秀作品

建築デザインⅢ

建築デザインⅡ

建築デザインⅠ

設計製図Ⅱ

設計製図Ⅰ

非常勤講師



鈴木 信弘
Nobuhiro SUZUKI

鈴木アトリエ一級建築士事務所



川辺 直哉
Naoya KAWABE

川辺直哉建築設計事務所



岡村 晶義
Akiyoshi OKAMURA

一級建築士事務所アトリエ鯨



井原 佳代
Kayo IHARA

ihrmk一級建築士事務所



木島 千嘉
Chika KIJIMA

木島千嘉建築設計事務所



佐々木 龍郎
Tatsuro SASAKI

佐々木設計事務所



森山 ちはる
Chiharu MORIYAMA

サイドバイサイド一級建築士事務所



鈴木 丈晴
Takeharu SUZUKI

鈴木丈晴アトリエ
一級建築士事務所



渡瀬 正記
Masanori WATASE

一級建築士事務所設計室

担当

曾我部 昌史（教授）、吉岡 寛之（特別助教）、岡村 晶義（非常勤講師、アトリエ鯨）、
佐々木 龍郎（非常勤講師、佐々木設計事務所）、渡瀬 正記（非常勤講師、設計室）

Masashi SOGABE (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Akiyoshi OKAMURA (Guest Lecturer, Atelier KIJIRA),
Tatsuro SASAKI (Guest Lecturer, SASAKI ARCHITECTS & ASSOCIATES), Masanori WATASE (Guest Lecturer, an office)

林 淳平 (M1, TA)、谷本 優斗 (M1, TA)、猪狩 勇斗 (B4, SA)、石井 瞭亮 (B4, SA)、小野 翔伍 (B4, SA)
Junpei HAYASHI (M1, Teaching Assistant), Yuto TANIMOTO (M1, Teaching Assistant)
Hayato IKARI (B4, Student Assistant), Ryosuke ISHII (B4, Student Assistant), Shogo ONO (B4, Student Assistant)

第一課題 30人が暮らし30人が泊まれる、この先の暮らしの場

共に暮らすことで自分の好みにあった豊かな時間が生み出される、そういう住空間を提案すること。

この建物は、住まいの場所とこの場所での暮らしを特徴付けるサービスの場所とで構成され、住まいの場所は、賃貸住宅部分と宿泊施設部分に分けられる。共通のライフスタイルや必要とするサービスにより特徴付けられる 30 人の住まいがあり、その暮らしに関連した共用スペースやサービス系施設が特有の雰囲気を生み出し、その雰囲気が地域の人たちや 30 人の宿泊客にアピールする。単に、賃貸住宅、宿泊施設、サービス関連施設とが固まってあるものではなく、それぞれが有機的に関係を持つことで、何らかの特徴的な雰囲気を備えた居場所が生み出されるような計画を構想しなければならない。

敷地は関内地区の中央にある。歴史的背景や現状の周辺状況についての調査をもとに、計画に反映させること。



【設計条件】

- ・敷地：神奈川県横浜市中区太田町5丁目
- ・用途地域：商業地域
- ・敷地面積：約1,034.3㎡
- ・延床面積：3,500㎡～4,500㎡（地下を設ける場合は1層まで）
- ・道路斜線制限、高さ制限は厳守

※ 参考敷地（敷地は関内エリアから自由に選定する）

第二課題 街のインフォメーションセンター

地域に暮らす人たちの居場所(地域の居場所)と、観光などで訪れる人たちの拠点的な場(来訪者の拠点)の複合体である。「地域の居場所」では、地域調査をもとに課題や需要を抽出した上で、どのような場をつくるかを各人が構想すること。この先の公民館のあるべき姿を考えることにもなるだろう。「来訪者の拠点」はいわば観光案内所だが、事例調査などをもとに今日的な役割を踏まえながら用途をまとめる必要がある。「地域の居場所」と「来訪者の拠点」が単に併設されているのではなく、相互補完的に計画することで、より多様で豊かな活動の受け皿となるよう検討し提案にまとめること。

敷地は、地下鉄駅、船着場、幹線道路に面する交通の結節点にある。それらとの関係を動線として解きながら、建物内のいろいろな場とのつながりかたを検討する。利用者、時間帯などにも意識をしながらまとめる必要がある。



【設計条件】

- ・敷地：東京都江東区清澄3丁目
- ・用途地域：準工業地域、商業地域
- ・敷地面積：約2,500㎡
- ・延床面積：4,000㎡～6,000㎡（地上部分は3層以上とする）
- ・地下階を設け、地下鉄駅とつなぐこと

非常勤講師 経歴

岡村 晶義
Akiyoshi OKAMURA

1954年生まれ、早稲田大学産業技術専修学校（現早稲田大学芸術学校）卒業、teamzooアトリエモビル及び象設計集団を経て独立、アトリエ鯨を設立、東京理科大学非常勤講師及び法政大学兼任講師を経て現在に至る。日本建築学会作品選奨、土木学会デザイン賞など受賞

佐々木 龍郎
Tatsuro SASAKI

1964年生まれ、1987年東京都立大学工学部建築学科卒業、1989年同大学院修士課程修了、工学修士、1992年同博士課程単位取得満期退学、1992年(株)デザインスタジオ建築設計室、1994年株式会社佐々木設計事務所入社、現在同代表取締役

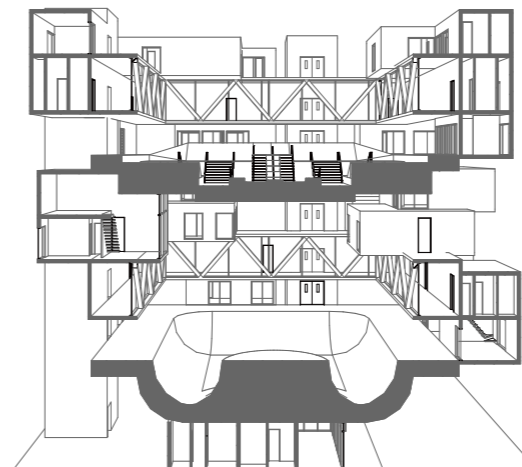
渡瀬 正記
Masanori WATASE

1968年生まれ、1992年東京工業大学工学部建築学科卒業、1992年妹島和世建築設計事務所勤務、1993年～1997年青木淳建築計画事務所勤務、1998年一級建築士事務所設計室設立

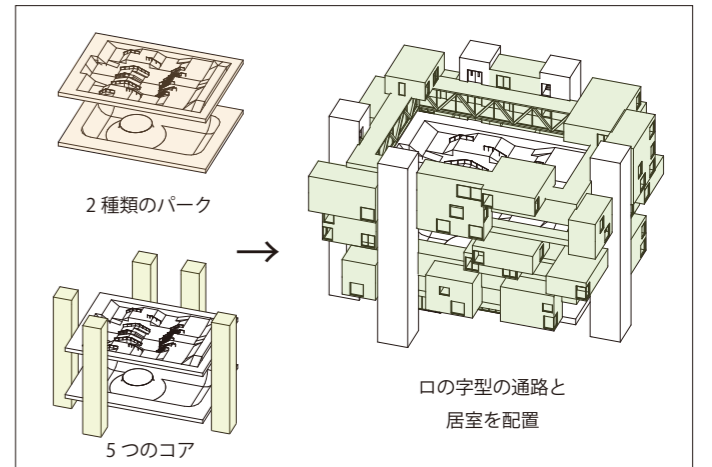
森永 友馬
Yuuma MORINAGA



断面パース



ダイアグラム



共有画面にコメントをつけるなどをしたエスキスの様子

Complex
Complex



2階パークからの見上げ



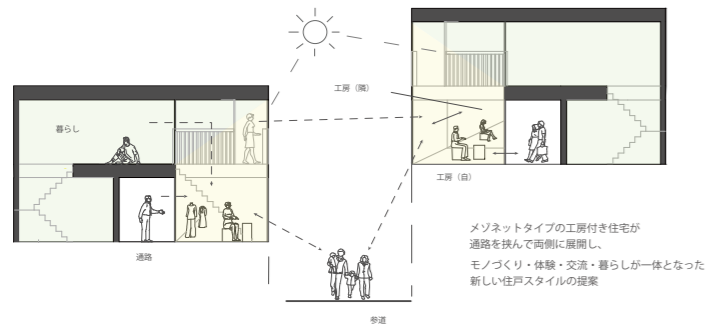
7階通路からの見下げ

相澤 萌
Moe AIZAWA

架け橋 ~様々なものが混在する元町をモノで橋渡し~
Mediation



工房や生活の様子、作品を覗きながら参道を抜けると西日が差し込む厳島神社の鳥居が現れる



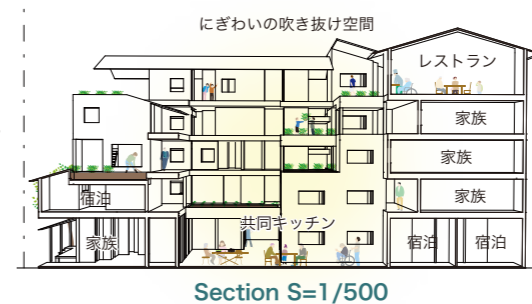
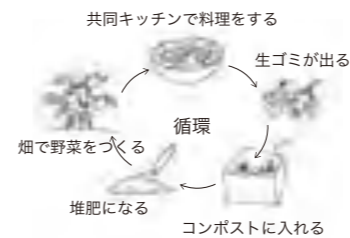
久世 文
Aya KUSE

寿町の循環集落 ~高齢者の生活と生存に関わる公共空間として~
Kotobukicho Circular Village



寿町は、1950年代半ばから日雇い労働者の「寄せ場」として形成されたまち。現在は簡易宿泊所がひしめき、宿泊者の大半は生活保護を自給している単身の高齢男性である。福祉のニーズが高まる中、若い世代を呼び込み共存共栄する暮らしの場を想像する。簡易宿泊所で終末期を過ごす人を見守ることができる地域になるように。

CIRCULATIVE WELL-BEING

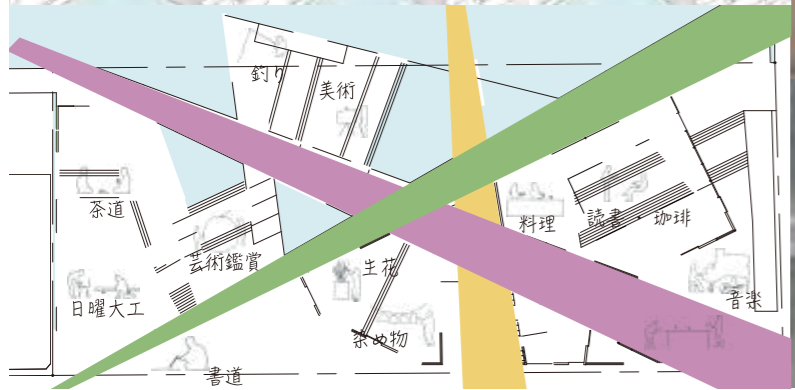


梅澤 達紀/濱 大智/荘司 大輔
Tatsuki UMEZAWA/Daichi HAMA/Daisuke SHOJI

アソビバ キヨスミ
ASOBIBA KIYOSUMI

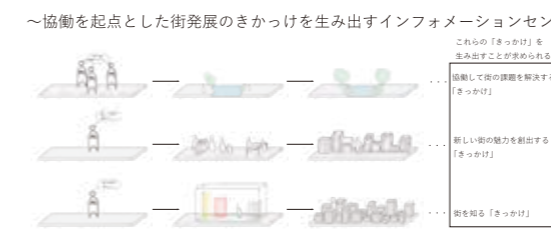


～生活と街の受け皿～
近年、単身高齢者が増えつつある我が国に置いて高齢者の心の拠り所が必要だと考える。高齢者が生活を楽みつつ、長年の知恵や文化を街のインフォメーションセンターとして発信する場を提案する。



小西 希歩/三井田 昂太/矢高 隆人
Kihiko KONISHI/Kouta MIIDA/Ryuto YATAKA

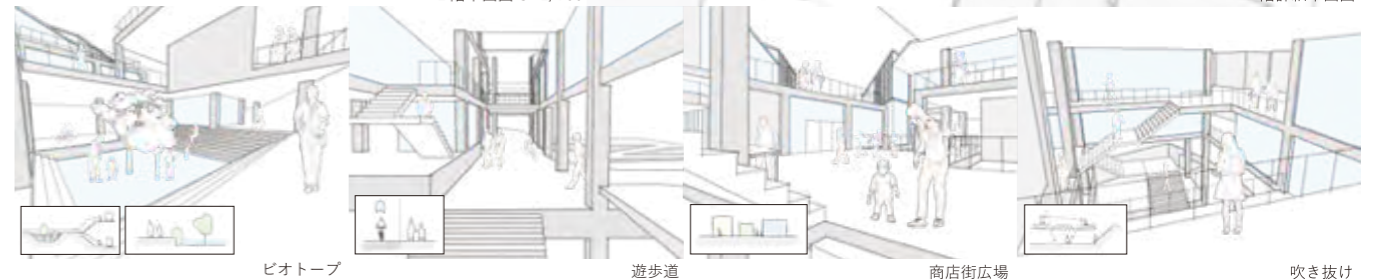
きっかけ
CHANCE



1階平面図 S=1/700



2階詳細平面図



長手断面バース S=1/500

担当

六角 美瑠 (教授)、曾我部 昌史 (教授)、鈴木 成也 (助手)、
木島 千嘉 (非常勤講師、木島千嘉建築設計事務所)、鈴木 丈晴 (非常勤講師、鈴木丈晴アトリエ一級建築士事務所)

Miru ROKKAKU (Professor), Masashi SOGABE (Professor), Naruya SUZUKI (Assistant),
Chika KIJIMA (Guest Lecturer, Kijima architect and associates), Takeharu SUZUKI (Guest Lecturer, Takeharu Suzuki atelier of registered architects)

石谷 慶 (M1, TA)、鈴木 碧衣 (M1, TA)、稲川 大悟 (B4, SA)、野中 美奈 (B4, SA)、宮島 里帆 (B4, SA)
Kei ISHITANI (M1, Teaching Assistant), Aoi SUZUKI (M1, Teaching Assistant), Daigo INAGAWA (B4, Student Assistant),
Mina NONAKA (B4, Student Assistant), Riho MIYAJIMA (B4, Student Assistant)

第一課題 六角橋ミニシアターコンプレックスと広場

白楽駅前に駅前広場と一体となった積層型のシネマコンプレックスを計画せよ。敷地はかつて白鳥座という映画館があり、近隣地区市民の文化娯楽の一翼を担っていた場所である。近年、映画を取り巻く環境はシネマコンプレックスの隆盛により映画離れに歯止めがかかったように見えるが、一方で渋谷のシネマライズ閉館に代表されるようにミニシアターは徐々にその姿を消しつつあり、映画を鑑賞する環境や映画鑑賞前後の空間体験は均質化しつつある。本課題では気持ちの高まりや余韻を受け止める空間を計画すること。

また、この施設は六角橋商店街の有志による NPO 法人が管理運営を行うものとする。地域の映画コミュニティの交流イベントや、映画制作ワークショップを行う等、映画を上映するだけではない地域の核となる建築をデザインして欲しい。駅前の場所性や商店街との補完関係を考慮し、計画する建築が地域にとってどのような役割を果たすことができるのかを広場を含めて積極的に提案すること。また周辺環境 (計画地北側には集合住宅がある) にも十分に配慮すること。

【設計条件】

敷地: 神奈川県横浜市神奈川区白楽124
面積: 約855㎡



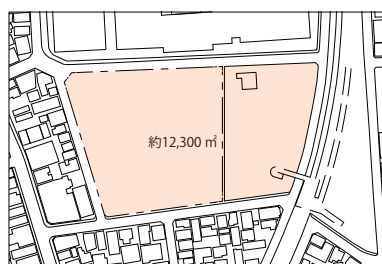
第二課題 地域に開かれた小学校 -学校×公園+α-

現在の二谷小学校と公園を合わせ計画地とし、+αの施設を持ち地域に開く小学校を設計する。

この学校は、地域にとって重要なイベントの場になり、災害時には防災拠点として機能し、地域にとって重要な核となる。地域施設を複合することにより、単独の学校として計画するよりも施設機能が多機能化し、学習環境や地域活動にとって効果的な活用が期待される。地域コミュニティや活動を生むプログラムを計画し、学校の地域社会への役割を考えながら、新しい学校のあり方、デザインを積極的に提案してもらいたい。

【設計条件】

敷地: 神奈川県横浜市神奈川区平川町11-1
面積: 約12,300㎡



非常勤講師 経歴

木島 千嘉
Chika KIJIMA

1966年生まれ、1989年早稲田大学理工学部建築学科卒業、1991年東京工業大学大学院修士課程修了、1991年(株)日建建設入社、1999年O.F.D.A associates所属、2001年木島千嘉建築設計事務所設立

鈴木 丈晴
Takeharu SUZUKI

1976年生まれ、1998年東京大学工学部建築科卒業、2000年同大学大学院修了、2000年安藤忠雄建築研究所、2010年京都造形芸術大学非常勤講師、2011年芝浦工業大学非常勤講師、2012年鈴木丈晴アトリエ一級建築士事務所設立、2013年国士舘大学非常勤講師

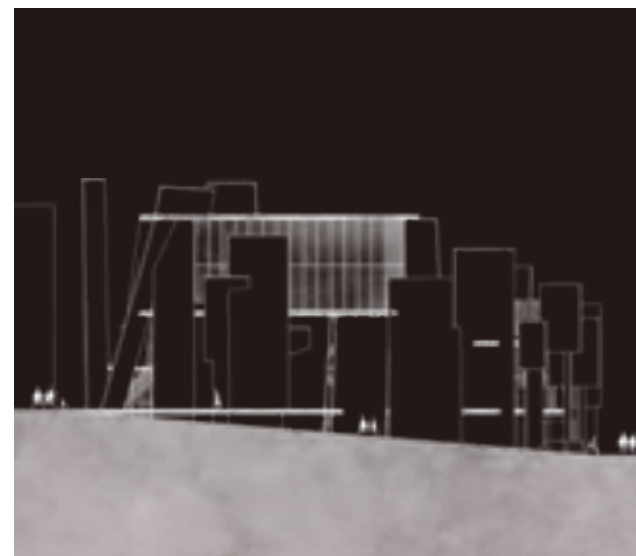
山元 幸花
Sachika YAMAMOTO

居場所がつながる
A place to connect



三井田 昂太
Kouta MIIDA

Un
Un



伊東 歩武
Ayumu ITO

寄り道
Detours and communities



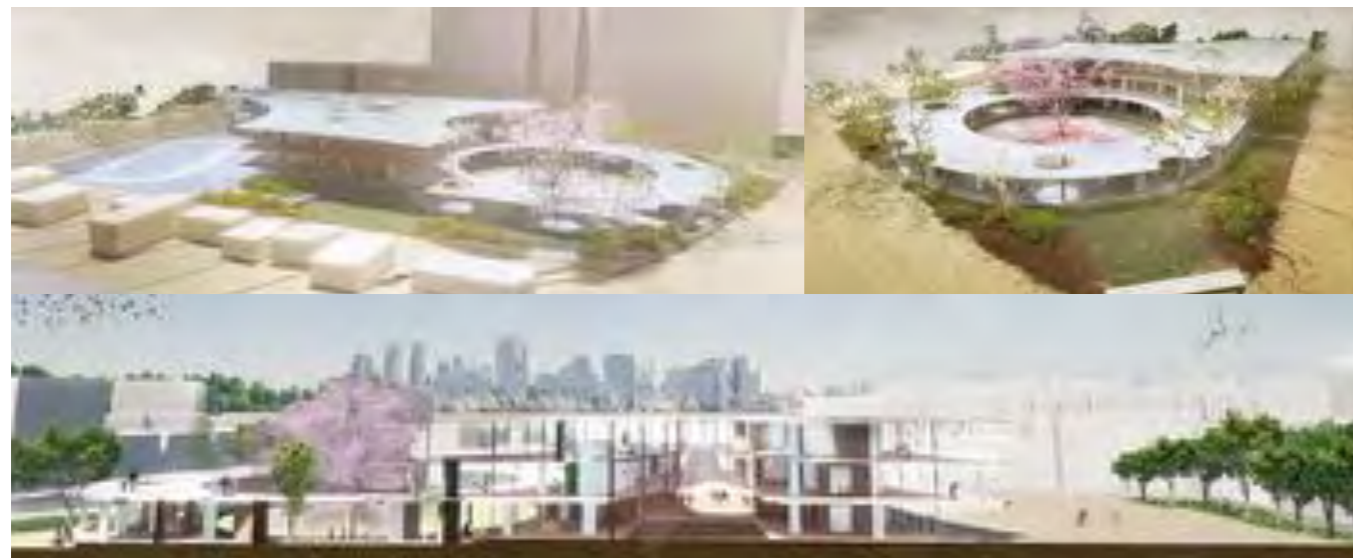
森田 泰正
Taisei MORITA

QUARTET
Quartet



地域に開かれた小学校 -学校×公園+α-

梅澤 達紀
Tatsuki UMEZAWA



ニツの縁
Hutatsunoenishi

地域に開かれた小学校 -学校×公園+α-

久世 文
Aya KUSE



散歩道の小学校
School with a promenade

小野 美咲
Misaki ONO



U字の小学校
U-shaped elementary school

小菅 大雅
Taiga KOSUGE



地域とつくる学び
Create learning with the community

担当

山家 京子 (教授)、六角 美瑠 (教授)、吉岡 寛之 (助教)、鈴木 成也 (助手)、森山 ちはる (非常勤講師、サイドバイサイド一級建築士事務所)、川辺 直哉 (非常勤講師、川辺直哉建築設計事務所)
Kyoko YAMAGA (Professor), Miru ROKKAKU(Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Naruya SUZUKI(Assistant), Chiharu MORIYAMA(Guest Lecturer, side by side Architects), Naoya KAWABE(Guest Lecturer, NAOYA KAWABE ARCHITECTS)

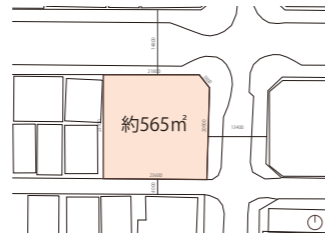
三浦 悠介 (M2、TA)、林 真太郎 (M1、TA)、菅野 麻衣子 (M1、TA)、日下 紗菜 (M1、TA)、鎌田 芽萌 (B4、SA)、西村 和将 (B4、SA)
Yusuke MIURA(M2, Teaching Assistant), Shintaro HAYASHI(M1, Teaching Assistant), Maiko SUGANO(M1, Teaching Assistant), Sana KUSAKA(M1, Teaching Assistant), Kayame KAMATA(B4, Student Assistant), Kazumasa NISHIMURA(B4, Student Assistant)

第一課題 関内に建つオフィス

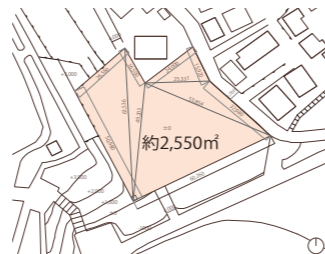
横浜市内関内地区にオフィスを計画せよ。

近年、まちに開く建築が話題となっています。住宅の一部を交流の場やまちかど図書室とする「住み開き」、集合住宅の共用施設を居住者だけでなく地域にも開放する、小学校に地域施設を併設する、など。これらはこれまでコミュニティ施設が担ってきた機能を、それ以外の施設が地域と部分的にシェアすることで、自らの機能をより充実させるものです。コミュニティ活性化を図るとともに、それぞれの生活の豊かさにもつながる方向性と言えます。

一方、オフィスはセキュリティの観点から、入り口にゲートを設けるなど、どちらかという閉じていく傾向にあります。しかし、オフィスもまた開くことによって、イノベーションを起こすことが期待されています。ここでは、空間的にもプログラムのにも、社会、地域に対して開かれたオフィスの提案を求めます。



- 【設計条件】
- ・敷地：神奈川県横浜市中区 住吉町3丁目
 - ・敷地面積：約565㎡
 - ・建ぺい率：80%
 - ・容積率：700%



- 【設計条件】
- ・敷地：神奈川県横浜市港北区 岸根町725
 - ・敷地面積：約2,550㎡
 - ・建ぺい率：60%
 - ・容積率：100%

非常勤講師 経歴

森山 ちはる Chiharu MORIYAMA

東京都生まれ、2003年日本女子大学家政学部住居学科卒業、2005年東京工業大学大学院理工学研究科建築工学科修了(坂本研究室)、2005年-2011年、伊東豊雄建築設計事務所、2012年-、日本大学生産工学部建築学科デザインコース非常勤講師、2014年、アトリエHMC設立、2018年-、森山ちはる建築設計事務所設立

川辺 直哉 Naoya KAWABE

1970年神奈川県生まれ、1994年、東京理科大学工学部建築学科卒業、1996年、東京芸術大学大学院修士課程修了、1997 -2001年、石田敏明建築設計事務所、2002年、川辺直哉建築設計事務所設立、現在、東京理科大学、法政大学、芝浦工業大学、東京電機大学にて非常勤講師

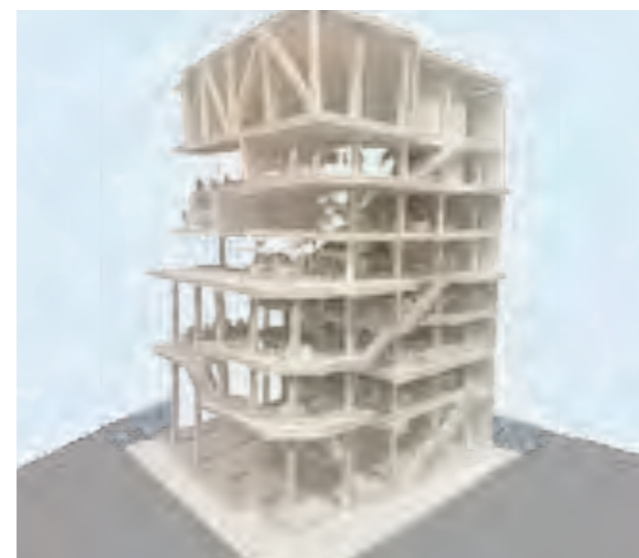
春川 桃子 Momoko HARUKAWA

Your Choice
Your choice



棚橋 美槻 Mitsuki TANAHASHI

吹き抜けと回廊
Atrium and gallery



亀田 真瑛人 Masato KAMEDA

結び
Connections



仁昌寺 天心 Tenshin NISHOUJI

スキップオフィス
Skip office



公園の一角に建つ地域の図書館

公園の一角に建つ地域の図書館

村松 希瑞奈
Kizuna MURAMATSU

つながり
Connection



堀田 和廷
Kazutaka HORTA

自然あふれる図書館
Library full of nature

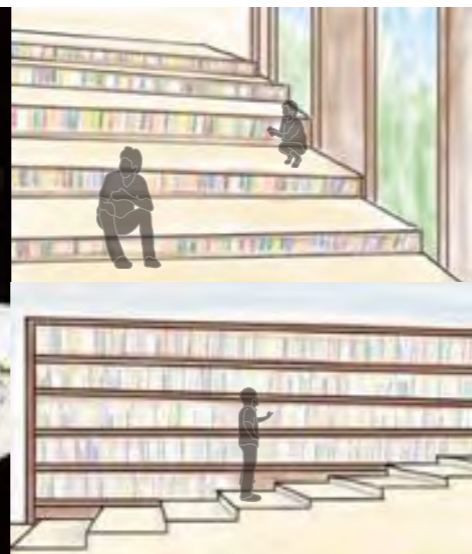


金子 遥
Haruka KANEKO

本好きのための図書館
Library for book lovers

小林 藍
Ai KOBAYASHI

本の街
Book street



担当

中井 邦夫 (教授)、井原 佳代 (非常勤講師、ihrmk一級建築士事務所)、鈴木 信弘 (非常勤講師、鈴木アトリエ)、上野 正也 (助教)、須崎 文代 (助教)、吉岡 寛之 (助教)

Kunio NAKAI (Professor), Kayo IHARA (Guest Lecturer, ihrmk Architects), Nobuhiro SUZUKI (Guest Lecturer, Suzuki Atelier), Masaya UENO (Assistant Professor), Fumiyo SUZAKI (Assistant Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor),

籾内 俊希 (M2, TA)、伊藤 伸一郎 (M1, TA)、小澤 美月 (M1, TA)、中澤 実那 (M1, TA)、オインシヤンゲン (B4, SA)、久保田 唯 (B4, SA)
Toshiki SUNOUCHI (M2, Teaching Assistant), Shinichiro ITO (M1, Teaching Assistant), Mizuki OZAWA (M1, Teaching Assistant), Mina NAKAZAWA (M1, Teaching Assistant), Xian Gen OOI (B4, Student Assistant), Yui KUBOTA (B4, Student Assistant)

授業内容

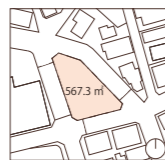
- 1) トレース課題 1 (1/100) 「住吉の長屋」 (設計: 安藤 忠雄)
 - 2) 模型課題 1 (1/100) 「住吉の長屋」
 - 3) ゲスト・レクチャー 池田偉佐雄 (横総合計画事務所)
 - 4) トレース課題 2 (1/100) 「代官山ヒルサイドテラスA・B棟」 (設計: 横文彦)
 - 5) 設計課題 1 (下記参照)
 - 6) 模型課題 2 (1/100) 「代官山ヒルサイドテラスA棟」
 - 7) 設計課題 2 (下記参照)
- ※その他、見字レポート(3回)、読解批評文(ル・コルビュゼ「建築をめざして」)

設計課題 1 地域とつながる集合住宅

住宅地内の敷地に、様々な世代の居住者が、ともに住む集合住宅を設計する。敷地は、四周が道路に面する三角形の区画であり、公園のそばに立地し、商店街にも近い。地域との関連性を意識して、敷地周辺の条件を最大限に活かしながら、この場所に住む様々なタイプの世帯それぞれの生活像を具体的にイメージすると同時に、そうした個性の異なる複数の居住者が住む集合住宅ならではの楽しい提案・空間を求める。

【設計条件】

敷地: 神奈川県西神奈川3-9-16
地域: 市街化区域、第一種住居地域、防火地域: 準防火地域、構造形式: 鉄筋コンクリート・壁式構造
敷地面積: 567.3㎡、建ぺい率: 70%、容積率: 200%

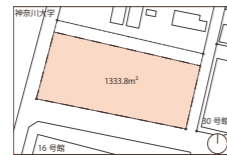


設計課題 2 神大ミュージアム

神奈川大学18号館および21号館の敷地に、神奈川大学が所蔵する収蔵品(文献史料、記録史料など)を企画、常設展示する展示室やインフォメーション・センターを含むミュージアムを設計する。敷地は、大学と住宅地との境界部に位置する緩やかな傾斜をもった角地であり、大学キャンパス・マスタープランにおいて、16号館と共に大学の「ゲート・ゾーン」と位置づけられており、大学の対外的な顔となる空間となることが期待されている。多様な活動を含み込む可能性を最大限引き出す提案を求める。

【設計条件】

敷地: 神奈川県六角橋3丁目
地域: 第二種中高層住居専用地域、防火地域: 準防火地域、構造形式: 鉄筋コンクリート・ラーメン構造
敷地面積: 1333.8㎡、建ぺい率: 70% (法定は60%)、容積率: 150%



地域とつながる集合住宅

阿部 凌大

Ryota ABE

よりどころ

Foundation



村井 和樹

Kazuki MURAI

発信集合住宅

Dispatch Housing Complex



廣江 光成

Mitsunari HIROE

互助

Mutual Aid



仁昌寺 天心

Tenshin NISHOJI

花道

Flower Arrangement



春川 桃子

Momoko HARUKAWA

巡迴会

Junkaie



前川 愛結

Ayumi MAEKAWA

木洩れ日の差す神大ミュージアム

Sunlight Filtering Jindai Museum



阿部 凌大

Ryota ABE

繋ぎ導く

Draw by Design Connection



東野 葉月

Hazuki TONO

正方形の可能性

The Possibility of a Square



大石 純麗

Sumire OISHI

LEVELで繋ぐ

Connect by Level



担当

中井 邦夫 (教授)、井原 佳代 (非常勤講師、ihrmk一級建築士事務所)、鈴木 信弘 (非常勤講師、鈴木アトリエ)、上野 正也 (助教)、須崎 文代 (助教)、鈴木 成也 (助手)

Kunio NAKAI (Professor), Kayo IHARA (Guest Lecturer, ihrmk Architects), Nobuhiro SUZUKI (Guest Lecturer, Suzuki Atelier), Masaya UENO (Assistant professor), Fumiyo SUZAKI (Assistant professor), Naruya SUZUKI (Assistant)

簾内俊希 (M2, TA)、伊藤伸一郎 (M1, TA)、小澤美月 (M1, TA)、中澤実那 (M1, TA)、稲福菜々子 (B4, SA)、久保田唯 (B4, SA)
Toshiki SUNOUCHI (M2, Teaching Assistant), Shinichiro ITO (M1, Teaching Assistant), Mizuki OZAWA (M1, Teaching Assistant), Mina NAKAZAWA (M1, Teaching Assistant), Nanako INAFUKU (B4, Student Assistant), Yui KUBOTA (B4, Student Assistant)

授業内容

- | | |
|------------------------------|--------------------------------|
| 1) 「線の描き方」 | 6) トレース課題 3 |
| 2) トレース課題 1 | 「ヒアシンスハウス」(設計:立原道造) 意匠図 (1/30) |
| 「私の家」(設計:清家清) 意匠図 (1/50) | 7) トレース課題 4 |
| 3) トレース課題 2 | 「白の家」(設計:篠原 一男) 意匠図 (1/50) |
| 「水道道の家」(設計:鈴木 信弘) 意匠図 (1/50) | 8) トレース課題 5 |
| 4) 模型課題 1 「水道道の家」(設計:鈴木 信弘) | 「ひな壇基礎の家」(設計:ihrmk) (1/50) |
| | 軸組模型 (1/50) |
| 5) 設計課題 1 (下記参照) | 9) 設計課題 2 (下記参照) |
| | 10) 模型課題 2 |
| | 「屋久島の家」(設計:堀部 安嗣) 軸組模型 (1/50) |
- ※その他、見学レポート (3回)、読書批評文 (藤原一男「住宅論」)

設計課題1 クラインガルテン

横浜市神奈川区神大寺の農業専用地域内の一画を借りて、小さな「小屋」を建てることになりました。隣接する畑・菜園にて収穫した野菜を使って調理をし、食事を楽しむ場所であり、季節を感じながら過ごす、あなたにとって理想の小屋を設計してください。

【設計条件】

- ・道路沿いに広がる農地の一画、8m×8m を計画地とする。
- ・農地には緩やかな傾斜があるが、計画地は道路を基準として平坦であるとみなす。
- ・農機具・農作業に使う用具・道具は近くの「横浜市特定農園の倉庫」を利用する。
- ・車を停めるスペース (3×5m) を計画地内に設定すること。
- ・小屋の床面積は 18 m² 程度を目安とし、基本的に木造とする。



設計課題2 光・風・自然を感じるセカンドハウス

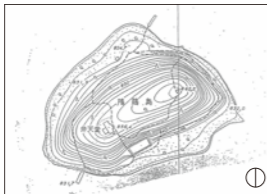
河口湖に浮かぶ「鵜の島」に、セカンドハウスを設計してください。既存の考え方やスタイルにとらわれない、この島の環境を活かした、日常生活から離れたセカンドハウスならではの、自由な発想の空間による新鮮なライフスタイルの提案を期待します。

【設計条件】

- ・原則として木造とし、柱・梁の配置など、架構を具体的に表現すること。
- ・延床面積は、65 m²前後とし、外部空間は自由に設定してください。
- ・配置は島全体から好きな場所を選んでください。

【敷地情報】

計画敷地は、河口湖に浮かぶ、木々に覆われた高低差が激しい無人島「鵜の島」。面積：0.028km²、標高：859m



四海 菜々

Nana SHIKAI

景色を楽しむ空間

Scenery Enjoyment Space



山本 朔也

Sakuya YAMAMOTO

クラインガルテンハウス

Kleingarten House



小林 遥斗

Haruto KOBAYASHI

Into the woods

Into the Woods



鈴木 あおい

Aoi SUZUKI

紫幹翠葉

Tree House



太田 有哉

Yuya OTA

鵜の島の雁行する家

Leading Out Unojima House



入倉 璃音

Rio IRIKURA

床間住宅

Tokonoma House



建築デザインⅢ

二つの複合建築の課題である。いずれも、プログラムを組み立てるところから手掛け、複雑な構成の検討をし、構造や動線を立体的に解く必要がある。第二課題は、昨年はオンラインでの運用の難しさから断念していたが、今年はグループ形式での課題に戻した。

第一課題では、各人が関内周辺で敷地を選定し、この先の暮らし方の多様化に対して意識し、新たな建築空間の構想へとつなげる必要がある。相澤さんは、通りから神社に至る路地空間を敷地内につくり、その路地を挟んだ建築空間同士の関係から特徴的な暮らしの場を生んだ。久世さんは、立体的に点在する農園を土間のような動線で繋ぎ、生態系としての循環の中にある暮らしを提案した。第二課題では、地下鉄駅出入口、遊歩道のある水路等との関わり、展示、待合所など多様な場の関係のつけ方が鍵となる。D班は、周辺との関わりから動線空間にもなる三つの軸を重ねることで敷地を複数に分節し、軸中の動線がそれらを繋いだ。自然との関わりも軸の空間が担っている。Q班は周辺の様子に呼应しながら、立体的に斜めに抜ける複数の吹抜を設け、全体を関係づけた。川の水や周辺の活動が流れ込んでくるような空間が特徴的である。(曾我部)

建築デザインⅡ

私にとっては設計課題担当の初年度で、第一課題のシネマ課題は例年の内容を引き継ぎ、第二課題の学校課題は中学校から小学校課題へと変更をした。

シネマ課題は駅前広場計画と共にシネマホールという非日常空間に導く建築をいかに魅力的に積層構成できるかが鍵となる。山本さんは、大空間フレームの中にシネマホールが積層し立体的な迫力のある吹き抜け空間を魅力的に構成した。三井田くんは、黒い乱立する壁面の構成で非日常的な空間を作り出した。伊東くんは、立体的な動線空間を組み込み各シネマへのシークエンスを演出的に展開した。森田くんは積層建築に対して構造も積

極的に検討し全体を力強い建築へと組み上げた。

小学校課題は、公園という外部環境と+αの地域施設を各自設定し設けることで、地域コミュニティや活動を生むプログラムを計画し、学校の地域社会への役割を考えながら、新しい学校のあり方、デザインを積極的に提案してもらいたいと考えた。小菅くんは、グラウンドを中庭的に扱い、校舎が外周を囲み、教室間には坪庭のように外部環境を挟み込みながら、丁寧なプランニングを計画した。小野さんは、曲面のデザインを子供の活動スケールから建築全体にまで断面的にも平面的にもユニークに展開した。(六角)

建築デザインⅠ

本科目は、小・中規模施設の設計課題を通して、建築を成立させる計画的な基礎を学ぶとともに、自らが設定したテーマを建築化する方法の修得を目標としている。本年度は2つの課題でいずれも建築のプログラム及び空間構成において、周辺環境との関わりを意識したデザインを課している。

「第Ⅰ課題：関内に建つオフィス」は関内に8層程度の本社ビルを計画する課題で都心における積層建築の空間操作を求めている。棚橋さんと仁昌寺さんはレベル差のあるスラブをつなげ回遊性をもたせる構成、亀田さんはボリューム全体にメリハリをつけている。春川さんのスリットの入ったファサードが美しい。「第Ⅱ課題：公園に面して建つ地域図書館」では、図書館の建築計画を丁寧に解きながら、かなりのヴォリュームを占める開架図書館をどう扱うかが鍵となる。今年度は円をモチーフとした案が目立ったが、中でも村松さんは伸びやかな構成が巧みである。堀田さんはエスキス途中で配置を回転させたことで、建物と斜面に囲まれたスペースが魅力的なものとなった。小林さんの分棟案はバランスが良く、金子さんは巡る平面を一つのボリュームでまとめた構成が秀逸である。(山家)

設計製図Ⅱ

本授業は、建築学科生全員を対象とする最後の製図系必修科目であり、主にRC造中規模建築を課題としている。設計課題では、150名余りの履修生を6ユニットに分けて指導し、中間と最終で全体講評会を行っている。そのほか、現存する有名なRC造建築などの見学レポート(3回)や、著名な建築論(ル・コルビュジェの『建築をめざして』)の読書感想文などの提出も課している。本年独自の試みとしては、榎文彦設計の「代官山ヒルサイドテラス」を教材とし、本学OBで現在榎総合計画事務所勤務の建築家・池田偉佐雄氏によるレクチャー、現地見学レポート、図面トレース、そして模型制作を全員に課したことである。2年生にはやや高難易度かとも思ったが、こうした名建築について、じっくりと学ぶ貴重な機会となり、精度の高い最終提出物もいくつか見られた。今後こうした機会を設けていきたい。(中井)

設計製図Ⅰ

本授業は、建築学科生全員対象の製図系必修科目であり、主に木造小規模建築を課題としている。設計課題では、150名余りの履修生を6ユニットに分けて指導し、中間と最終で全体講評会を行っている。そのほか、現存する有名な木造の住宅建築などの見学レポート(3回)や、著名な建築論(篠原一男の『住宅論』)の読書感想文などの提出も課している。今学期の試みとしては、最初の設計課題である「クラインガルテン」について、敷地を大学近くのキャベツ畑に変え、敷地面積も小さくし、学生が設計する小屋と外構計画のバランスを改善した。また多くの学生がなかなか理解しきれない、基本的な建築製図方法について、設計課題提出後の図面についての個別レビューを念入りに行うなど、その理解を促す対策を実行した。(中井)

木の家設計グランプリ 2021

ずれから生まれる協奏ライフ [金賞]
 ~モノの有人化により生活行為が職にもなるライフスタイルと住空間~
 三浦 悠介



「木の家設計グランプリ2021」において、三浦悠介さん(当時山家・上野研究室修士2年)が金賞を受賞しました。

第5回 Woody コンテスト

“間”を住みこなす [最優秀賞]
 谷本 優斗



「第5回 woody コンテスト」において、谷本優斗さん(当時曾我部・吉岡研究室修士1年)が最優秀賞を受賞しました。

□³LE：最低限のシェルター空間国際設計コンペ "Cardboard Relief Hostel" [優秀賞]
 永高 裕太



「最低限のシェルター空間国際設計コンペ」において、永高裕太さん(当時曾我部・吉岡研究室修士1年)が優秀賞を受賞しました。

歴史的空間再編コンペティション 2021

生残る痕跡群 [9位入賞]
 -品川浦に残る増改築の形態を継承した都市に現る開拓式水辺建築-
 林 眞太郎



ハレとケを紡ぐガイドライン [16位入選]
 井口 翔太、谷本 優斗



「歴史的空間再編コンペティション2021」において、林眞太郎さん(当時山家・上野研究室修士1年)が9位入賞し、井口翔太さん(当時曾我部・吉岡研究室修士1年)と谷本優斗さん(当時曾我部・吉岡研究室修士1年)が16位入選しました。

三菱地所設計設立 20周年特別企画"+ミライプロジェクト" 移動×商店街 [エリア優秀作品賞]

~生活拠点を限定しない新しいライフスタイルを取り入れた富士本町商店街の活性化計画~
 坂本 理久、永高 裕太、木嶋 峻貴、猪狩 勇斗、伊東 珠見、西村 太一



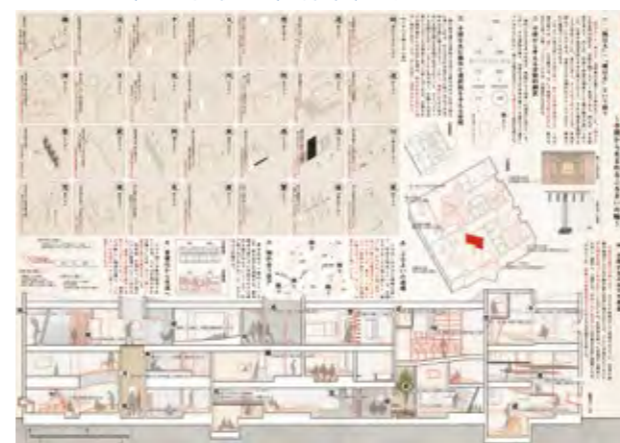
「+ミライプロジェクト」において、曾我部・吉岡研究室の坂本理久さん(当時修士2年)永高裕太さん(当時修士1年)、木嶋峻貴さん(当時修士1年)、猪狩勇斗さん(当時学部4年)と伊東珠見さん(当時学部4年)と西村太一さん(当時学部4年)がエリア優秀作品賞を受賞しました。

第28回ユニオン造形デザイン賞

時層の根 [優秀賞]
 -100年後の表参道にて。ふるまいの蓄積と残響と共振-
 永高 裕太、酒井 優人



さはり【触り・障り】の家 [佳作入選]
 -手間から生まれるふるまいの輪-
 井口 翔太、谷本 優斗、林 眞太郎



「第28回ユニオン造形デザイン賞」において、永高裕太さん(当時曾我部・吉岡研究室修士1年)、酒井優人さん(当時曾我部・吉岡研究室修士1年)が優秀賞を受賞し、井口翔太さん(当時曾我部・吉岡研究室修士1年)と谷本優斗さん(当時曾我部・吉岡研究室修士1年)と林眞太郎さん(当時山家・上野研究室修士1年)が佳作入選しました。

2022 デザインレビュー

循環のなかの建築 [2022-70選]
 木下 昌紀



「2022 デザインレビュー」において、木下昌紀さん(当時曾我部・吉岡研究室学部4年)が2022-70選に選出されました。

その他に下記の卒業設計・修士設計に関連する賞につきましては、記載ページに詳細が掲載してあります。

第20回 JIA 大学院修士設計展 2022

個性の保存 [奨励賞]
 -歌舞伎町一丁目における都市の更生方法の提案-
 三浦 垂也奈(当時曾我部・吉岡研究室修士2年) 詳細 52P

東京建築コレクション 2022

アナザーパスを有する建築 [富永美保賞]
 -神奈川県足柄下郡真鶴町を対象として-
 三浦 悠介 (当時山家・上野研究室修士2年) 詳細 38P

赤れんが卒業設計展 2022

生き生きとした一齣を繕う [津川恵理賞]
 -人間と自然のぶつかり合いの分析に基づいた建築の提案-
 福與 栄多 (当時曾我部・吉岡研究室学部4年) 詳細 64P

復興のとりで [101選]
 -観音崎公園における歴史的財産と暮らしの融合-
 毛利 菜穂 (当時曾我部・吉岡研究室学部4年) 詳細 58P

日本都市計画学会関西支部主催コンペ

天文家族のいえ [アサダワタル賞]
 - ライフワークを共通言語にしてつながる 未来の家族像とその暮らし、
 そして豊かになるマチ -
 永高 裕太、酒井 優人



「日本都市計画学会関西支部主催コンペ」において、永高裕太さん(当時曾我部・吉岡研究室修士1年)、酒井優人さん(当時曾我部・吉岡研究室修士1年)がアサダワタル賞を受賞しました。

2021 年度日本建築学会技術部門設計競技

連担するハナレ [佳作入選]

- レジリエンスを持つ新しい境界や残余地の在り方の提案 -

三浦 悠介、林 眞太郎、菅野 麻衣子、城所 真緒、丹羽 航平



「2021年度日本建築学会技術部門設計競技」において、三浦悠介さん(当時山家・上野研究室修士2年)と林眞太郎さん(当時山家・上野研究室修士1年 以下同じ)と菅野麻衣子さんと城所真緒さんと丹羽航平さんが佳作入選しました。

2021 年度日本建築学会設計競技

Carers Factory+

- 町工場から始まる就労支援と介護のその先へ - [関東支部入選]
 井口 翔太、谷本 優斗、林 淳平、林 眞太郎



「2021年度日本建築学会設計競技」において、井口翔太さん(当時曾我部・吉岡研究室修士1年)と谷本優斗さん(当時曾我部・吉岡研究室修士1年)と林淳平さん(当時曾我部・吉岡研究室修士1年)と林眞太郎さん(当時山家・上野研究室修士1年)が関東支部入選しました。

2021 年度日本建築学会大会建築デザイン発表会

気づきの小屋 [優秀発表賞]

- 神奈川県秦野市におけるハイキングコースと休憩所の提案 -
 城所 真緒



「2021年度日本建築学会大会建築デザイン発表会」において、城所真緒さん(当時山家・上野研究室修士1年)が優秀発表賞を受賞しました。

2021 日本建築学会東海支部研究大会

[学生優秀学術講演賞]

「1933年にシュトゥットガルトで開催された住宅展『コッペンホーフ・ジードルンク』について」
 竹本 真

近代ドイツ建築史を専門とするなかで、特に1920年代に新しい建築としてヨーロッパを中心に流行する「モダニズム建築」に対して、当時保守的建築思想より批判的な活動をしていたドイツ人建築家ポール・シュルツェ=ナウムブルク [Paul Schlutze=Naumburg; 1869-1949]の建築思想に着目し、「モダニズム建築」の成立過程への影響関係を報告してきた。

本研究はその一環として、ナウムブルクの保守的建築思想のもとに、1928年に結成された保守的建築家集団「Der Block」によって、1933年のナチス政権獲得直後に建設され、シュトゥットガルトで今なお現存する「Kochenhof Siedlung: コッペンホーフ・ジードルンク」について、分譲住宅展の目的とそこで実際に建設された住宅についての概要の報告を行った。

1933年に開催されたコッペンホーフと、1927年に同シュトゥットガルトで開催されたヴァイセンホーフによる両派の展覧会は、単なる保守派と改革派の対立関係の表象としてではなく、両派の実験によって生まれた構法が、相乗効果として止揚され、近代ドイツのモダニズム建築形成へ影響を与えたと推測された。

2021 日本建築学会大会

[若手優秀発表賞]

国登録有形文化財の登録抹消事例の実態
 ～202例の抹消理由の分析～
 高田 晃

築50年を超えた古い建物の中でも後世に残すべき貴重なものは、国から「文化財」として認定され、それを登録有形文化財と称す。なお、認定されたものはその後重要文化財になることもある。そのような貴重な文化財が失われる事例が令和元年12月5日時点で登録抹消事例が118件あり、それらの抹消経緯を調査分析した。

経緯の把握できた106件を、抹消理由から4つのタイプに分けた。その内訳として①所有者の都合による解体は72件、②災害の影響による解体は20件、③都市計画による解体は5件、④建物の改修・復原に伴う文化財として認められなくなった事例は9件あった。106件のうち、7割を占める①所有者の都合により解体されたについては不動産売買や所有企業の廃業に絡む、経済的要因によるものである。登録文化財制度の原則である個人での建物の維持管理に限界があることが実際のデータを元に示せた。また④建物の改修・復原に伴い文化財として認められなくなった事例については、改修に際し文化的価値を損なう改修をおこなってしまった事例や半数以上の新たな材料を用いたため文化財として登録出来なくなった事例であった。

負の側面を調査することで、所有者に対する負担を軽減するための新たなシステム・取り組みを早急に実行することや、所有者に対する文化財の理解促進に努めるなど、今後の抹消事例を増やさないための策を打つことができるのではないかと。



文化財に登録された蔵が解体される様子(筆者撮影)



『DER BAUMEISTER 31. JAHRGANG, HEFT.11』p.387より引用

今後のRAKUに関するお知らせ

2022年4月1日、神奈川大学建築学部が新設されました。この新しい建築学部は、建物のみならず、都市や社会、環境に関する課題が複雑化、多様化する現代の状況に対応するために、これまでの建築学の枠組みに囚われない、より幅広い研究・教育の充実を目指しています。そのために、組織を2つの学系(建築学系、都市生活学系)と、各学系に属する5つのコース(構造コース、環境コース、デザインコース、住生活創造コース、まち再生コース)から構成しています(下図参照)。

本誌 RAKU は、これまで旧・工学部建築学科建築デザインコースと大学院工学研究科建築学専攻(デザイン系)の活動を記録・紹介する冊子として製作されてきましたが、上記の学部新設に伴い、今号からは、学部に関しては、旧・建築デザインコースを継承した新たなデザインコースのみならず、新設された住生活創造コース、まち再生コースを含めた、都市生活学系の活動を記録・紹介する冊子として生まれ変わりました(なお大学院は、今後も当面は工学研究科建築学専攻のままとなります)。昨年度の活動を紹介している本号の内容は、これまで同様、旧・建築デザインコースの活動が主ですが、次号以降は、少しずつ新設2コース独自の内容も掲載していく予定です。(デザインコース主任 中井邦夫)

建築学部HP



建築学部の構成 学系とコースの関係 (デザインコースは、建築学系と都市生活学系の両方に属する。)

建築学系

構造コース Structural Engineering

地震や台風に強く、経済的で合理的、環境に配慮した美しい建物をつくり、残す。そのために必要な新しい構工法や材料、構造解析の技術を学びます。

環境コース Environment

環境不可に配慮しつつ、熱、空気、音、光などの要素からなる建築内外の環境を良好に創出する。そのための知識や技術について学びます。

デザインコース Design

建築計画の基礎知識、デザイン理論や手法、建築史などを幅広く実践的に修得する。持続可能な社会を実現する、建築の新たなデザインを学びます。

住生活創造コース Habitation Design

人間の暮らしや住まいのかたちについて、家族、地域社会、地球環境という多角的な視点から見つけ、提案する。住まいの歴史、住宅設計、生活環境のデザインなどを幅広く学びます。

まち再生コース Town Regeneration

人とまちの関係性を見つめ、新たな「まち」のあり方を考える。既成概念にとらわれず建築や都市のあり方を提案できる知識や技術を学びます。

都市生活学系

デザインコース

内田 青蔵 | Seizo UCHIDA
教授
建築史研究室
[担当授業] 近現代建築史B、
建築グラフィックス 他
[部屋番号] 8-510

曾我部 昌史 | Masashi SOGABE
教授
都市デザイン研究室
[担当授業] 都市デザイン論、
建築デザインⅢ 他
[部屋番号] 8-61

中井 邦夫 | Kunio NAKAI
教授
建築計画研究室
[担当授業] 設計製図Ⅱ、
建築デザインⅠ 他
[部屋番号] 8-67A

六角 美瑠 | Miru ROKKAKU
教授
建築デザイン研究室
[担当授業] 建築設計論、
建築デザインⅡ 他
[部屋番号] 8-68A

姜 明采 | Myungchae KANG
助教
建築史研究室
[担当授業] 設計製図Ⅰ・Ⅱ、
建築グラフィックス 他
[部屋番号] 8-510

吉岡 寛之 | Hiroyuki YOSHIOKA
助教
都市デザイン研究室
[担当授業] 建築デザインⅠ・Ⅱ・Ⅲ 他
[部屋番号] 8-61

鈴木 成也 | Naruya SUZUKI
助手
建築計画研究室
[担当授業] 設計製図Ⅰ、
建築デザインⅠ 他
[部屋番号] 8-67

まち再生コース

高橋 寿太郎 | Jutaro TAKAHASHI
教授
不動産デザイン研究室
[担当授業] デザイン系不動産学基礎、
まち再生演習Ⅳ 他
[部屋番号] 9-62

野村 和宜 | Kazunori NOMURA
教授
建築保存活用研究室
[担当授業] 建築保存活用計画論、
まち再生演習Ⅲ 他
[部屋番号] 9-62

山家 京子 | Kyoko YAMAGA
教授
都市計画研究室
[担当授業] 都市計画、
設計製図Ⅰ 他
[部屋番号] 8-66A

上野 正也 | Masaya UENO
准教授
まちづくり研究室
[担当授業] まちづくり論、
まち再生演習Ⅰ 他
[部屋番号] 9-63

柏原 沙織 | Saori KASHIHARA
助教
都市計画研究室
[担当授業] 建築CAD演習Ⅱ 他
[部屋番号] 9-61

塩脇 祥 | Syou SHIOWAKI
助手
建築保存活用研究室
[担当授業] まち再生概論、
まち再生演習Ⅲ・Ⅳ 他
[部屋番号] 9-61

住生活創造コース

鈴木 信弘 | Nobuhiro SUZUKI
教授
住宅デザイン研究室
[担当授業] 住生活創造概論、
生活空間デザイン演習Ⅱ 他
[部屋番号] 9-63

須崎 文代 | Fumiyo SUZAKI
准教授
生活デザイン史研究室
[担当授業] 生活空間デザイン演習Ⅰ、
居住空間史 他
[部屋番号] 9-64

立花 美緒 | Mio TACHIBANA
准教授
居住環境デザイン研究室
[担当授業] 生活環境論、
生活空間デザインⅡ 他
[部屋番号] 9-65

印牧 岳彦 | Takahiko KANEMAKI
助教
生活デザイン史研究室
[担当授業] 設計製図Ⅰ
生活空間デザイン演習Ⅰ 他
[部屋番号] 9-64

高橋 玄 | Gen TAKAHASHI
助手
居住環境デザイン研究室
[担当授業] 設計製図Ⅱ、
生活空間デザインⅡ 他
[部屋番号] 9-65

学部共通

スタンリー・ラッセル | Stanley RUSSELL
特任教授
[担当授業] 建築デザイン特別講義、
建築批評特論Ⅱ 他
[部屋番号] 9-63

河内由希 | Yuki KAWACHI
教務技術職員
[部屋番号] 9-63

神奈川大学建築学部建築学科・大学院工学研究科建築学専攻 沿革

- 1928 米田吉盛が「横浜学院」創設(旧横浜市中区桜木町)
- 1929 専門学校令により「横浜専門学校」設立認可
- 1930 六角橋に移転、横浜キャンパス開設(5月15日 創立記念日)
- 1949 学制改革により「神奈川大学」設置
- 1952 神奈川大学整備拡張計画(設計:山口文象/RIA)
- 1965 神奈川大学工学部建築学科創設(初代学科長:谷口忠教授、定員80名)
8号館(建築学科研究室、製図室)竣工
- 1967 12号館(建築学科総合実験棟)竣工
- 1971 大学院工学研究科建築学専攻博士前期(修士)課程設置
- 1973 かなな会(建築学科同窓会)設立
- 1985 建築学科創設20周年 記念誌発刊
- 1990 大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程設置
- 1994 建築学科にシステムコースとデザインコースの2コース制導入
- 1998 横浜キャンパス再開発開始(2002年完了)
- 2005 RAKU(デザインコース年鑑)vol.1発刊
- 2006 建築学科に建築環境コース、建築構造コース、建築デザインコースの3コース制導入
第1回東アジア大学建築学術交流セミナー(以後毎年開催)
日本建築学会120周年記念大会を神奈川大学で開催
- 2008 神奈川大学創立80周年、「学校法人神奈川大学将来構想」公表
- 2015 建築学科創設50周年 記念誌発刊
- 2022 建築学部建築学科設立。建築学系、都市生活学系の2学系を設置し、構造コース、
環境コース、デザインコース、住生活創造コース、まち再生コースの5コース制導入



8号館

建築学科・専攻関連の主な学術交流協定校 * 派遣交換留学有り(U:全学、E:部局間)

- アジア: 同済大学(中国、1982~)、武漢理工大学(中国、1982~)、成均館大学校(韓国、2002~)、
国立台湾科技大学(台湾、*E 2005~)、モンクット王工科大学トンブリー校(タイ、*E 2019~)
- 欧州: デンマーク王立芸術アカデミー建築大学(デンマーク、2010~)、国立モンペリエ高等建築大学(フランス、*E 2013~)、
バスク大学(スペイン、*U 2017~)、ルツェルン応用科学芸術大学工学・建築学部(スイス、*U 2017~)、
チェコ工科大学(チェコ、*U 2018~)、カールスルーエ応用科学大学(ドイツ、*U 2018~)、
ケルン工科大学(ドイツ、*U 2018~)
- その他: タスマニア大学(オーストラリア、*U 2011~)、南フロリダ大学(アメリカ、*E 2020~)

RAKU バックナンバー



RAKUは、神奈川大学工学部建築学科建築デザインコースで2005年から発行しています。第6号以降は、毎号多彩なテーマの特集を組み、大学院生主体の取材と制作により、単なる学生作品紹介誌を超えた建築誌としても楽しめるように企画しています。第15号からは編集者の二階さちえ氏を起用し、第12号からご担当頂いているデザイナーのqp氏とともに、さらにパワーアップしました。読んで眺めてお楽しみください。(デザインコース主任 中井邦夫)

学生編集委員

制作代表 関川吹雪
制作副代表 兼田聖人
特集班 稲川大悟(代表)、安達萌子、西村和将、上條響、石井瞭亮、孫銘遠
建築探訪班 穂屋下直輝(代表)、池田直也、篠原光汰、猪狩勇斗、オインシャンゲン、黄冀、鄧波、鄭偉

【制作メンバー】

安達萌子、猪狩勇斗、池田直也、石井瞭亮、稲川大悟、オインシャンゲン、兼田聖人、上條響、黄冀、篠原光汰、関川吹雪、孫銘遠、鄭偉、トウハ、西村和将、范楨、穂屋下直輝、宮島里帆、劉芳彤

監修/中井邦夫

鈴木成也

特集ページ監修・編集協力/二階さちえ
デザイン/qp

「RAKU Vol.18」 発行/神奈川大学建築学部建築学科都市生活学系
発行日/2022年8月5日 [横浜キャンパス]横浜市神奈川区六角橋3-27-1



*REVIEW OF DIVISION OF URBAN AND LIFE DESIGN,
FACULTY OF ARCHITECTURE AND BUILDING ENGINEERING,
KANAGAWA UNIVERSITY*